九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

栄花物語の表現性についての研究

二宮, 愛理

https://hdl.handle.net/2324/4474906

出版情報：Kyushu University, 2020, 博士（文学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：

栄花物語の表現性についての研究

二宮　愛理

目次

目次……2

序章……6
一、〈文学性〉の研究史……6
松村博司……6
山中裕……7
河北騰……9
加納重文……10
二、「何を書くか」から「どう書くか」へ……11
三、各章の概要……12

第一章　巻五「浦々の別」における年次設定：史実を欺く『栄花物語』……15
はじめに……15
一、問題の所在……16
史実との相違点……16
先行研究……21
二、虚構対現実の構図1：召還と後見……23
津島知明氏の論……23
『源氏物語』との比較……25
三、虚構対現実の構図2：消えた詮子病悩……28
深澤三千男氏の論……28
史実との比較……31
四、彰子入内のタイミングと道長の暗躍……35
おわりに……37

第二章　正編における引歌表現：諸行無常への導き……39
はじめに……39
一、先行研究……40
松村博司『栄花物語の研究』による引歌一覧……40
源氏物語の引歌……43
問題の所在……46
二、用例数と内容の関係……46
巻別引歌用例数……47

引歌が多い巻の内容……48
六つの巻をどう捉えるか……53
三、引歌が多い巻で読む『栄花物語』……56
〈道長中心〉と〈道長以外〉の視点……56
引歌が多い巻によって作られる「あらすじ」……66
おわりに……68

第三章　巻八「はつはな」における伊周の遺言：姫君たちの退場……69
はじめに……69
一、伊周の遺言場面……70
伊周の遺言……70
伊周の娘たちの結末……73
問題の所在……76
二、宮仕えする太政大臣の女……77
藤原為光とその女……78
『栄花物語』における為光女……81
『栄花物語』における太政大臣の女……84
三、『栄花物語』の意図……86
為光四女に注目させる構成……86
「まこと」で始まる二回目……88
二度目の言及がもたらすもの……90
おわりに……91

第四章　巻八「はつはな」における伊周の遺言：父親たちの遺言……93
はじめに……93
一、他資料利用の先行研究……95
内容について……95
文体について……98
二、伊周の遺言……103
伊周の心配と訓戒……103
伊周家の結末……105
語り手の造型と主観的表現……106
伊周の長台詞……108
遺言場面についての先行研究……111
三、八宮の遺言……113
八宮の心配と訓戒……113

八宮家の結末……115
四、二つの遺言の類似……116
娘の結婚について……119
おわりに……122

第五章　『源氏物語』「葵」の巻における雲と雨の哀傷……123
はじめに……123
一、問題の所在……124
本文：雲と雨の哀傷……124
先行研究……126
問題の所在……131
二、高唐賦と有所嗟……132
有所嗟……132
高唐賦……133
三、日本における受容……135
日本における〈高唐賦〉……135
日本における〈有所嗟〉……139
四、本文再考……140
「為雨為雲」の訓読……140
本文再考：時雨の日の哀傷……144
「自嘲」の例……145
おわりに……147

第六章　巻二十六「楚王の夢」における雲と雨の哀傷……149
はじめに……149
一、「楚王の夢」における「葵」の影響……150
先行研究……150
嬉子の葬送と哀傷……151
葵の上の葬送と哀傷……154
二者の対照……157
二、史実にはない葬送の夜の「雨」……160
八月十五日の雨……160
文学的潤色の可能性……161
三、雲と雨の哀傷……164
突然の雨の正体……164
赤い雲の正体……166

典拠を踏まえた読解……169
おわりに……169

終章……172
一、各章の振り返り……172
二、今後の展望と課題……172

礎稿一覧……174

付録：正編の引歌一覧……175

序章

一、〈文学性〉の研究史

『栄花物語』の研究史において、その〈物語性（文学性）〉が注目され、また同時に、一見その対極に位置するように思われる〈歴史性〉という二つの性質が盛んに論じられ始めたのは、戦後になってからであろう。歴史的事実たるものを物語の手法で書くという形態によって、『栄花物語』は長らく歴史とも物語（文学）とも捉えられるという状態にあったのである。福長進氏はその状況を次のように概観する。

> 『栄花物語』研究の一つの流れとして、この曖昧な評価は物語性（文学性）と歴史性という二つの性格が作品に内在することに起因すると見做し、両性格の精緻な解明に向かう営みがあった。ほとんどの論者は、『源氏物語』蛍巻の物語論を介して定式化されたとおぼしき認識の枠組、すなわち「歴史＝事実↔物語（文学）＝虚構」という二項対立的な図式を自明の前提として二元的性格のそれぞれを明らかにしていく。[1]

歴史とも物語ともつかないという状態は両方の性格を持つことに起因するのであるから、『栄花物語』内に見られるそれぞれの要素に注目し、取り出して分析するといった手法が取られていたのである。

松村博司

それら二つの性格のうち、〈物語性（文学性）〉について、松村博司氏は次のように指摘した。

---

[1] 福長進「栄花物語研究の動向」　歴史物語講座刊行委員会『歴史物語講座第二巻　栄花物語』風間書房／一九九七　二二六頁

物語的手法といふものは、特に源氏物語においては、歴史に深い関心を寄せながら、筆者が女性なるが故にかへつて従来の歴史に書かれない部分を描かうとする傾向が見られる。たとへば別離の悲しみを綿々と描くことはその一例である。（中略）物語は女性―大方歴史の裏面に隠れ、残される者の立場にある―の読み物として、又次第に教養の具としても書かれたが故に、歴史に描かれない人間の心情を殊更に描き、人情の機微を穿つ所に、女性にとつての道々しく委しい事もおのづから語られる。物語の変遷に応じて物語性の属性も種々あり得るが、歴史に描かれない部分を描くといふ事も、属性の一つと見てよいであらう。栄花物語における物語的表現もまた多分にこのやうな性質を持つてゐる。（中略）政治の裏面に隠れた婦女子、強権に敗れた失意の人々はいふに及ばず、甚だしば〳〵強権者さへも一個の人間として一喜一憂する、すべて歴史の波間に浮沈する個人の様態と心理と、善意の人間性とを描き、陰険悪辣な策動・陰謀の内部に決して深入りしようとはしない。ここに、いはれるやうにこの物語の長所と短所（一般にはむしろ短所のみが取り上げられてゐる）とがあるが、唯一の女性のための文学的歴史書の当然持たなければならない特色と限界とであつた。[2]

『栄花物語』は、作り物語の手法、特に『源氏物語』に大きく影響を受けながら、人々の心情や機微など、漢文による史書では書かれないものを書く。そういった点に『栄花物語』の〈物語性〉というものを見出しているのである。

山中裕

一方、その〈物語性（文学性）〉の対極にあるとされた〈歴史性〉について、山中裕氏は「外見上の歴史性[3]」として「編者の主体性」「編年性」「材料の私的な面をとりあげない」という三点を挙げる。その特徴に基づき、『栄花物語』の正編を巻二～十四、巻十五～三十

---

[2] 松村博司『栄花物語の研究』第三篇第一章「内容（一）―組織と歴史的文学的特質―」刀江書院／一九五六　四一七～四一八頁

[3] 山中裕『平安朝文学の史的研究』第三章第二節「栄花物語の本質」吉川弘文館／一九七四　二二四頁　＊初出　坂本太郎ほか編『国史大系書目改題　上』「栄花物語」吉川弘文館／一九七一

に分け、前者を「国史風」、すなわち、編年的で、事件の順序が正確であり、人物の官位等が比較的正確で、用いた材料の私的な面を取り上げないという、「外見上の歴史性」の特徴を持つ巻であるとした。そして後者は「物語文学風」とし、前者とは対照的に、編年的でなく、事件の順序や人々の官位が不正確で、誇張が強く、文章が優美であり、用いた材料の私的な部分も取捨選択していないと指摘し、道長の栄花を記した物語であるとしている[4]。

また、山中氏は「内面的な、いわば史観というべきもの」によっても『栄花物語』の〈歴史性〉を指摘する。

> すなわち三十巻の構成は、皇室と藤原氏の系譜的な事項から書きはじめて、宮廷貴族社会における雑多な生活史の展開となってゆく。そこには生活史の実態や人物の容貌・性質等が概括的に述べられており、先述したように一貫性のない事件が述べられてはいるが、その中に、確固とした藤原氏の発展という一つの主題が認められる。その主題が、後見の重大さということを中心に外戚との結びつきの必要性を語ってゆく。これは作者の意図の中に自ずとにじみ出てきた作者の史観ともいうべきものであろう。この叙述が明暗二面を交互にくり返しながら進められており、その明暗二面のえがき方の中には、文学的手法のするどさも見出し得る部分がある。
>
> 結局、栄花物語は編年的記録体の事実を軸にして、その間に物語的叙述をはめこみながら、筆を進めている。従って非常に歴史的な一面が強いと同時に、文学的な面も強く見られ、性質の異なった二つの場面が、それぞれの性格を発揮しつつ、合体して一つの作品を成立させているのである。或る巻では歴史的な面が特に強く現われ、また或る巻では文学的な面が特に強く現われたりするのであるが、各巻毎に両面が、からみ合っているとみるのが妥当であろう。[5]

藤原氏の発展、後見の重大さ、外戚との結びつきの必要性といったテーマを作者の「史観」と捉え、編年性を持った歴史叙述の中に現れるこれらも〈歴史性〉と捉える一方、それによ

---

[4] 山中裕『歴史物語成立序説』第三章第一節「栄花物語の歴史性と文学性」東京大学出版会／一九六二　一五六頁　＊初出「栄花物語の歴史性と物語性」「日本歴史」四八／一九五二

[5] 注3　二二八頁

ってできあがったものには、一種の〈文学性〉も見出せるという。山中氏は『栄花物語』の〈文学性〉について否定はしないとしつつも、次に見るように、その編年性という性格によって主題を維持することの困難があると述べる。

そしてこの編年性において注意すべきことは、一つの事柄に関する主題の一貫性、あるいは、主題がはっきり現れないことである。例えば、六国史などの編年体記録においての特徴は、時間的順序の中に無関係なる事柄が相継いで記録されるのが大きな特徴である。栄花物語にも時は重要な要素ではあるが、物語においては、まず主題がはっきりしていることと、物語（ストーリー）に一貫性を保とうとする要素が表面に強くあらわれているべきである。しかし本書は、例えば、花山たづぬる中納言の巻を例にあげると、摂政伊尹の薨去、兼通の折衝、女御媓子の立后、中宮昌子皇太后、兼通・兼家の不和、兼通の任太政大臣、兼通・頼忠の仲の睦まじきこと、女御超子御懐妊、三条院御誕生、内裏焼亡等々とあって、特にこの巻の主題というものは、それ程はっきりしておらず、ただ編年の中にこれらの事実が次々と並べられてゆくのが特徴である。[6]

『栄花物語』は歴史小説や大河ドラマとは異なり、常に作品の中心となるべき「主人公」を設けていない。藤原道長を主人公と見る向きもあるが、巻によってその注目度は大きく異なるし、三代にわたって娘を中宮の座に送り込み、皇統の後見として威勢を振るった道長が作品の中心になることは当然のことであろう。山中氏の考える〈物語性〉が「主題がはっきりしていること」「ストーリーに一貫性を保とうとする要素が現れること」であるならば、確かに『栄花物語』の編年性はそれを妨げることもあるだろう。

河北騰

次に河北騰氏は、『栄花物語』には「或る種の長大な説話ふうの「口語り」を記述する場合には、その叙述の上に意識的に加えられた改変が、かなり数多く存在するという特徴」があることを指摘する。そして、その理由を、正確な情報が得られなくなっていたこと、関係各所への忌諱に触れることを避けたこと、作者の心に思うものがあって詠嘆や感動を投げ

---

[6] 注3　二二五～二二六頁

かけたことなどと挙げている。また、そうした潤色を通して、『栄花物語』の〈物語性〉について、次のように述べる。

歴史事象を取扱った栄花物語と呼ぶこの作品は、時間的な流れの中に、生滅する人間の世の、盛衰や哀歓、つまり愛別離苦の種々相に対して、やむことのない強い関心や感動の心を以て書き記された歴史物語、そういう一面の性格を確かに有していると明言して良い。然も、それは、読者対象として恰も婦女子を予想でもしているが如くに、感傷的・主情的な傾向を帯びた叙述の方法なのであった。

こうして、栄花物語には、史的事実をまま改変し、または潤色や虚構を加えて表現し、または右のような意図のもとに、ことさらに筆を曲げるようにして叙述された記事なども、やはり存在しているであろうという特色を、私たちは認め得るのである。

このような特色を指して私は、特に栄花物語の「物語的性格」、略して物語性と呼びたいのであるが、栄花物語の記事の中には勿論、正確厳密な物も多いけれども、往々にして世間では、信憑性が乏しいと貶められる物がある所以は、思うに右のような性格に基づく所なのであろう。[7]

河北氏も松村氏と同様に、人情的なものを表現するという意図を〈物語性〉と呼んでいる。

加納重文

また、加納重文氏は、『栄花物語』の記事が「事実を重視しない」こと、「関連する人物の心情や全体的情趣」が主要な要素となっていることに注目し、次のように述べる。

『栄花物語』の描写は、強者を仰ぎ讃美する同じ素直さで、弱者のあるいは敗者の不運を悲しむ。物事の筋道とか道理とか正義とか能力とか、何かそういうよるべき理論を持つ人間からみれば、無節操なほどの公平さである。しかしそこに、『栄花物語』の本領がある。すべての事柄を、情趣としてとらえる。それが本来どういう立場で、どのよう

---

[7] 河北騰『歴史物語論考』第一編第二章「栄花物語の叙述法」笠間書院／一九八六　三五頁

に起きたかなどは、問題でない。めでたいことは、このうえなくめでたいように、悲しいことはかぎりなく悲しいように人間のさまざまな心情を呼ぶ、一つの事柄としてとらえる。そこに物語の価値を、確信するのである。[8]

河北氏の説とも通ずるものがあるが、加納氏は、この考えは前掲の松村氏の説と大筋において隔たりのないものであると自ら述べている。

二、「何を書くか」から「どう書くか」へ

ここまで、松村、山中、河北、加納各氏による〈物語性〉の定義を見てきたが、これらの研究において、〈文学性〉として重視されていることは、概ね「人の気持ち」を描くということであろうと思われる。山中氏は、主題と物語の一貫性を重視し、編年体という性質上、『栄花物語』ではそれが実現していない向きもあることを述べていたが、その「主題」が諸氏の述べる「人情を描く」というものであるとすれば、『栄花物語』にはその姿勢が一貫して叙述に現れていると言えるのではないだろうか。

こうした〈物語性〉の定義について、福長進氏は次のようにまとめる。

> これまで「物語性」あるいは「文学性」という語は、基本的には『源氏物語』蛍巻の物語論によりつつも様々に用いられてきた。六国史の通り一遍の叙述に対して、人情の機微を穿つ叙述の在り様を「物語性」といってみたり、あるいは虚構を用いて真実を描くことを「物語性」といったり、「あはれに悲しい」人々に感動を与えるような場面の形象やそういう内容の逸話の導入も「物語性」の一つと数えたり、明暗対比的な叙述の構成をも「物語性」と捉えたりした。[9]

さて、これまで見てきたように、従来の研究では、『栄花物語』の〈文学性〉を考える際、「何を書いているか」という点ばかりが重視されていたように思われる。しかし近年、物語

---

[8] 加納重文『歴史物語の思想』第一編第四章「物語認識」京都女子大学研究叢刊／一九九二　一三三頁　＊初出　「栄花物語の物語認識」「女子大国文」八四／一九七八

[9] 注1　二三二頁

としての『栄花物語』を考えるにあたって、「語り」や修辞といった「表現」の観点、つまり「どのように書いているか」から考察するという点が注目されるようになった。福長氏が最後に挙げた「明暗対比的な叙述の構成」は、その先駆けであったと言えよう。

その「表現」の観点についての一石を投じたのが『栄花物語：歴史からの奪還[10]』である。高橋亨氏は「序説」にて次のように述べる。

> 歴史叙述にせよ虚構の物語にせよ、その主題的な表現と物語内容との関連こそが問題なのである。『栄花物語』の表現の基底には、『源氏物語』の表現の方法が強く作用している。そのことを出発点としながら、『源氏物語』から「歴史物語」へという文芸史的な過程を、あらためて考察することが本書の課題である。
>
> 「歴史」と「物語」とを、言説の素材内容の差異としてではなく、語りの表現方法の問題として捉えたい。[11]

これにしたがって、同書に所収された各論は「語り」や「書く」ことに注目したもの、史実との齟齬に注目したもの、作中での特定人物の描かれ方に注目したものなど、様々な視点から『栄花物語』の考察に取り組んでいる。

今後はこうした考察を積み重ねることにより、どういった表現を取ることによって『栄花物語』ができあがっているか、演出、脚色の傾向やその狙いなど、どこに文学としての面白さを持っているか、という点を追究することに研究の重点が移ると思われる。

本論文もそうした研究の一翼を担うべく、『栄花物語』において、演出や脚色、その他様々な技巧がなされたと思われる部分について考察し、その意図を明らかにすることで、文学作品としての『栄花物語』について理解を深めることを目的とするものである。

三、各章の概要

最後に、各章の概要を述べて序章を終えたい。

---

[10] 高橋亨、辻和良編『栄花物語：歴史からの奪還』森話社／二〇一八

[11] 高橋亨「物語と歴史の境界あるいは侵犯」　高橋亨、辻和良編『栄花物語：歴史からの奪還』森話社／二〇一八　六頁

第一章では、巻五「浦々の別」における史実との齟齬について論じた。特に、敦康親王の誕生時期が史実の年次とずれていること、藤原伊周が配流の前に父道隆の墓に詣でていること、女院詮子の病悩を書かないことの三点と、それらと連動して時期が変わっていると思われる伊周兄弟の帰京について注目した。従来は『源氏物語』で光源氏が須磨に下ったことと重ね合わせてのオマージュであると考えられていたが、年次が操作された理由はそれだけではなく、『栄花物語』としての伊周像や、構成の問題にも関わっているのではないかということを述べた。

第二章では、正編（巻一～三十）の引歌表現に注目し、これまでの先行研究を整理、統合して数量的な分布を調査した。引歌が多く見られる巻は、内容としては道長家の栄花を賛美するもの、伊周家や顕光家の没落を伝えるもの、疫病などによる社会不安を描くもの、諸行無常を語るものなど、多岐にわたっている。引歌はそれらの内容を印象付けるために文章を飾り、美文調にしていると考えられる。正編の中で引歌の多い巻の内容を追うと、勝者の栄花、敗者の悲哀を語る一方で、最終的に、両者とも同じ「死」による諸行無常を感ずるという流れが浮かび上がってくることを明らかにした。

第三章では、巻八「はつはな」にて死去する伊周の遺言に注目し、その前後の構成について論じた。伊周の遺言には、自分の死後、没落した子女たちが女房などに身を落とし、家の恥となるのではという懸念がある。また、遺言の前後に藤原為光の四女の記事が挿入されており、それらはまさしく伊周の懸念する没落した姫の姿であることを指摘した。彼女の描写は伊周の懸念が現実のものとなることの伏線であり、伊周の娘たちも同様に物語の中心から退場していく哀れを描いたものではないかと推察した。

第四章では、前章に引き続き伊周の遺言に注目し、その内容がどのようにして作られたかという点を論じた。「はつはな」の巻には『紫式部日記』を利用した箇所があることが指摘されており、伊周の遺言も同様に他資料の存在が伺えるかという点について、文体の面から検証した。その結果、長大な伊周の台詞には、『源氏物語』の宇治の八宮の遺言や、『栄花物語』巻十五「うたがひ」に見られる道長の独白との類似が見られ、これらとの関連性が意識されて創作されたのではないかとの結論を得た。

第五章では、次の第六章にて言及する巻二十六「楚王の夢」の故事に関連して、『源氏物語』「葵」の巻の哀傷表現について論じた。葵の上への哀傷の言葉には、漢詩文による故事が含まれているが、その典拠となった作品は二つあり、「哀傷」の意味はそのうちの一方にのみ含まれていることを確認した。また、「葵」の巻の本文では、その典拠がある部分の訓

読によって和歌的な哀傷表現も内在させるという工夫がなされているのではないかということを述べた。

第六章では、「楚王の夢」における『源氏物語』のオマージュについて論じた。道長女嬉子の葬送の日に雨が降ったという史実と齟齬していることは、従来は道長賛美の一環であると考えられてきた。しかし、前章での考察を踏まえると、「楚王の夢」の故事を用いた哀傷表現には「暮雨」の要素が不可欠であり、それを表現するための潤色ではないかと指摘した。一方、嬉子の夫東宮が見た「雲」は朝の時間帯であることから、これが「朝雲」に当たり、『源氏物語』を踏まえつつ、漢詩文の知識に則った表現であることを明らかにした。

なお、『栄花物語』を始めとする古典作品の引用は特に断りのない場合、新編日本古典文学全集（山中裕ほか校注／小学館／一九九五～一九九八。以下、新編全集と略称）により、冊数と頁数を付記した。『日本紀略』の引用は新訂増補國史大系（黒板勝美ほか編／普及版／吉川弘文館／一九七九）により、『小右記』の引用は大日本古記録（東京大学史料編纂所編／岩波書店／一九五九～一九八六）によった。引用文中の傍線等は特に断りのない場合、引用者による。旧字、旧仮名遣いを一部改めたところがある。

第一章　巻五「浦々の別」における年次設定

：史実を欺く『栄花物語』

はじめに

『栄花物語』巻五「浦々の別」は、中関白家を取り巻く不穏な空気の中、話が始まる。左大臣藤原道隆の死後、内大臣として権勢を振るっていた長男伊周は、花山院に矢を向けたことなどの罪により、長徳二年、弟隆家とともに配流の宣旨を下される。左大臣の息子として将来を約束された立場であったはずだが、これにより、中関白家は没落の一途をたどり、代わって道隆の弟道長に栄花の道が開けることとなる。その後、京に残された定子は、帝の子を二人産んでいる。『栄花物語』では、長徳二年十二月には脩子内親王が、長徳四年には敦康親王が生まれたということになっている。その敦康親王誕生の恩赦により、同年、伊周と隆家は帰京できることとなり、亡き母の墓前に参ったところで「浦々の別」の巻は終わる。この展開は、伊周が須磨に下る光源氏に準えられ、親王誕生の恩赦は、光源氏が東宮（後の冷泉帝）の後見として帰京を許されたことに準えられていると言われている。

『栄花物語』を「歴史物語」として素直に受容していると、一読これが史実かと思えてしまうのだが、この年次を『小右記』や『権記』、『日本紀略』といった他の史料に照らし合わせると、年次、できごとの順序に大きな齟齬のあることが分かる。『栄花物語』では、伊周兄弟は敦康親王誕生の恩赦によって帰京できたことになっているが、史実では敦康親王が生まれるよりも前に帰ってきているのである。またそれ以外にも、検非違使が二条の邸を捜索している際の伊周の居所であるとか、女院詮子が大病を患っていること、伊周たちの母高階貴子の死など、『栄花物語』にしかない記述や『栄花物語』では書かれていない事項が存在する。『栄花物語』は仮名で書かれた物語であり、その編年体叙述にはだいぶ緩やかな部分があるとはいえ、六国史の跡を継いでいるとまで言われている。そんな作品が、皇子の誕生という重大事について、年次を間違えて記すなどということがあるだろうか。本章では、この敦康親王に関わる年次のずれに注目し、『栄花物語』に働いた意図を探ってゆく。

史実との相違点

まずは『栄花物語』と史実との相違点を確認する。『栄花物語』と史実の関係を年表にまとめると〈**表1**〉のようになる。細かな相違点は多々あるのだが、今回の問題の中心にある「敦康親王の誕生時期」と、「伊周の墓参り」「詮子の病悩」に注目し、それらに連動してずれていると見られる「伊周兄弟の召還時期」を考えてみたい。

	年次	栄花物語	史実
巻五	996	伊周・隆家に配流の宣旨	
	長徳2	四月二十四日　伊周・隆家配所に出立	四月二十四日　伊周・隆家に配流の宣旨（小、紀、補）
			六月八日　二条第焼亡（小、紀）
		十月二十日余　高階貴子逝去	
		十二月二十日ごろ　脩子内親王誕生	十二月十六日　脩子内親王誕生（紀）
	997	二条第焼亡	
	長徳3		**三月二十五日　東三条院御悩大赦（紀、百）**
		夏　高階成忠、定子に参内を進める	
			四月五日　伊周・隆家に召還の宣旨（百）
			四月二十二日　隆家入京（小）
			五月十三日　隆家入京（略）
		定子・脩子内親王参内	六月二十二日　定子・脩子内親王参内（小、紀）
		定子懐妊、退出	
		冬　承香殿元子懐妊	
			十二月　伊周入京（補）
	998	**敦康親王誕生**	
	長徳4	四月　伊周・隆家に召還の宣旨	
		五月三、四日　隆家上京	
		五月五日　隆家妻と歌贈答	
		六月　元子太秦広隆寺で水を産む	
		高階成忠逝去	七月（二十五日？）　高階成忠逝去（紀）
		十二月　伊周帰京	
		伊周・隆家、貴子の墓所に参る	
巻六	999	彰子裳着	二月九日　彰子裳着（御、紀、世）
	長徳5		六月十四日　内裏焼亡
			十月　入内準備（御、小、権）
	長保元	十一月一日　彰子入内	十一月一日　彰子入内（御、小、権、紀、略）
			十一月七日　敦康親王誕生（小、権）

表1『栄花物語』と史実の年次比較

＊作成にあたって、新編全集を参考にした。表中の略号は、御＝御堂関白記、小＝小右記、権＝権記、左＝左経記、紀＝日本紀略、略＝扶桑略記、百＝百練抄、補＝公卿補任

伊周の墓参り

巻五「浦々の別」は長徳二年の四月、賀茂の祭が終わったとの記述から始まる。巻四「みはてぬゆめ」の巻末で既に伊周たちの悪事が明らかにされており、その処分に対して伊周周辺は戦々恐々としている。そして配流の宣旨が下り、逃れられないことを悟った伊周は、木幡の父の墓に一目参ろうと密かに脱出を試みる。『栄花物語』では四月二十四日に配所に出立したことになるが、『小右記』などによると本来この日は宣旨が下った日であり、伊周の逃亡劇は五月にずれ込む。そうした日付の差異もあるが、今回注目したいのは、その伊周の逃亡先である。

> 殿、「今は逃れがたきことにこそはあめれ。いかでこの宮のうちを出でて木幡に詣りて、近うも遠うも遣はさむ方にまかるわざをせん」と、思しのたまはするに、この者ども立ち込みたれば、おぼろけの鳥獣ならずは出でたまふべき方なし。「夜中なりとも、なき御影にも今一度参りてこそは、今はの別れにも御覧ぜられめ」といひつづけのたまはするままに、えもいはず大きに、水精の玉ばかりの御涙つづきこぼるるは、見たてまつる人いかがやすからむ。
>
> （1：二四〇頁）

『栄花物語』では、父道隆の墓所である木幡へ参り、次に菅原道真が祀られている北野へ詣でたことになっている。しかし、『小右記』長徳二年五月二日では「愛太子山」[1]、『日本紀略』長徳二年五月四日では「春日社」[2]となっている。実際のところどれが正しいのかは不明であるが、『栄花物語』では、伊周が厳戒態勢の中で二条第を脱出できた理由を父道隆に祈った霊験によるものであるかのように描いている。

> 内大臣殿、今宵ぞ率て出でさせたまへと、思し念ぜさせたまふ験にや、そこらの人、さ

---

[1] 「道順朝臣相共向愛太子山」　東京大学史料編纂所編『小右記　二』大日本古記録／岩波書店／一九六一

[2] 「権帥自春日社帰京」　黒板勝美ほか編『日本紀略　後篇』新訂増補國史大系／吉川弘文館／一九七九

ばかり言いののしりつれど、夜中ばかりにいみじう寝入りたれば、御おぢの明順ばかりとともに、人二三人ばかりして盗まれ出でさせたまふ。御心の中に多くの大願を立てさせたまふ験にや、事なく出でさせたまひぬ。

（1：二四二頁）

果たして木幡へ脱出した伊周は父道隆の墓に詣で、泣く泣く自らの無実を訴えた。続いて北野に移動し、自分と同様に大宰府へと送られた菅原道真にも願掛けをしたとある。伊周が脱出した翌朝から二条第は検非違使の強制捜査に遭い、壁を割ったり床板を剥がしたりなど、かなり荒々しい捜索が行われている。その野蛮さに対し、伊周は光源氏に喩えられるほどに優美な才人であることが強調されている。

詮子の病悩

続いて、女院詮子の病悩についてである。こちらは**〈表1〉**にある通り、『栄花物語』からその事実がすっかり抜け落ちている。この長徳三年の上半期に当たる『栄花物語』のできごととして、定子が脩子内親王と共に参内したことが挙げられる。この参内は、『栄花物語』では定子にとっての祖父、高階成忠の「男皇子が生まれる兆しであると思われる夢を見た」との言によって実現したかのように書かれている。

「たびたび夢に召し還されるべきやうに見たまへるに、かく今まで音なくはべるをなむ。なおほさるべう思したちて内裏に参らせたまへ。御祈りをいみじう仕うまつりて、寝てはべりし夢にこそ、男宮生まれたまはむと思ふ夢見てはべりしかば、このことによりて、なほ疾く参らせたまへと、そそのかし啓せさせむと思ひたまへられてなむ、多くは参りはべりつるなり。御文にては落ち散るやうもやと思ひたまへてなん」などそそのかし、泣きみ笑ひみ夜一夜御物語ありて、暁には帰りたまひぬ。（中略）宮の御前の、内裏参りのこと、そそのかし啓しつるにぞ思したたせたまへる。

（1：二七五〜二七六頁）

実際の定子の参内は、『小右記』によると六月二十二日となっている。本来ならば、伊周と隆家の召還はこれよりも前に決定し、二人とも帰京が済んでいる。召還の理由は、抜け落ち

ている詮子の病悩を受けて、その平癒祈願のための恩赦によるものであると『百錬抄』[3]は伝えている。しかし『栄花物語』は展開を大きく変え、この参内によって帝と定子との間に敦康親王が生まれることになり、その後見役となるべき親族として伊周兄弟を呼び戻すという形にしたのである。

また『小右記』によると、定子の参内の六月二十二日、おそらく母詮子を見舞うためであろう、東三条院に行幸があった。そのために人手がそちらに取られ、定子の参内に奉仕する者がいなかったのではないかということが松村氏[4]や新編全集[5]によって指摘されている。それにもかかわらず、『栄花物語』では道長がその参内の手配を行ったかのように書かれており、松村氏は「事実の裏づけの得られない道長賛美の言」としている。

敦康親王の誕生時期

最後に、その敦康親王に関わる部分を確認する。長徳四年（998）になり、架空であるにもかかわらず、三月に出産であると時期が明言される。

> はかなく月日も過ぎぬ。長徳四年になりぬ。若宮三つにならせたまひぬ。いかにいとどうつくしうと、思ひやり聞えさせたまふも、いといと恋しうまめやかに思し出づるをり多かるべし。中宮には三月ばかりにぞ御子生まれたまふべきほどなれば、御慎みをよろづに思せど、…（中略）僧都の君もよろづに頼もしく仕うまつりたまふ。いかにいかにと思しわたるほどに御気色あり。ささとののしり騒ぐほどに、あはれに頼もしき方なし。ただこの但馬守ぞ、よろづ頼もしう仕うまつる。二位もかくと聞きたてまつりて、居ながら額をつき祈りまうす。
>
> （1：二八二〜二八三頁）

---

[3]「（長徳）三年四月五日。前帥。出雲権守等可召返之由宣下。去月廿五日依東三条院御悩。非常赦可潤恩詔哉否。令諸卿定申。遂有恩免也」　黒板勝美ほか編『百錬抄』新訂増補國史大系／吉川弘文館／一九七九

[4]松村博司『栄花物語全注釈　二』角川書店／一九七一　一〇八頁

[5]山中裕ほか校注『栄花物語1』新編日本古典文学全集／小学館／一九九五　二七七頁頭注

しかし『小右記』が伝える通り、六月下旬から参内したとすると、翌三月に出産予定というのは早すぎる。『栄花物語』では参内の日付は明記されていないが、「はかなく夏にもなりぬれば」（1：二七四頁）という語が見えてから成忠の発言があった。史実よりももっと早く参内の準備が整っていないと、『栄花物語』内でもつじつまが合わないのである。

また、実際は敦康親王が生まれるよりも前に死亡しているはずの高階成忠が一生懸命安産を祈念しているというさまが書かれている。敦康親王の誕生後にも、無事に生まれた親王について、前述の「夢」に関わることを成忠が述べている部分がある。

二位は夢をまさしく見なして、「かしらだにかたくおはしまさば、一天下の君にこそはおはしますめれ。よくよく心ことにかしづきたてまつらせたまへ」と、つねに啓せさす。

（1：二八四頁）

成忠は既に死んでいるのであるから、ここは明らかに創作部分である。予言を思わせる「夢」が実現したという流れについて、新編全集は頭注[6]にて「伊周・隆家が召還されるという『栄花』の論理が成忠の夢見に顕現し、それに沿って歴史叙述が展開する」と指摘する。

そして、本来敦康親王が生まれるはずであった時期に当たる部分は、次の巻の領域にある。巻六「かがやく藤壺」は彰子の裳着から始まり、すぐに入内という展開になる。『栄花物語』は彰子入内の記述に続いて定子や他の女御たちに言及し、中でも帝との子に恵まれた定子に注目しているが、史実であれば、この入内の六日後に敦康親王が誕生しているのである。

以上のように、巻五「浦々の別」に見られる史実との相違点は、大きく三つある。「伊周の墓参り」は相違点と言うよりはどれが本当のことか定かではないというレベルであるが、「詮子の病悩」と「敦康親王の誕生時期」に関しては、片や事実が抹消され、片や時期が大きく変えられている。それに伴い、伊周と隆家が召還される時期や理由が変わっている。本来であればちょうど一年程度の配流であったが、二人の受難は実際よりももう一年延びていることになる。こうした多くの、しかもかなり重要なできごとについて年次的な操作が行われていることは明らかであるため、ここには作者の意図的な創作が働いているのではないかと思われるのである。

次節では、これらの相違点について、先行研究がどのように捉えているかを確認する。

---

[6] 注5　二七六頁頭注

この冒頭も含め、巻四「みはてぬゆめ」及び巻五「浦々の別」で描かれる伊周の配流事件と、「須磨」「明石」の光源氏の配流事件は、早くは山中裕氏[7]により、その関係性が指摘されている。「浦々の別」の本文中でも、帰邸した伊周の姿を「かの光源氏もかくやありけむ」（1：二四八頁）と評していて、『源氏物語』を意識しているのは間違いない。山中氏は、この『栄花物語』と『源氏物語』の関係に加えて、本章の主題でもある敦康親王誕生を始めとした、このあたりのできごとの年次についても詳しく述べている。

> さてそこで栄花物語のこの事実を調べてみるに伊周・隆家の召還は皇子御誕生によるものではなく、東三条院の御悩によるものである事が日本紀略・小右記・百練抄等によって明らかである。（中略）召還の原因を皇子御誕生としたのは栄花物語のみである。これこそ源語を模倣したためであろう。そして皇子御誕生は長保元年の事実であって、伊周召還から二年後の事実である。（中略）このような編纂状態の混乱は栄花の著者が長徳三年の事件である伊周隆家召還の原因をその原因である東三条院の御悩とせず、わざわざ源語に模して皇子御誕生に結びつけたため、長保元年の事件を挿入するという無理な編纂状態を呈してしまったと考えられる。[8]

山中氏によれば、混乱の元は本来の恩赦の事由である「東三条院の御悩」としなかったためであり、さらには『源氏物語』で、光源氏を東宮（後の冷泉帝）の後見とするために召還したことに準えたからだという。『栄花物語』では光源氏と伊周、東宮と敦康がそれぞれ対応するような人物設定になっているのだが、実際の年次のままでは敦康の誕生が遅すぎてうまく対応しないのである。

諸研究は概ね、この「源氏物語に似せるために操作を行っている」という意見に賛同して

---

[7] 山中裕『歴史物語成立序説』第二章第五節「栄花物語における源氏物語の影響」東京大学出版会／一九六二　＊初稿「国語と国文学」三〇・七／一九五三

[8] 注7　一三五頁

いるようである。河北騰氏[9]は「作者の意識的な虚構、更に言えば物語な創作という事に、落ちついて来ない訳には行かない」とし、同論にて、この巻を「貴種流離譚にほぼ近い」として、次のように述べる。

「浦々の別れ」は、採録している事柄自体から見れば、これに先行する「見果てぬ夢」及び、次に続く「耀く藤壺」等の各巻と、記事内容は全く密接な関係などを有していない。そして一巻の大半は、挙げて伊周という光源氏を彷彿せしめる貴公子の、哀れに悲しい流離譚として、首尾照応した纏まりを持つように構成されていることが判明した。これは、伊周が、配所へ赴く前には父の墓地に無実を泣いて訴え、一旦帰京した後には、母の展墓をなして、そこに供養堂を建てようと考えた事を記して、一巻を閉じている点からも明らかである。

また、松村博司氏は、『源氏物語』を模したという山中氏の説に対し、次のように述べる。

この考えは、本巻の全体に『源氏物語』の影響が濃厚に、また顕著にうかがわれるところから見て、具象化された事実としては否定することはできない。すなわち、この箇所は、作り物語に似せて書くことによる事実の改変と見られるのである。[10]

配流の宣旨が下った夜以降の伊周の失踪先のように、事実や詳細が不明である事柄について潤色しているというのではない。「作り物語に似せて書く」という明らかな意図をもって書かれたというのである。また、松村氏は、『栄花物語』が召還の理由を「東三条院の御悩」としなかった点について、清水好子氏の論を引いて論じている。清水氏が指摘するのは、道長の日記である『御堂関白記』に空白期間があることと、その原因についてである。

> すると、旧年長徳四年九月道長快癒後の日記の空白は彰子入内の実現に奔走していたからだと推定されそうだ。立后の準備期間、もっとも熱心な努力の期間がぴったりと

---

[9] 河北騰『栄花物語研究』第二篇第二章「「浦々の別」の巻について」桜楓社／一九六八一四九頁　＊初稿「言語と文芸」七‐二／一九六五

[10] 注4　一一五頁

関白記における空白の時期にあたることが、権記によって証せられたいま、長徳四年秋冬の不執筆を女御入内画策期とみるのである。[11]

清水氏は、『御堂関白記』に長徳四年の後半の記述が欠けている理由を、彰子の入内に奔走していたからであるとしている。それを踏まえて松村氏[12]は次のように述べる。

> 本巻はこのような、道長の病気、彰子入内の画策、東三条院御悩等一切触れることなく、その結果長徳四年の史実は大きく改変されたのである。このように見てくると、この年の史実の書き替えは、『源氏物語』に似せようとしただけで起ったというよりはむしろ、道長の病気以下一連の史実を避けようとして、それらと無関係な記述をする必要上考え出されたこととも言えそうであるが、あまりに穿った見方であろうか。

年次のずれは『源氏物語』への擬えというだけではなく、本来長徳四年の時期にあったできごと、すなわち「道長の病気以下一連の史実」を避けようとしたからではないかと言うのである。ここで言及されている「道長の病気、彰子入内の画策、東三条院御悩等」を『栄花物語』が意図的に回避しているならば、それにはどのような意味があるのだろうか。

以上のように、当該場面についての先行研究では、『源氏物語』須磨・明石の巻に影響を受け、それを模倣しようとしていること、そして東三条院病悩など一部のできごとが描かれていないことが指摘されている。この二点に注目しながら、敦康親王の生年誤りをはじめとした史実との齟齬について考えていきたい。

二、虚構対現実の構図1：召還と後見

津島知明氏の論

前節で見た通り、現時点での定説は、『源氏物語』に近づけるために敦康親王の生年を操作し、伊周兄弟召還の恩赦事由を親王の後見としようとした、というものである。本節では

---

[11] 清水好子「藤原道長」「中古文学」創刊号／一九六七

[12] 注4　一一六頁

この準えの関係について考察していくのだが、しかし、ここで一つ『源氏物語』と『栄花物語』には大きな違いがあることに注目しなければならない。その相違点について、津島知明氏[13]の論を引きながら改めて両作品を比較しつつ考察する。

津島知明氏は、「長徳四年。『栄花』によるこの年次設定は、言われているように伊周・隆家らの召還を、敦康の誕生と結びつけるための作為であった」としながらも、『源氏物語』と『栄花物語』では、召還された人物が「後見」と見なされているか否かという点で差異があることを指摘している。つまるところ、『栄花物語』での伊周兄弟は敦康親王の後見とはなり得ていないのである。それは召還され、本位に復帰してからも同様である。このことについて、津島氏[14]は以下のように述べる。

> 『栄花』がそれまで敦康の「後見」と呼んできたのは、もっぱら「御匣殿」（道隆四女）だった（巻第五・六・八に一例ずつ）。（中略）『栄花』はそれを、一条が敦康を語る場面に限って、立坊あるいはその後の政権を支える公的存在として、しかもそれが「いない」という形で特化させているわけだ。

『栄花物語』において、敦康親王の後見は御匣殿と呼ばれる叔母、道隆四女であった。その御匣殿も長保四年に死去し、その後は、これも道長による戦略の一つとも言えようが、彰子の猶子として養育されていたことが知られている。それに関わる描写であろうか、「浦々の別」では道長が敦康親王誕生を「九条殿の御族よりほかのことはありなむや」（1：二八五頁）と、九条流の誉れであるとして我がことのように喜ぶさまが描かれる。

また津島氏は同論にて、

> 『栄花』が伊周らの召還を『源氏』に拠るかに装いながら、「後見」なる語を避けていたこと、一条がその不在しか語らないことに、むしろ『栄花』の腐心をみるべきである。

とも指摘している。『栄花物語』が「後見」という語を一条帝に言わせないということは、『栄花物語』での一条帝は伊周たちを後見と認めていないということになる。

---

[13] 津島知明「〈敦慶親王〉の文学史」「日本文学」五七 - 五／二〇〇八

[14] 注13に同じ。

『源氏物語』との比較

ここまで、津島氏の論によって指摘された両作品の差異を紹介したが、改めて本文に沿いながら『源氏物語』と『栄花物語』を対照する。まず、『源氏物語』での召還の事由について、「明石」の巻の記述を引く。

年かはりぬ。内裏に御薬のことありて、世の中さまざまにののしる。当帝の御子は、右大臣のむすめ、承香殿女御の御腹に男御子生まれたまへる、二つになりたまへば、いといはけなし。春宮にこそは譲りきこえたまはめ、おほやけの御後見をし、世をまつりごつべき人を思しめぐらすに、この源氏のかく沈みたまふこといとあたらしうあるまじきことなれば、つひに后の御諫めをも背きて、赦されたまふべき定め出で来ぬ。

（2「明石」二六一〜二六二頁）

光源氏が須磨へ下ってから二年になるころ、朱雀帝本人の不調は続いているが、後継者たるべき男皇子は無事に成長している。そこで帝は譲位を考えたが、「おほやけの御後見をし、世をまつりごつべき人」として想定したのが光源氏であったとある。新編全集はこの「おほやけ」に「朝廷」という漢字と現代語訳を当て、津島氏は「帝」と解している。『栄花物語』で敦康親王の誕生に寄せる擬えが発生したことを思えば、ここは「冷泉帝の後見」と解するべきであろうか。ところで、呼び戻そうとしているのは朱雀帝であるが、光源氏を「おほやけの後見」としたことは、桐壺院の遺言であった。

次には大将の御事、「はべりつる世に変らず、大小のことを隔てず何ごとも御後見と思せ。齢のほどよりは、世をまつりごたむにも、をさをさ憚りあるまじうなむ見たまふる。かならず世の中たもつべき相ある人なり。さるによりて、わづらはしさに、親王にもなさず、ただ人にて、おほやけの御後見をせさせむと思ひたまへしなり。その心違へさせたまふな」と、あはれなる御遺言ども多かりけれど、…

（2「賢木」九六頁）

この言を思えば、先の「明石」の例で、新編全集が「おほやけ」の意を「朝廷」としていた

ことにも一理ある。源氏の身分としたのは若年の頃であったから、当時の桐壺院の意図としては具体的にどの代の帝の後見、というのではなく、国家に仕える政治家としての意であっただろう。

一方、『栄花物語』における伊周兄弟の召還の場面では、女院詮子と一条帝が相談した上で、道長に申し出ている様子が描かれる。

かかるほどに、今宮の御事のいといたはしければ、いとやむごとなく思さるるままに、「いかで今はこの御事の験に旅人を」とのみ思しめして、つねに女院と上の御前と語らひきこえさせたまひて、殿にもかやうにまねびきこえさせたまへば、「げに御子の御験ははべらむこそはよからめ。今は召しに遣はさせたまへかし」など奏したまへば、上いみじううれしう思しめしながら、「さはさるべきやうにともかくも」とのどやかに仰せらる。

（1：二八五〜六頁）

『栄花物語』では帝と母女院との意見の相違はない。また、召還の目的も『源氏物語』とは異なり、「御子の御験」、すなわち皇子誕生という慶事による恩赦としている。津島氏の指摘していた通り、「後見」の語は見えない。

では、対照される『源氏物語』において、光源氏が東宮（冷泉帝）の後見となったのはいつのことであったか。

帝おりゐさせたまはむの御心づかひ近うなりて、この若宮を坊にと思ひきこえさせたまふに、御後見したまふべき人おはせず、御母方、みな親王たちにて、源氏の公事知りたまふ筋ならねば、母宮をだに動きなきさまにしおきたてまつりて、強りにと思すになむありける。

（1「紅葉賀」三四七頁）

ただ春宮をぞいと恋しう思ひきこえたまふ。御後見のなきをうしろめたう思ひきこえて、大将の君によろづ聞こえつけたまふも、かたはらいたきものからうれしと思す。

（2「葵」一七頁）

光源氏も初めから冷泉帝の後見であったわけではない。冷泉帝の血筋は母方も皆皇族であって、政治的後ろ盾としての冷泉帝の「後見」はいなかったのである。だからこそ譲位を考えた際には、母藤壺の地位を強固にし、当面の対応策としようとした。そしていよいよ譲位が済んでから、改めて光源氏にその役目が任されたのである。おそらくこの時に光源氏が大将に昇進したことも影響しているだろう。「紅葉賀」の時点で三位は先に拝していたが、役職の方が追いつき、次期帝の後見を任せられる程度に社会的地位が強固になったということであろう。

この点が『源氏物語』における「冷泉帝の後見」と『栄花物語』における「敦康親王の後見」の大きな違いである。光源氏とは違い、伊周兄弟は親王の父である帝から、後見と見なされていないということになる。

この比較を踏まえ、津島氏の『栄花物語』及び『源氏物語』についての解釈を参照する。

> 『栄花』の敦康は、当然ながら彼の末路を承知の上で語られている。「後見があれば立坊できた」という一条の述懐は、常に敦成とセットで語られるように、どこまでも結果から遡った理由付けに過ぎなかった。（中略）「後見がない」という一条の無念は、道長その人が「おほやけの御後見」になれば立坊も実現できたという理屈に、進んで読み替え得る言説なのだ。（中略）逆にいえば『源氏物語』は、敦康の即位もが起こり得るような世界を、「後見」を鍵語に実現してしまった物語だともいえる。しかも興味深いことに、その成立と同時期に敦康を育む一条と彰子の姿があったわけだ。当の一条が敦成誕生後も、つまりは『源氏』成立後に、敦康立坊の望みをつなぎ続けたことを思うと、彼の物語への感応（同時に物語作者の時代への感応）の程を、やはり過分にも想像したくなる。『栄花』が立坊断念の根拠に「後見」を持ち出した所には、『源氏』の理解者たる一条の横顔が、逆説的に照らし出されていないだろうか。

つまり『栄花物語』は、『源氏物語』では達成された冷泉帝即位と史実を対比することで、史実では達成されなかった敦康親王の立坊があったかもしれないと、読者が意識できる形で描いていることになる。つまり、この「源氏準拠」は一見準えと見せかけて、虚構（後見として光源氏が帰京し、東宮が帝位についたこと）と、現実（伊周兄弟が戻ってきても後見とはなり得ず、敦康親王が立坊できなかったこと）とを、対比するものと言えよう。

この『栄花物語』の対比構造は、『源氏物語』を知っている読者には、大いに「あはれ」

を誘ったであろう。須磨に退き、うら寂しい地で京の人々を思う光源氏に伊周を重ねていたのに続き、敦康親王誕生によって呼び戻されるという展開には、その先を歴史として知っていてもほんの一片の期待を抱かせるものがある。それでも、その後の物語の中で、道長が「敦康親王立坊を妨げた悪大臣」とならないのは、伊周兄弟の自業自得というのもさることながら、「後見」を定めるのは道長ではなく、親王の父である帝であるという『源氏物語』の理屈が思い出されるからであろう。それも『源氏物語』に寄せた物語展開をしているからこそ得られる効能である。

それにしても、この「虚構対現実」の関係性を構築するために、『栄花物語』は「現実」の立場を維持しつつも、極力『源氏物語』に似せる必要があったわけだが、しかしそのためだけに親王の生年の操作という大それたことをするものだろうか。「皇子誕生の験による恩赦」であれば、内親王ではあるが長徳二年十二月十六日に脩子内親王が生まれている。もちろん『源氏物語』では男皇子であったのだし、即位の可能性などの点で、親王と内親王では大きな違いがある。先の津島氏の論はそういった意味でも親王でなければ成り立たないものである。

しかし、脩子が誕生したことにより、少なくとも年次操作に及ばずに済ませることもできたはずなのである。中村康夫氏[15]は、『百練抄』の記述の方を疑い、詮子の平癒祈願ではなく脩子内親王という慶事による恩赦だったのだろうと述べている。それを思えば、これまでの定説である「『源氏物語』に近づけるため、親王の生年を操作することによって伊周兄弟召還の恩赦事由としようとした」という考え以外にも、何かしら理由があったのではないかと思えるのである。そこで次節では、松村氏が注目していた「東三条院の御悩を書かなかった点」について考えてみる。

三、虚構対現実の構図2：消えた詮子病悩

深澤三千男氏の論

前節で詳しく見た『源氏物語』と『栄花物語』の準えの関係に加えて、先行研究において

---

[15] 中村康夫『皇位継承の記録と文学：『栄花物語』の謎を考える』第三章「『栄花物語』の謎」臨川書店／二〇一七　一五八～一六二頁

指摘が多いのが、「長徳三〜四年あたりの詮子と道長の病気を書かない」ことである。その理由について、第一節で引いた松村氏の論に加えて、深澤三千男氏は以下のように分析している。

この局面で、伊周を源氏に見立てた（『栄花物語』自体に明示）以上、伊周執政に執拗に反対して、わが子一条帝に、好意を寄せていた道長がまだ大臣にすらなっていないのに、あらゆる先例を無視して執政に指名するよう迫った（『大鏡』に詳しく、『栄花物語』には仄めかし程度）東三条院こそ、源氏の敵役弘徽殿太后にイメージがだぶって行くだろう。（中略）先行イメージとして厳然として、こわもてで底意地の悪かった弘徽殿太后のイメージがあったのだから、この際史実通り東三条院御悩と伊周等の赦免を直結してしまうと、弘徽殿のイメージと重なりすぎてしまうだろう。（中略）善意の人としてイメージ付けたい以上、詮子に悪役弘徽殿をだぶらせるわけには行かなくて、いわば『源氏物語』避けで史実改変を迫られた動機が推測されよう。[16]

『栄花物語』が『源氏物語』に寄せようとすればするほど、実在の人間関係に『源氏物語』の登場人物が重ね合わされることになる。その結果、東三条院詮子が、主人公光源氏の敵として描かれている弘徽殿大后と、当帝の母という立場で完全に一致してしまうのである。更には、平癒祈願に恩赦を行うほどの病気を詮子が抱えていたことは、「須磨」や「明石」の巻で弘徽殿大后が患っていた記述とも一致してしまう。確かに、それは避けたいことであろう。その一方で、深澤氏は以下のようにも述べている。

この局面ではむしろ史実では『源氏物語』と一致していた、東三条院御悩による「大赦」（山中はこれをも『栄花物語』著者が知らなかった事とする）の史実を伊周等赦免の原因から外してしまう事で、暗い悪役を排除し、史実に反してまで『源氏物語』離れする場合もあった事が面白く思われるのである。つまり『栄花物語』著者は『源氏物語』にどっぷりと浸り放しだったのではなく、『源氏物語』を利用する事によって、『源氏物語』以上の世界をこの世に構築しようと企てたように思われるのである。勿論そうした方

---

[16] 深澤三千男「源氏物語と栄花物語（三）」　山中裕編『王朝歴史物語の世界』吉川弘文館／一九九一

針が『源氏物語』世界の深い記号性、ドラマ性をすっかり台無しにした、平板で無味乾燥な『栄花物語』を作り出してしまう結果に終わったにせよ。

前節では、津島氏の論から、伊周と光源氏、敦康親王と冷泉帝について『源氏物語』と『栄花物語』の差異を見たが、ここでは東三条院詮子と弘徽殿大后のイメージについて『源氏物語』と『栄花物語』の差異が指摘されている。また深澤氏は次のようにも述べる。

> 史実との齟齬があるからといって、必ずしも史書たるよりも物語たる事が目ざされていたと、短絡して考える事はできない。（中略）時日ひいては因果関係の変更にまで及ぶ、史料操作による理想化＝歴史の組替えも容認される面があったと察せられる。

この考えによるならば、『栄花物語』は敦康親王の誕生年次だけでなく、詮子や道長の病をなかったことにして、『源氏物語』以上の理想化された世界を目指したものであるということになる。詮子から悪役弘徽殿のイメージを排除し、伊周召還の事由を変更することになった「詮子病悩を隠す」という操作は、その一端だといえるだろう。

ここで、この詮子と弘徽殿の関係についても、第二節での「虚構対現実」のような対比構造を当てはめてみることはできないだろうか。『源氏物語』という「虚構」では、意地悪な敵役の弘徽殿がいながらも、光源氏は政界中枢への復帰を果たし、冷泉帝も無事即位する。一方「現実」の立場に置かれるはずの『栄花物語』ではどうだろうか。伊周は帰京こそできたものの元の立場には程遠く、敦康親王はついに東宮とはなりえなかった。弘徽殿大后とは違って、詮子は伊周らの不在の折、参内をためらう定子に若宮との参内を勧め、敦康親王の誕生に際しても様々な贈り物をし、伊周兄弟の召還に際しても異を唱えることはしない。そんな優しい女院がいたとしても、中関白家の「現実」は変わらないのである。その上、この「中関白家に優しい詮子像」を「現実」と言い切るのは難しい。せいぜい「脚色された現実」であろう。

とはいえ、「脚色された現実」であったとしても、歴史の大きな流れは壊さず、それでいて「虚構」である『源氏物語』の弘徽殿大后と対比させるには至っているだろう。この対比が深澤氏の言う「『源氏物語』以上の世界をこの世に構築しようと企てた」ことに当てはまるのかどうかは判断しかねるが、厳しい状況にありながらも主人公の政界復帰が果たされた『源氏物語』と、敵から憐れみにも似た慈悲を向けられながら敗北を喫した『栄花物語』

の対比構造によって、如何ともしがたい歴史の「あはれ」を読者に感じさせるという狙いは感じ取れる。

しかしここで、そうまでして詮子と弘徽殿の一致を避けるならば、初めから「源氏準拠」などというものを持ち込まなければ良いだけなのではないか、という根本的な疑問が浮かぶ。詮子の件があっても伊周や敦康親王の周辺に「源氏準拠」の演出を加えたかったということなのだろうが、それにしても、ただ病悩をなかったことにしただけで詮子と弘徽殿の類似性がなくなるかというと、そんなことはないだろう。というのも、なぜこの二人が重なり合うのかというと、伊周や光源氏が流離している間に病に罹っていたという類似があるからではなく、当代の帝の母という動かしがたい身の上そのものが一致しているからである。一致を避けるという目的で行われた操作にしては、その目的は達成されていないと言わざるを得ない。詮子と弘徽殿の過剰な一致を避けたいというのは確かに事実ではあろうが、『栄花物語』が詮子の病を書かなかった理由としてはもっと他に優先されるものがあったのではないかと思えるのである。

史実との比較

ところで、詮子に関しては、弘徽殿大后との類似性に加えて、もう一つ注目しておきたい点がある。『栄花物語』が語る伊周の罪の中に、「帝の御母后を呪はせたてまつりたる罪」があることである。巻四「みはてぬゆめ」の終わり近くで、伊周が行った悪事が様々に語られる。恋愛のもつれから花山院に矢を射かけたこと、大元法という皇族のみに許された法会を行ったこと、そして女院を呪詛したとの疑いである。

> また大元法といふことは、ただ公のみぞ昔よりおこなはせたまひける、ただ人はいみじき事あれどおこなひたまはぬことなりけり。それをこの内大臣殿忍びてこの年ごろおこなはせたまふということこのごろ聞えて、これよからぬことのうちに入りたなり。また、女院の御悩み、をりをりいかなることにかと思しめし、御物の怪などいふ事どももあれば、この内大臣殿を、なほ御心掟心幼くてはいかがはあべからんと、傾き、もて悩みきこゆる人々多かるべし。
>
> （1：二三一頁）

女院詮子が病に罹り、人々は噂する。あの内大臣、やはり心の持ちようがこうも幼稚では…と、伊周が「何か」をしでかすのではないかというのである。ただし、『栄花物語』の記述では、呪いの現場や呪具を見たということはなく、詮子に悪さをしている物の怪の正体も分かっていない。大元法についても詮子の病についても噂以上のことは語られず、「祭果ててなん花山院の御事など出でくべし」（1：二三一頁）と、花山院への不敬事件の落とし所をどうするのかということに話題が移っている。

ところが、次の巻五「浦々の別」では、次のように罪状が述べられる。

> 聞けば、「太上天皇を殺したてまつらむとしたる罪一つ、帝の御母后を呪はせたてまつりたる罪一つ、公よりほかの人いまだおこなはざる大元法を、私に隠しておこなはせたまへる罪により、内大臣を筑紫の帥になして流し遣はす」といふことを読みののしるに、宮の内の上下、声をとよみ泣きたるほどの有様、この文読む人もあわてたり。
>
> （1：二四一頁）

傍線部の通り、罪状の中に「帝の御母后」を呪詛したことが含まれているが、当の伊周本人は、左遷前に参じた父道隆の墓所にて、「みづから怠ると思ひたまふことはべらねど」（1：二四三頁）と、これを否認するような発言をしている。

> なほこの御身はなれさせたまはず、平らかにとまもりたてまつらせたまひて、またかけまくもかしこき公の御心地にも、また女院の御夢などにも、このこと咎なかるべきさまに思はせたてまつらせたまへ」
>
> （1：二四四頁）

また、自分の代わりに父道隆の御霊が身重の定子を庇護してくれるよう頼み、帝にも女院にも自分が無実であることを分からせてほしいと訴える。無実であることを理解してもらいたい相手として帝と女院が設定されているが、これはそれぞれ大元法の件と呪詛の件の「被害者」に当たる人物である。一方で花山院には全く言及がないが、そもそも出家の身でありながら女に通っていた花山院に全く非がないとは言えないという点が伊周を強気にさせているのかもしれない。

では、実際の伊周配流の事由は一体何だったのであろうか。諸記録によって若干の差が見

られるが、『日本紀略』と『小右記』にはこの女院への呪詛が罪状として明記されている。

宣命。以内大臣藤伊周朝臣為大宰権帥。以権中納言同隆家朝臣為出雲権守。去正月依奉射危華山院法皇。又奉呪詛東三条〔院〕之聞也。

（『日本紀略』長徳二年四月廿四日）

仰配流宣命事〔射花山法皇事、呪咀女院事、私行大元法帥事等也〕

（『小右記』長徳二年四月廿四日）

『日本紀略』では大元法が含まれていないが、次に見るように密告があったことは記している。また、巻四「みはてぬゆめ」で挙げられていた女院の病について『小右記』と『日本紀略』は以下のように伝えている。

依天皇不出御也。依東三条院御悩也。法琳寺申内大臣修大元法之由。

（『日本紀略』長徳二年四月一日）

早朝参女院、謁右大臣、院御悩昨日極重、被停院号・年爵年官等事之由、昨夜被奏聞了、又云、或人呪咀云々、人々厭物自寝殿板敷下掘出云々、

（『小右記』長徳二年三月二十九日＊前日から連続）

この病悩は本来長徳二年の晩春あたりの頃であり、『小右記』では呪いの道具が実際に発見されたらしいことが記されている。それをやったのが誰なのかという真相は不明だが、伊周が詮子を呪詛しているとの噂は世間に広まっていたと言って良いだろう。諸記録を追っていくと、伊周が詮子を呪ったこと、それらの罪で左遷されたこと、その後詮子が実際に病気になったことという、史実における伊周と詮子に関する事柄の流れが浮き上がってくるのである。『栄花物語』が詮子の病気を表に出さなかった理由はここにあるのではないだろうか。つまり、詮子の病気をありのまま書くと、あたかも伊周の呪いが効いているかのように見えてしまう。『栄花物語』はそれを避けたかったのである。

『権記』によれば、これより後も詮子が物の怪に悩まされていることが記されている。長保二年五月二十二日の記事に、先年、つまり長保元年（長徳五年）、詮子が「高二位」の霊

に悩まされたとある。

参院、参内、
今朝定澄律師来臨。相逢、召仰勘解由判官行忠、自院請興福寺僧十五口、始自来廿六日、於長者殿、為消除御悩、可令転読大般若不断経、〔諷経、〕先年院御悩之時、静昭闍梨申行此事、高二位霊出来云、功徳殊勝之由、其度御悩早平癒。仍今申行耳。
（『権記』長保二年五月二十二日[17]）

ここでは道長のための読経の打ち合わせであったが、先年詮子の御悩でも同じ誦経を行ったところ、高二位の霊が現れ、「功徳が殊勝である」、つまり「誦経の功徳の力が強くて悪さができない」と言ったというのである。高二位とは高階成忠のことであり、伊周らの母高階貴子の父である。このように、伊周の親族の物の怪による騒ぎが実際に起きていたことが分かる。

『源氏物語』を知っている者は、朱雀帝の眼病が父桐壺院の霊によるものであると知っている。『栄花物語』が、もし史実の通りに詮子の病気を描いていたとして、『源氏物語』と同様に、詮子の「御悩」が霊のしわざだとすれば、その霊は誰か。『権記』に見えるように、史実でも物の怪騒動は実際に起きていた。そしてその霊の孫に当たる人物に「女院呪詛」の容疑がかかっている。読者が『源氏物語』と史実の両方を知っていれば、『栄花物語』を読んでも疑わしい人物として伊周が真っ先に思い浮かぶことであろう。

その場合、もし病気平癒祈願の恩赦としてしまったら、読者にはどう映るだろうか。まだ呪いが詮子に効いている状態で呪詛した当人である（かもしれない）伊周を赦免してしまっては、物語として不都合であろうし、今後物語中で「栄花」を描かなくてはならない道長の失政とも映ろう。何よりも、第二節での『源氏物語』と『栄花物語』に見える「虚構対現実」の対比構造を最大限に活かすためには、伊周は光源氏に極力似せなければならないし、墓前で訴えた「無実」は本当でなければならないのである。ここで本当に伊周が呪詛しているように見えてしまうと、伊周は「無実の光源氏」の立場を失ってしまうのである。この不都合を消し去るには、女院の病が伊周のしわざではないと読者に思わせるように細々と手を加えるよりも、いっそ詮子の病悩そのものをなかったことにするのが一番効果的だったので

17 増補史料大成刊行会『権記　一』増補史料大成／臨川書店／一九六五

あろう。

つまり、ここでは第二節で見出したものとはまた別の次元の「虚構対現実」が現れているのではないだろうか。伊周が女院を呪詛したという噂が立ち、実際に高階成忠が霊となって女院を祟っていたという史実に見える「現実」と、自身の無実と無念を亡き父に訴え、京を去って行った悲劇の主人公伊周を描く『栄花物語』に見る「虚構」である。

深澤氏が主張した「『源氏物語』を利用する事によって、『源氏物語』以上の世界をこの世に構築しようと企てた」というのは、弘徽殿大后のような絵に描いたような悪役をなくすというだけではなく、光源氏のような主人公を作り出すということでもあったのではないだろうか。実際の貴族社会では、それぞれが自家の利益を考えつつ、それでいて社会そのものを大きく揺るがしてしまっては本末転倒であることを理解して動いている。しかしそれをありのままに書いたのでは、ただの「現実」であって、物語として優れた「虚構」にはならないのである。

四、彰子入内のタイミングと道長の暗躍

さて、ここまで、二つの「虚構対現実」の構造について注目し、それぞれの目的や効果について考察した。最後に、そうした様々な目的によって行われた年次の操作が、なぜこの時期に落ち着いたのかということを考えたい。恩赦が行われ、伊周兄弟の帰京がなったのはなぜ長徳四年だったのかという問題である。詮子の病悩について書けないとして、敦康親王誕生の恩赦とするならば、親王誕生の年次である長保元年（999）に恩赦を寄せるように操作する選択肢もあったはずである。そうしなかったのはなぜであろうか。

深澤氏[18]は「須磨退去の翌々年召還された源氏の年立に倣った」と述べるが、さしあたって注目したいのは、第一節で引用した清水氏の論と、それを踏まえた松村氏の論である。繰り返しになるが、清水氏は、長徳四年七月から十二月までの半年間、『御堂関白記』の記述がない理由について、翌長保元年二月、入内前の彰子が従三位になるという点に注目して、空白の長徳四年下半期を、道長の「女御入内画策期」と見ている。これを踏まえて松村氏は、長徳四年の史実の書き替えは「道長の病気以下一連の史実を避けようとして、それらと無関係な記述をする必要上考え出されたこととも言えそうである」と述べている。

[18] 注16に同じ。

深澤氏の説を積極的に否定する理由はないが、松村氏の言う「長徳四年の道長」を隠すために史実の書き替えまで行ったという説も少し考えてみたい。確かに政争のため暗躍する姿は好ましいものではないかも知れないが、それも詮子の病悩と同じく、そもそも書かずに長徳四年の記述を短く済ませば良いだけのことである。本当に目的は隠すことだけなのだろうか。

ここで『栄花物語』巻五「浦々の別」から少し進み、巻六「かかやく藤壺」に目を向けてみる。巻六は「大殿の姫君十二にならせたまへば、年の内に御裳着ありて、やがて内に参らせたまはむといそがせたまふ」（1：二九九頁）というように、彰子の裳着、入内への言及から始まる。ここには年次や裳着の様子そのものについては記されない。その代わりのように入内の準備の様子が語られ、道長、花山院、公任などから祝いの歌があったことを述べ、早々に入内の場面に移る。長保元年十一月一日のことである。諸記録とも齟齬は全くない。『御堂関白記』によると裳着が長保元年二月九日のことであるから、裳着と入内の間には史実では約九か月もの隔たりがあるのだが、裳着から入内まで実に手際良く流れて行く。この巻六冒頭の新編全集[19]の頭注には、

> 巻頭に成人した彰子を置き、時代の新しい局面を描く。道長の子女という新たな世代の登場が歴史の切れ目として機能し、『栄花』の巻単位の構想を成り立たせている。

とある。巻が替わると同時に、新たなヒロインともいうべき彰子が登場し、その華々しい後宮デビューが語られていくわけである。

さて、ここで史実に目を向けると、彰子の入内の六日後、長保元年十一月七日に何があったか。一条天皇第一皇子、敦康親王の誕生である。道長にとって、娘の華々しいデビューに水を差す、さぞ邪魔な存在であっただろう。この後、巻六「かかやく藤壺」では、彰子と定子の様子が交互に描かれ、次第に二人の明暗が分かれて行くという流れがあるのだが、もしここで敦康親王が生まれていたならば、入内早々にライバルである定子に大きく後れを取ってしまったような印象を持たせかねなかったであろう。

また同様の例として、『栄花物語』では長徳五（長保元）年六月の内裏焼亡が無視されて

[19] 注5　二九九頁頭注

いることが挙げられる。こちらも新編全集頭注[20]に指摘がある。『栄花物語』では当初から「この御方藤壺におはしますに」（1：三〇二頁）と、通常通り宮中に入ったような書きぶりであるが、この火災により、入内当初は里内裏であり、約一年後、改めて藤壺に入ったという。大きく史実から外れる嘘をついているわけではないが、「かかやく藤壺」と『源氏物語』を意識した巻名に瑕をつけないよう、意図的に隠されたできごとであると思われる。

『栄花物語』としては、彰子の入内という慶事に水を差す「敦康親王の誕生」というできごとを、そのままにしておくわけにはいかない。とはいえ第一皇子の存在自体を抹消するわけにもいかない。姉である脩子内親王の誕生や、定子本人が参内した期間との兼ね合いを考えれば、早くしすぎては具合が悪い。ではどこに移動させるか。そこで考え出された年次が「長徳四年」だったのではないだろうか。こうすることによって、巻五「浦々の別」を中関白家の動静のみに集中する巻としてまとめることができる。長徳二年、伊周兄弟の転落劇があり、伊周たちの母高階貴子が亡くなるなど、中関白家が悲しみに包まれる。定子は一人不安に耐え、年末に脩子内親王が誕生する。翌年、長徳三年は独り心細く過ごす定子に目が向けられる。それでも帝からは変わらず寵愛を受けているさまが描かれ、定子は再び懐妊する。年が明けて長徳四年、敦康親王が誕生し、史実からちょうど一年遅れて恩赦が出され、長徳四年末に伊周が帰京したところで巻五が終わる。年の変わり目、巻の変わり目、そして物語の主役も変わり目を迎える。中関白家の悲しみに寄り添った「浦々の別」から、新たな栄花の主役である道長家に注目し始める「かかやく藤壺」に移り、それらが上手くリンクしているのである。

更に、ここに深澤氏の「須磨退去の翌々年召還された源氏の年立に倣った」という説も加えると、伊周と光源氏を繋ぐ糸を補強することにもなる。物語構成の上でも、オマージュによる演出の上でも、まさに八方丸く収まる采配だったのだろう。

おわりに

本章では、歴史の順序を大きく捻じ曲げた『栄花物語』巻五「浦々の別」における年次設定について考察した。

第一節では、これまでの先行研究をまとめ、『栄花物語』における年次のずれは『源氏物

---

[20] 注5　三〇二～三〇三頁頭注

語』に準えるための操作であるという指摘に留まっていることを確認した。

第二節では、その「源氏準拠」が意味するところを再確認した。『源氏物語』と『栄花物語』の対比構造は、実現しなかった敦康親王即位をめぐる虚構と現実の対比であり、それによって歴史を知っている読者に対しても、あったかもしれない敦康親王即位を思わせるという効果を生んでいる。

第三節では、本来恩赦の事由であったはずの詮子病悩を『栄花物語』が隠蔽した理由について考察した。詮子と弘徽殿大后について、立場的には重なりつつも人格的には異なった似て非なる人物として描くことにより、第二節の対比構造がより深まることを指摘した。また、ここでは『栄花物語』と史実との間でも虚構と現実の対比が起きており、悲劇の主人公としての伊周像を構築するために女院の病悩を物語から抹消しているのではないかと考察した。

そして第四節では、恩赦の年次が「長徳四年」に設定された意図について、「源氏準拠」による演出でもあり、彰子の入内に水を差さないためでもあり、更には物語の内容と巻の変わり目を整合させることで、読者に時代の変化をも意識させる手法でもあったのではないかと考察した。

『栄花物語』巻五「浦々の別」は、『源氏物語』と対比させながら、歴史の敗者となった中関白家の人々の「あはれ」を描いている。しかし、中関白家の話は巻五で片付けられ、女御彰子という新たなヒロインが登場する巻六以降の、新時代の到来の邪魔はしない。「源氏準拠」という一つの演出のために行われたと思われた『栄花物語』の年次の操作は、実はそれ以外の様々な史実との相違という不都合への対処や、作品構成上の思惑も絡み合って、大胆になされたものなのであった。

第二章　正編における引歌表現：諸行無常への導き

はじめに

物語には、次にあげる例のように、文中に和歌や他作品の一節を部分的に引用することで内容を表現する例がしばしば見られる。

かくて年もかはりぬれば、元日は朝拝などして、よろづめでたく過ぎもていくに、花の都はめでたきに、かの旅の御有様ども、「春や昔の」とのみ思されつつ、あはれに年さへへだたりぬるを、よろづいとおぼつかな、あまたの霞立ちへだてたる心地せさせたまふ。

（1：二七二頁）

これは『栄花物語』巻五「浦々の別」の一場面である。年が改まり、世間が新年の喜びにわいている一方、中関白家では左遷された藤原伊周と隆家を思って沈んでいるという場面である。傍線部「春や昔の」とは、有名な業平の歌「月やあらぬ春や昔の春ならぬ我が身一つは元の身にして」という歌の一部を引いたもので、彼らがいた頃とは変わってしまったことを嘆く表現となっている。

これまで、『栄花物語』におけるこうした引歌表現については、後述する松村博司氏の『栄花物語の研究』に「引歌について」と題された一節と、吉田茂氏による論の他は、注釈書にて個々の例が指摘される以外にさほど注目されてこなかった。しかし、後述する吉田茂氏の先行研究によると、出典が分かるものだけでも正編で四三例、続編で二八例と、『栄花物語』中に合計七一例ある。この数だけでも十分注目に値するものであると考えるが、わたくしに定めた方針に従って改めて正編を調査し直したところ、用例数が大幅に増え、正編だけでも七十例を超える結果となった。

本章では、このような『栄花物語』正編における引歌表現に注目し、引歌が用いられた場面、巻の傾向、典拠となった歌やその収録歌集などについて調査し、先行研究を補いつつ数

量的、質的な分析を行う。今回正編のみを対象としたのは、『栄花物語』は正編と続編でかなりその性質が異なり、また正編に関しては比較的先行研究があることから、まず正編を調査、考察した上で、今後の研究の足掛かりにするためである。

一、先行研究

再調査とその分析に先立って、『栄花物語』正編の引歌に関する先行研究と、それに付随する論を確認する。

松村博司『栄花物語の研究』による引歌一覧

『栄花物語』の引歌研究は、まず松村博司氏によって正編の引歌箇所の一覧、巻、出典ごとの用例数が表で示された。松村氏はその結果に基づき、『栄花物語』中の引歌表現は、甚だ多いと言えるような数ではないこと、典拠についても三代集が中心であって変化に乏しいことを述べている。

> 物語三十巻の中全く引歌を見ない巻は、二、一七、二二、二三、二四、二五、二六、二九、三〇の九巻を数へる。（朗詠集の詩を除く）行文の中に古歌の一句を引用することは王朝文学の常套手段であるが、この物語はかくの如くで甚だ多いとはいへない。又その典拠も三代集（中でも古今集が最も多い）を中心として、外はほとんど問題とするに足りぬ数量で、変化に乏しい。[1]

この松村氏の一覧表では、正編には四六例の引歌表現があることになっている。これによって『栄花物語』の引歌研究の土台ができたと言えるが、その後の研究、注釈書によって新たに指摘された引歌もあるほか、松村氏による一覧表には、次に引用するように、意図的に数に入れなかった事例があるという点に注意が必要である。

---

[1] 松村博司『栄花物語の研究』第二篇第四章「正篇の典拠」刀江書院／一九五六　三一五頁

かうした事実は作者の教養や傾向を知る一資料となりうるのではあるまいか。しかしながら作者の推定に役立たしめるためにはなほ細心な注意を必要とする。といふ理由は、以上典拠を持つ部分が総べて果して作者の筆になつた文か否かには若干の疑問を附せざるを得ないからである。（中略）この物語の性質上既成の文献をとり入れることが多く、この物語特有の文体――即ち作者自身の手になつた部分を明瞭に区分することは、今日何人と雖もこれを能くすることはできまいと思はれるが、しかし一面全然見当がつかないのでもなく、私には推定すべき若干の根拠はあるが、右の一文の如きは他の部分と全くスタイルを異にして、傍註の如く出典語を羅列した修飾の多い文章として、到底これを作者固有の筆と認めることはできないのである。[2]

松村氏の一覧表には、「作者の筆になつた文か否か」という点を問題として、文体の面から見て他の部分と異なる、つまり『栄花物語』の作者による文章ではなく他資料による引用であると見なし、意図的に数に含めていない引歌表現がある。これは、『栄花物語』にはその本文の一部が他の日記などの資料から引用して書かれていると見られることが背景にある。巻八「はつはな」に見られる敦成親王の誕生の場面は、その内容の一致度から『紫式部日記』が引用されていることが分かっており、出典まで明らかになっている引用の例である。松村氏はそれに準ずる例として、巻十一「つぼみ花」で、長和三年に年が変わった際の、過剰に引歌表現が見られる一部分を挙げている。

はかなく年もかへりて、長和三年になりぬ。正月一日よりはじめて、新しくめづらしき御有様なり。あらたまの年たちかへりぬれば、雲の上も晴れ晴れしう見えて空を仰がれ、夜のほどにたちかはりたる春の霞も紫に薄く濃くたなびき、日のけしきうららかに光さやけく見え、百千鳥も囀りまさり、よろづみな心あるさまに見え、枝もなかりつる花もいつしかと紐をとき、垣根の草も青みわたり、朝の原も荻の焼原かき払ひ、春日野の飛火の野守も、万代の春のはじめの若菜を摘み、氷解く風もゆるく吹きて枝を鳴らさず、谷の鶯も行く末はるかなる声に聞えて耳とまり、船岡の子の日の松も、いつしかと君に引かれて万代を経んと思ひて、ときはかきはの緑色深く見え、…（2：三五～三六頁）

[2] 注1　三一六～三一七頁

この部分は引歌による新年の寿ぎの言葉を長々と連ねており、他の年変わりと比べると、確かに過剰な印象を受ける。この年変わり表現の直前には道長の娘妍子が三条帝後宮に入内したことの記述、直後には「宮の御方の女房」、すなわち妍子方の女房たちの装いが非常に華やかであるとの記述が続く。また、巻十六にも同様に妍子周辺の記述でこのような表現が一か所認められるため、松村氏は、この年変わり表現は妍子周辺の人物による日記などの資料を用いて書かれた可能性を示唆しているが、明言することは避けている。

本節の文章は作者本来の筆になるものではなく、既成の文献からの転用であろう。しかし、もともとどういうもののために書かれた文章であるかは明らかでない。類例として挙げた〈もとのしづく〉の文と関連づけて考えれば、あるいは中宮（後に皇太后）妍子付きの女房の筆になるものを利用したと言い得ないこともないであろうが、ここだけについて言えば、このあたりの内容とは無関係な既成の文を借用したというほうが妥当であろうと考える。[3]

このような事情により、松村氏の一覧表ではこれらの例が数に入れられていない。しかし、白井たつ子氏は、『栄花物語』内で他資料を引用している例である巻八「はつはな」の『紫式部日記』の利用箇所について、元の資料そのままではなく、作者によって操作が行われているのではないかと指摘している。

> 『栄花物語』の作者は、大方において、日記の中から、私的な感慨の表白が行われているところを、切り捨てようとしたには相違ないが、外的事象と、自己の内面の問題とを、しかと絡み合わせて叙述している『紫式部日記』が、優れた主体性を持って叙述されていれば、それだけ、これを利用する側の困難は大きかったはずである。『栄花物語』の作者が、日記の中に纏綿する紫式部の私的感懐を抜き去り、客観的事象についての記述だけをわがものにしようと試みて、失敗したとしても、それはあながち、力量不足のせいばかりではなかろう。[4]

---

[3] 松村博司『栄花物語全注釈　三』角川書店／一九七二　二二九頁

[4] 白井たつ子「『紫式部日記』と『栄花物語』「はつはな」との比較の問題」　日本文学研究資料叢書『歴史物語1』有精堂出版／一九七一　＊初出「文芸研究」五三／一九六六

白井氏は、『栄花物語』の作者は、本来日記には書かれていた紫式部の私的な感想を敢えて省いて用いるなど、他資料を『栄花物語』に取り入れるために意識的に改変しているのではないかと指摘している。このことを踏まえると、松村氏の一覧表から除かれた長和三年の年変わりについても『栄花物語』の本文に添わせるような改変があったことも想定でき、『栄花物語』作者の意思が全く反映されていないと言えるのかという疑問が残る。いずれにせよ、厳密な考察を行うためには、初めからこうした用例を弾いてしまうことはせず、後から必要に応じて分類をする方法を取るべきであると思われるため、今回改めてそれらを含めた一覧表を作成することにした。

源氏物語の引歌

次に、他作品ではあるが『源氏物語』内の引歌表現について、山口博氏の研究をあげる。山口氏は、『源氏物語』の中で引歌の用例数が多い巻を順にあげると、「須磨―明石―松風」「若菜上―若菜下―柏木」「椎本―総角―宿木」の三つのまとまりを持った集合が浮かび上がることを指摘している。

試みに、全五四巻の二割、約一二巻程度引歌の多い巻を上位から拾うと、一一巻目が歌数二〇例と区切りがよい。高位順に列挙すると、（数字は引歌数）

総角（四〇）　宿木（三六）　柏木（二四）　須磨（二三）　若菜上（二三）
明石（二一）　松風（二一）　若菜下（二一）　夕顔（二〇）　葵（二〇）
椎本（二〇）

である。この一一巻のうち、夕顔と葵の二巻を除くと次のようにはっきり三分類が可能である。

須磨――明石――松風
若菜上――若菜下――柏木
椎本――総角――宿木

物語構成上の重要な巻々を指摘するには甲論乙駁があろうが、この三系列が重要な部分であることは認められよう。（中略）あやどられるべき所、それが物語構成上重要な巻々であって始めて意味がある。あたかも物語のクライマックスに歌を配置するよ

うなものである。（中略）源氏物語の作者は、引歌を単なる修辞から構成にかかわる技法に昇華せしめたのである。[5]

山口氏が「構成にかかわる技法」と述べたように、引歌数を物語構成の一つの指標として見ることは、『栄花物語』においても可能であろうか。『栄花物語』がその表現や物語構成を『源氏物語』に倣っていることは、山中裕氏[6]などによって早くから指摘されており、引歌に関してもその類似性は指摘できるかもしれない。この点は、「用例数」についての考察において詳しく触れる。

また、山口氏は同論にて、引歌の用例を「…と」「…など」の形で引歌であることを明示してあるA型と、引用歌句が本文と融合し、形式の上からは引歌であることが明示されていないB型に分類した。更に、引用されている部分のみが必要なもの、元歌の他の句を引き出すためのもの、元歌全体を考慮することが要求されるもの、などのように細分化して考察している。

A型　引歌であることを明示してある場合。

「――と」「――など」と表現されており、本文に融合していない。作者や登場人物が意識して引用するのであるから、歌意はかなり重要である。引用歌句は大幅には改変されていない。（中略）

B型　引用歌句が本文と融合、形式の上からは引歌であることが明示されていない場合。（中略）A型にくらべると原歌を複雑に利用する方法であって、歌は解体引用される。

続いて、吉田茂氏は、この山口氏の研究を『栄花物語』に援用し、AB型の別を独自に分類して考察している。

---

[5] 山口博「源氏物語の引歌」　山岸徳平、岡一男監修『源氏物語講座　第七巻：表現・文体・語法』有精堂出版／一九七一

[6] 山中裕『歴史物語成立序説』第二章第五節「栄花物語における源氏物語の影響」東京大学出版会／一九六二　＊初稿「国語と国文学」三〇‐七／一九五三

A型の引歌の出典の中では、『古今集』が群を抜いて多く、それに『拾遺集』が続くところは、時代を反映したものであろう。同時に、『伊勢物語』や『伊勢集』を出典とする例が目立っている。歌の内容について分類すると、春夏秋冬の歌をまとめた四季歌九首（春四首、秋三首、冬二首）、恋歌七首、賀歌四首、雑歌三首、哀傷歌二首、他に雑躰二首、神遊歌一首で、恋物語の『源氏物語』に比べて四季歌が多くなっていることに気づく。（中略）B型の引歌はA型のそれと比べ、四季歌が際立って多くなっていると言える。中でも春と秋の歌が多く、これは山口氏が『源氏物語』の引歌についての考察の中で、「春秋の自然（風景）描写に引歌が活用されている事を語っている」と述べられることと符合することになる。[7]

AB型の別を用いて『栄花物語』の引歌を観察すると、A型の引歌の出典の中では、『古今集』が群を抜いて多く、それに『拾遺集』が続くこと、『伊勢物語』や『伊勢集』を出典とする例が目立っていることを述べている。また、歌の内容に注目すると季節の歌が多く、B型の場合はその特徴が非常に際立つということを指摘する。

加えて、吉田氏は正続の違いについても言及している。

正篇では自然（風景）描写に引歌が用いられ、続篇では特に装束描写に集中するかたちで引歌が用いられている。両者は同じ引歌のようだが、その効果には大きな差異があると思われる。前者の場合は、古歌の力を借りてその場面が重層的、増幅的に描出されることによって情趣が増し、作品世界を豊潤なものにする効果があるが、後者の場合は、古歌の力を借りて装束を視覚的、映像的に認知しやすくなるものの、古歌の意味や歌人の感情がほとんど無視されてしまうので、その効果は表層的であると言わざるを得ない。やはり、正篇を記した作者は、歴史的出来事に取材しながらも、歴史そのままの記述を超えて、「物語」を創出しようという明確な意思を持っていたのではないだろうか。

一方、続篇の作者にはそれほど明確な意思は感じられない。

吉田氏は、どういった描写のために引歌が用いられるかを正編と続編で比較し、正編では

---

[7] 吉田茂「『栄花物語』の和歌・引歌考」　山中裕、久下裕利編『栄花物語の新研究：歴史と物語を考える』新典社／二〇〇七

自然や風景描写、続編では人々の装束の描写に集中するという結論を出している。そしてこのことから、正編の作者は歴史的事実を題材としながらも、物語として作品世界を豊かに創出しようとしていたのではないかと述べている。

問題の所在

ここまで参照した先行研究と問題の所在をまとめる。

まず、現在の研究の土台となっている松村氏の一覧表には不十分なところがあり、これのみに頼った研究には無理が生じてきている。そのため、松村氏の一覧表以降の研究を含めた再調査を行うことが本章の中心的な意義である。更に、その調査結果に基づき、次のことを考察する。

山口氏の研究で述べられた「物語構成上の重要な巻には引歌が多いのではないか」といった事象は『栄花物語』でも同様に見られるのかといった疑問について考える。『源氏物語』の場合は、光源氏の須磨明石への流離、女三宮と柏木の密通、そして薫と大君の悲恋という三つの物語を構成する巻であったが、『栄花物語』においては巻別の引歌用例数にどのような意味が見出せるかを調査、検討したい。

次節では、再調査の方針とその結果について述べる。

二、用例数と内容の関係

再調査に当たり、基本的には『栄花物語の研究』で提示された一覧表をベースとして、そこで指摘された項目の再検討と、『栄花物語全注釈』と新編日本古典文学全集、また吉田氏によって指摘された項目の追加によって、新たな一覧表を作っている。ただし、それに加えて、従来特に指摘のなかった部分について、筆者が追加した部分がある。詳しくは付録の一覧表を参照されたい。

本章における再調査の方針として、特に注記が必要と思われるものを以下に挙げる。

1. 別資料からの引用の可能性がある箇所も数える。
   ＊例：巻一一〔一三〕長和三年の年変わり表現
2. 一つの言葉に複数の引歌表現が含まれる場合、二例と数える。

＊例：二〇〔六〕「闇の夜の錦」

↓「春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やはかくるる」（古今集・春）

「見る人もなくてちりぬる奥山の紅葉は夜の錦なりけり」（古今集・秋）

3. 複数の歌集に重複して収録されているものは勅撰集を優先して数える。

4. 参考歌、類歌が多く特定し切れないものは、最も場面の内容と一致すると思われるものを選定する。

＊例：一一〔一三〕「ときはかきはの緑色深く見え…」

↓「山しなの山のいはねに松をうゑてときはかきはにいのりつるかな」拾遺集・賀

5. 現存の歌集に見えない歌の引用は「不明」として数える。

＊例：一二〔二四〕「河ぞひ柳風吹けば動くとすれど根は静かなり」

6. 典拠が不明であっても、五及び七音の和語かつ「…と・など」で示されているなど、引歌と認められるなら「不明」として数える。

＊例：一三〔二九〕・一四〔二五〕「いつまで草の…」

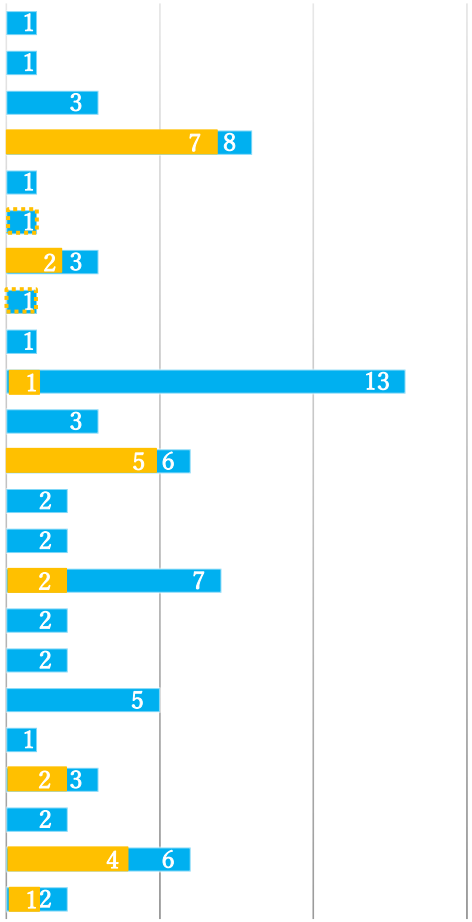
巻別引歌用例数

はじめに、作中の引歌数を巻別に集計して〈**図1**〉にまとめた。引歌が確認できなかった巻は表記していない。単純に数を見ると、前述した長和三年の年変わりに用いられた引歌の数が圧倒的に多いため、巻十一が十三例と突出している。続いて多い順に挙げていくと、巻五、十六、十三、二十七、二十という結果となっており、ここまでが五例以上の引歌を含む巻となっている。四例の巻はなく、相対的に見て「多い」とするには五例で線を引くのがよろしいかと思われる。

一方、表の右行、濃い色で示した部分と黄色の帯で、松村氏が除くとしていた巻十一での引歌群と同じ用法である年変わり・季節変わりに用いられた引歌を除いた残りの数を試みに示している。年変わりに限って言うと、複数の引歌表現がまとまって用いられる長和三年のような例は、この巻十一、十六以外に目立ったものはない。除いた残りの数は五〇例となり、総数の約三割が年変わり、季節変わり表現であった。

図1　巻別引歌数

巻	引歌数	年変わり・季変わりを除いた数
1	1	1
3	1	1
4	3	3
5	8	7
6	1	1
7	1	0
8	3	2
9	1	0
10	1	1
11	13	1
12	3	3
13	6	5
14	2	2
15	2	2
16	7	2
18	2	2
19	2	2
20	5	5
21	1	1
24	3	2
26	2	2
27	6	4
28	2	1
総計	**76**	**50**



引歌が多い巻の内容

続いて、ここまで挙げた六つの巻について、巻毎の内容、どういった部分に引歌が使われているかを確認する。巻名の由来についてもそれぞれ触れておくが、正編の成立当初から巻名があったかどうかについては不明である。松村博司氏は、「正篇三十巻の巻名について考へてみるに、果して作者自身によつて命名せられたものか否か、肯定するにせよ、否定するにせよ、ともに確実な根拠に乏しいやうに思はれる。[8]」と述べている。また一部の巻名が短編物語の題名に近いものがあることを指摘する。例えば巻二「花山尋ぬる中納言」や巻二十一「後くゐの大将」のようなものは、「逢坂越えぬ権中納言」「思はぬ方にとまりする少将」

[8] 松村博司『栄花物語の研究』第一篇第六章「巻名について」刀江書院／一九五六　二一一頁

のような名前と同じパターンをもっていることが分かる。こういったタイトルの傾向[9]は平安後期以降に顕著に見られることから、松村氏は「もし正篇に作者自身による巻名が附けられてゐなかつたとするならば、出羽の弁が続篇の巻三十一―三十七を書いた時（中略）に、正篇をも籠めて命名したものではなからうか[10]」と推察している。

以下、各巻の内容をまとめるが、松村氏による『栄花物語全注釈』の各巻の解説から、内容について重要と思われるものを合わせて引用する。

巻五「浦々の別」

藤原伊周、隆家兄弟が花山院に対する不敬事件により、それぞれ筑紫と但馬に流されてから、再び帰京するまでの顛末が詳しく物語的にしるされていて、ほとんど全巻をこのために費し、独立性の強い特異な一篇の物語を構成しているところに大きな特色が見られる。[11]

巻名は、伊周が流離中に詠んだ作中歌「かたがたに別るる身にも似たるかな明石も須磨もおのが浦々」が元となっており、これは『拾遺和歌集』雑の部の「白浪はたてど衣にかさならずあかしもすまもおのがうらうら」という人麻呂の歌を用いた本歌取りの歌である。道長の甥である伊周兄弟が失脚するところから巻が始まり、大宰府への左遷を経て、二年半後に帰京するところで終わる。その間、同母姉妹である中宮定子が天皇の子を二人生み、兄弟の母高階貴子が亡くなるといったできごとが挟まれ、一貫して中関白家に注目する巻となっている。また、巻頭、巻末が伊周の失脚と帰京とで対応しており、構成がしっかりと考えられた巻であるという印象を受ける。

引歌の用法についても、六つの巻のうちで人物の感情を表すために用いられた引歌が最

---

[9] 小木喬氏は以下のように述べている。「上に示されている連体修飾語の内容が、下に示されている人物によって行動されていることを意味する形のものである。こういう形の題名は、「源氏」以前では「月待つ女」一編だけが知られている」（小木喬『散佚物語の研究　平安・鎌倉時代編』第一章第二節五「六条斎院物語合」笠間書院／一九七三　三八頁　＊初出「六条斎院物語合について」「国語と国文学」四九-二／一九七二）

[10] 注9　二一二頁

[11] 松村博司『栄花物語全注釈　二』角川書店／一九七一　解説一四四頁

も多い巻であり、年変わり、季節変わりのための引歌は一例しかない。

巻十一「つぼみ花」

本巻は比較的短い巻に属し、三条天皇の皇女禎子内親王の御誕生と、帝が土御門殿に行幸されて、若宮と対面されることなど、内親王を中心とする記事が主要なものとなっており、全巻の約六割を占めている。年紀的にも（中略）月日の順を追って正確に描かれているが、単一の事項を述べたものとして当然ともいえよう。[12]

巻十一「つぼみ花」の巻名は、巻八「はつはな」にて先に彰子に生まれていた道長の初孫敦成親王を「はつはな」と呼んだことに対して、初めての女子の孫である禎子内親王を呼んだ作中の言葉が元である。その名の通り、禎子内親王の誕生記が中心となっており、冒頭に先帝一条天皇の女御顕光女元子と道兼女尊子、また巻末近くに教通室である公任女の懐妊に言及がある以外は、ほぼ妍子と禎子内親王に注目している。巻末では禎子内親王の祖母と曾祖母に当たる倫子と穆子に対面し、穆子が曾孫を喜ぶ場面で巻が終わる。

この巻十一の引歌は、一例を除き、松村氏が除くとしていた過剰な引歌による長和三年の年変わり表現である。大勢の女房、乳母たちを従え、七月に誕生した内親王を連れた妍子の参内が済んでからのことで、和歌集の序文のような様相をなしている。新編全集は頭注で、「ここを特別に彩る理由があるとすると禎子内親王の誕生しか考えられないだろう[13]」としており、この美文調は他資料から持ち込まれた記述であろうとしている。それ以外の一例は、松風の音を管弦の楽器と重ね合わせる表現で、自然描写である。

巻十三「ゆふしで」

前斎宮當子内親王出家の話は、前巻第三八節の前斎宮帰京後、三位中将道雅と密通の噂が立ったという話を受けて書かれたもので、本巻においては歌物語的な色彩が濃く描

---

12 注3　解説二四八～二四九頁

13 山中裕ほか校注『栄花物語2』新編日本古典文学全集　小学館／一九九七　三六～三七頁

かれている。（中略）次いで三条院御悩重篤・御出家・崩御・葬送・御遺財処分・御法事・中宮の供養のことなど、三条院に関する一連の記事がかなり丁寧に描かれている。（中略）続いて本巻における主要な記事として、東宮敦明親王の退位事件と、その後において道長の女高松殿明子腹の寛子に婿取られる記事が続き、これら一連の物語は全巻の半ば以上を占めている。[14]

巻十三「ゆふしで」の冒頭では、前巻から続いている伊周の息子道雅と前斎宮当子内親王との話題が語られ、巻名は道雅が前斎宮に宛てて詠んだ歌に由来するものとなっている。斎宮との恋愛譚は巻の冒頭の僅かな分量のみであって、巻全体を見た場合の大きなできごとは、三条院の崩御に次いで敦明親王の廃太子と敦良親王の立太子、立太子の機会を二度にわたって奪われた敦康親王、そして道長女寛子に夫小一条院を奪われた延子の嘆きといったように、廃太子を中心としたものである。巻末は、源経房が三条院の遺笛を妍子の元に持参し、禎子の乳母が詠んだ歌で巻が終わる。

この巻十三には引歌が六例あるところ、二例が冒頭の斎宮に関わる部分、二例が延子の嘆き、残る二例が三条院への哀傷と年変わり表現である。確かに分量的には廃太子の話題には遠く及ばないが、巻名のこともあり、作者はこの斎宮の話題を重要視していると思われる。

巻十六「もとのしづく」

本巻は『栄花物語』の中でも屈指の長大な巻として、阿弥陀堂造営のように、前巻との有機的関係に乏しい書き方のところもあるが、一面堀河左大臣一家の醜い争いを中心として、延子・頼定・顕光と、次々に病没して、総ては死が解決してゆく人生の哀愁を写したところや、長家北の方（行成女）の死や公任姫君の急死を写して物語的にすぐれた場面を形成しているところがあるとともに、尚侍嬉子の東宮御参りのような明るく、しかも物語的にすぐれたところも多く、読み応えのある一巻というべきである。[15]

巻十六「もとのしづく」の巻名は、先妻延子が亡くなった際に、夫小一条院が詠じた引歌

---

[14] 注3　解説四七二頁

[15] 松村博司『栄花物語全注釈　四』角川書店／一九七四　解説二四五頁

表現が巻名となっている。これは「すゑのつゆもとのしづくやよのなかのおくれさきだつためしなるらん」という遍昭の歌が元になっており、『遍照集』には「よのはかなさのおもひしられはべりしかば」という詞書がある。延子の死に始まって、もがさの流行や人々の死を描き、法成寺の金堂供養の準備が盛んに行われているところで終わる巻である。本巻で訃報に言及がある人物は、源頼定、藤原道綱、藤原行成女、藤原顕光、藤原公季の子息、公任女（円融后遵子の養女）である。世の無常、儚さを表現する巻名は本巻を象徴していると言えよう。内容としてはそういった人の「死」が多く描かれる巻と言えるが、松村氏は「その内部に明暗の交替のはげしい巻のように見受けられる」としている。「明」に当たる話題としては嬉子の東宮参入や、枇杷殿、阿弥陀堂の造営などが挙げられるだろうが、分量的には「暗」に当たる部分の方が多い。

また、この巻には巻十一と同じく妍子周辺の場面で季節変わりの表現が固まって用いられている部分がある。これも同様に、妍子方の女房による記録等が用いられたかと疑われる部分である。

巻二十「御賀」

本巻はほとんど一巻を挙げて、倫子の六十の賀を描いている。道長の五十の賀は、長和四年十月二十五日に皇太后彰子の手によって行われ、それは本書巻第十二〈たまのむらぎく〉に相当する部分であるが、何故か本書にはその記事はない。[16]

巻二十「御賀」は、巻名の通り、道長の妻倫子の還暦の祝賀を描く巻である。『栄花物語』の中でも短い巻で、巻末に源経房が太宰府にて没したという訃報以外は、ほぼこの「六十の賀」だけに集中している。にもかかわらず五例という数が見えるのは、道長の正妻と、三人の帝の中宮となった娘たちという『栄花物語』の登場人物たちの中でもトップクラスの地位の人々が挙って登場する巻であり、きらびやかに飾られるべき内容であることと、二つの歌を典拠としていると思われる「闇の世の錦」という言葉があることが理由に挙げられるだろう。ほぼ同じ表現が巻二十四「わかばえ」にも見える。

[16] 注15　解説四八七頁

巻二十七「ころもの玉」

前巻の記事を承けて、中納言長家北の方逝去の事、大納言公任出家の物語、大宮彰子が落飾されて上東門院と号された事等を主要記事としているが、その他日時を記して編年体で、さまざまな事柄が記されていて、巻第十六〈もとのしづく〉に匹敵する長文の巻となっている。（中略）要するに本巻は、中に教通と禔子内親王の婚儀のような記事もあるのであるが、全体として死や出家の物語が主体を占め、暗の巻というべきであろう。[17]

最後に、巻二十七「ころもの玉」は、二人の妹（寛子と嬉子）を亡くした後に出家した彰子と、在俗のままの妍子による贈答の歌語が巻名となっている。巻の冒頭から詠み人知らずの体で歌の贈答を並べ、立て続けに亡くなった寛子と嬉子を世の中全体が惜しんでいるような視点で語り始める。続いて道長の息子長家の妻となっていた斉信女が死産の上に母体もすぐ亡くなるという記事があり、他にも小式部内侍、源顕基の北の方の訃報が続く。娘を失った父斉信は公任と嘆きを共有しているが、公任は同様に道長の息子教通と結婚していた娘を亡くした経験を持つ。そういった残された人々の嘆きや出家が描かれる本巻は、亡くなった人々の一周忌で締めくくられる。引歌は年変わりが二例あるほかは、斉信と公任の心情や居所に関わる部分で用いられている。

六つの巻をどう捉えるか

ここまで各巻の特徴を松村氏の意見を交えてまとめてきたが、これらの巻の特徴は何かと考えると、なかなか難しいものがある。しいて言うならば、ただ編年体でできごとを綴っただけでなく、その巻の主題とも言うべき中心的話題があるということが挙げられようか。巻五「浦々の別」は伊周兄弟の左遷と帰京、巻十一「つぼみ花」は禎子内親王の誕生記、巻十三「ゆふしで」は敦明親王の廃太子、巻十六「もとのしづく」は疫病と死、巻二十「御賀」は倫子の還暦の賀、巻二十七「ころもの玉」は家族と死に別れた人々の嘆き、といった具合に主題的な内容が設定でき、前斎宮に巻名が由来する巻十三「ゆふしで」を除いて、巻名と

17 松村博司『栄花物語全注釈　五』角川書店／一九七五　解説四〇四〜四〇六頁

一致している。もっとも、前述の松村氏による「続編の成立時に正編にも巻名がつけられた」という説を採用するならば、既にある内容に合わせて巻名がつけられたことになる。

しかし、もちろん各巻は必ずしもそれだけに集中しているわけではない。特に「もとのしづく」と「ころもの玉」は、分量としてはわずかだが、松村氏が指摘するように、暗い死の話題の合間に東宮参入や教通の結婚のような明るい話題が混じることもある。そして巻十三「ゆふしで」は、廃太子という大きな事件を中心に据えることはできるが、巻名との一致が見られない。巻名に関わっている前斎宮の話題は冒頭の僅かな分量で終わってしまう。それに関連して、巻名の由来に注目すると、六つの巻の内、「つぼみ花」と「御賀」以外の四つが歌語や引歌表現によるものとなっている。正編三十巻の巻名のうち、歌を由来とするものは九つあるが、本文中に現れる引歌表現を由来とするものは「浦々の別」と「もとのしづく」のみである。それを思えば、巻名に関しても引歌ないしは歌語に関わるものであるという傾向は認められよう。

加えて、これらの巻の中心的話題は、道長方のできごとに限らないという点にも注目される。道長家が話題の中心にあり、かつ喜びの話題として挙げられるのは巻十一、二十で、巻二十七は巻名こそ彰子と妍子の歌に依っているが、家族の死による悲しみを語る内容であり、公任や斉信の家について割かれる分量も少なくない。巻五は中関白家の悲哀に注目した巻であるし、巻十六は疫病という社会不安を描いた巻である。巻十三は「前斎宮」と「廃太子」というように、注目される話題が二つあるが、そのどちらも道長家が中心ではない。表面的に見るならば、様々な家の、様々な人々の、喜怒哀楽に注目していると言えるだろう。

このように、巻毎のあらすじや巻名と内容の関係性といった特徴を参照する限りでは、『栄花物語』の引歌表現の特徴が『源氏物語』のそれと同じと見るにはいささか早計であろうと思われる。先行研究として挙げた山口氏の研究では、『源氏物語』の「物語構成上の重要な部分」に引歌が多いとされ、その中心は光源氏の須磨流離、女三宮と柏木の密通、そして薫と大君との悲恋という話題の周辺の巻であった。これら三つは『源氏物語』の全編を通したストーリーの重大ポイントを振り返ろうとすれば、必ず挙げられるような話題であろう。

それに対し、先に挙げた『栄花物語』の六巻はどうだろうか。六巻は連続しておらず正編全体に分散しており、『源氏物語』で見られた「須磨――明石――松風」のまとまりというように、関連する話題で集めるということはなかなか難しい。しかしこの点は、作品全体の分量を考えればさほど問題ではなかろう。

次に、正編全体で見た場合に、これらの巻が重要な部分と認められるかどうかを考えてみたい。そこで、岡一男氏による『栄花物語』正編の総括を参照する。

上篇では「浦々の別」における道長の反対派伊周一家の流謫のさまや、「輝く藤壷」「鳥辺野」「はつ花」の諸巻の彰子中宮の栄華のさまと定子皇后の悲劇的な死との対照などすこぶる精彩があり、その後は彼一家の顕栄、子女の入内・立后・出産、外孫皇子の立坊・即位の華やかな諸儀式がはてしなく続く。特に巻十五「疑」で、道長が出家してからは、その法成寺創建を中心とする仏事供養の盛儀に筆力を悉し、「本の雫」「音楽」「玉の台」「鳥の舞」などで、我々はその未曽有の堂塔の荘厳と天皇・東宮・三后の行幸啓の下で行われた供養の華美絢爛なさまに恍惚とされる。しかし、盛者必衰の理で、道長は三女一男に先立たれつつ、万寿四年十二月六十二歳で薨ずるが、そのさまを釈迦の入滅に比して、「鶴の林」に描いている。そして翌年の二月の除目に、道長の六男長家が権大納言に陞るので、上篇は終っている。[18]

『栄花物語』の重要なトピックとしては「伊周一家の流謫」「彰子と定子の対照」「仏事の盛儀」「道長一家の繁栄」そして「盛者必衰」が挙げられている。その中で名前が挙がっている巻五「浦々の別」はやはり特徴的であることが伺えるほか、ここでは具体例として挙がっていない「つぼみ花」と「御賀」に関しては道長一家の繁栄を描く巻と捉えられる。しかし、単純に引歌が多い巻はこれらのトピックが見える巻であるとしてしまうには、廃太子や前斎宮の話題が混在していた巻十三「ゆふしで」をどう解釈するべきかという問題や、「もとのしづく」「ころもの玉」を仏教や盛者必衰に注目した巻として良いのかという疑問が残る。

また、これら六巻の中での共通点があるかどうかを考えた場合、先ほど様々な家の喜怒哀楽が見られると述べたように、一見しただけではそこに共通する何かがあるかは分からない。強いて言うならば、「失脚」「廃太子」「死」など、暗い話題が多いように思われるが、それも「誰から見て暗い」のかという点に注意が必要である。例えば『栄花物語』正編は道長の死によってその三十巻が終わり、その構成は『源氏物語』における光源氏と「雲隠」の○

---

[18] 岡一男『古典逍遥――文芸学試論――』十三（一）「歴史物語（第一稿）」笠間書院／一九七一　三五六頁　＊初出　高木市之助ほか『日本文学講座　第二巻』河出書房／一九五

巻にも重なるものがあるとの指摘[19]もあるが、そのように道長を主人公として中心にして見た場合とそうでない場合では、同じできごとであっても見え方が変わるのではないだろうか。歴史にはいわゆる勝者と敗者がいるわけで、『栄花物語』の視点がどこにあるのかという点も含めて考察する必要があろう。

次節では、これらの点を更に深め、最終的にこれら引歌の多い巻々をどのように捉えるべきか、考察する。

三、引歌が多い巻で読む『栄花物語』

〈道長中心〉と〈道長以外〉の視点

本節では、先に挙げた六つの巻の内容について、二つの視点から考察する。ここでいう二つの視点とは、〈道長中心〉と〈道長以外〉である。前節では極力誰の視点にも立たずに内容を追ったが、本節では、それらの巻でのできごとを〈道長中心〉に見るか、それとも道長に敵対する〈道長以外〉の視点で見るかによって、見え方がどう変わるのか、またそれらについて『栄花物語』はどういった記述をしているのかについて考えてみたい。

巻五「浦々の別」

本巻は中関白家が中心となり、その没落と悲哀を描いているのであるから、まず〈道長中心〉の視点で見るならば、それは「ライバルが弱体化していく様」を詳細に見ていくことに他ならない。巻五が伊周の帰京で幕を閉じたあと、巻六「かかやく藤壺」では打って変わって彰子の裳着と入内準備という明るい話題によって幕開けとなる。史実では彰子の入内の六日後に敦康親王が誕生するのだが、そこに意図的な操作が入っていることは第一章にて

---

[19] 藤岡作太郎は以下のように述べている。「さて栄華が一旦鶴林に筆を絶ちたるは、源氏が幻に主人公の最期を含めて、雲隠の欠陥あるに同じ。殿上花見以下、道長薨後の事を記したるは、源氏の匂宮以下に擬えたるものにして、下篇を十帖としたるは、或いは宇治十帖に比したるにてもあるべし」　藤岡作太郎著、秋山虔ほか校注『国文学全史　平安朝篇2』東洋文庫　平凡社／一九七四

すでに述べたところである。〈道長中心〉の立場で、かつ意地の悪い言い方をすれば、巻五は、巻六にて栄花の始まりとなる彰子入内という話題を華々しく演出するための、言わば「前振り」である。しかし、そのような悪意は、本文からは伺えない。道長も詮子も、『源氏物語』における右大臣と弘徽殿大后とは違うのである。

反対に〈道長以外〉の視点から見た場合、伊周の傷心に寄り添い、敗北者への同情を誘い、道長という勝者がいた歴史の違う一面を眺める内容であると言えるだろう。それは一度播磨へ配流された伊周が、密かに京へ戻っていたことへの世間の批評にも表れている。

> 世の人、この殿の御有様を、あるは、「あしうしたまへれば、ことわり」と言ふ人もあり、またすこし物の心知りたる心ばへある人は、「かの御身にては、おはしたるにくからず。母の死ぬべきが、われを見て死なん、われを見て死なんと、寝ても覚めても言はむを、身はいたづらになるともなど思すにこそはあらめ。あはれなることなりや。かのもとの播磨も今は過ぎたまひぬらむかし。中納言こそかしこくおはせずなりにけれ。なほたましひはおはする君ぞかし」などぞ聞えける。
>
> （1：二六五頁）

危篤の母高階貴子に一目会うため、外に知れたらもう二度と都の土は踏めないだろうと覚悟しつつ密入京の罪を犯した伊周に対する賛否両論が描かれる。しかし、伊周に同情的な意見を「物の心知りたる心ばへある人」のものとして、母のため故の行動であり、「あはれ」であると述べている。一方、密入京には至らなかった弟の隆家についても言及されるが、こちらには称賛のみで否定の語は見られない。この反応を踏まえると、伊周の行動は、「決して推奨はされないが、人の心を打つ、情にあふれた行為である」という評価となろうか。

巻十一「つぼみ花」

禎子内親王の誕生を書いた「つぼみ花」は、〈道長中心〉にして見れば、その名の通り栄花のつぼみの一つであり、喜ばしいできごとであろう。しかし道長の描写を詳細に追うと、やはり内親王であったことには不満を感じている様子が見える。

> 殿の御前いと口惜しく思しめせど、さはれ、これをはじめたる御事ならばこそあらめ、

またもおのづからと思しめすに、これもわろからず思しめされて、今宵のうちに御湯殿あるべくののしりたつ。

（2：二三頁）

今後は男皇子も期待できようと思い直してはいるが、ここで「口惜し」という道長の感想を記したことは注目される。これは道長の野心を思わせるものである一方、一種の伏線でもあるだろう。この後妍子には期待していた男皇子が生まれなかったことや、敦明親王の廃太子があることを思えば、ここは道長にとっての一つの試練を予感させる場面でもあるのである。

一方、〈道長以外〉の視点で見た場合、巻の冒頭に少し語られる一条後宮の後日談的なエピソードと、妍子に仕える女房たちに注目される。巻十一の冒頭が顕光女元子と道兼女尊子についての話題で始まることは前節にて紹介したが、まず元子に源頼定が密かに通っていることが語られる。二人の恋愛は父顕光に快く思われず、父が娘の髪を切って尼にし、それでも密会をやめないので家から追い出してしまう。このように乱暴な結末を迎えてしまうが、それに対し、世間の反応という形で顕光の行動を批判している。

宰相もさるべきにこそと思ひつつ、おろかならず通ひきこえたまふほどに、おのづから御髪なども目やすくなりもてゆく。あやしうひがひがしきことに世の人も思ひきこえたり。同じき若君達といへども、これは村上の四の宮、源帥殿の御女の腹なれば、いとものきよくものしたまふを、あやにくにこの殿のたまふをぞ、かへすがへすあやしきことに人聞ゆめる。

（2：二〇頁）

当の宰相頼定は色好みとして知られた人物ではあったものの、元子を大切にしているようであり、しかも村上天皇と源高明の孫であるから実に高貴な人物である。娘の再婚相手としてはふさわしいであろうに、この頑迷は何であるかと人々は噂したのである。『栄花物語』ではこの顕光について、年老いて偏屈になった人物という表現が度々見られる。この部分もその一例である。

また、妍子が産後再び参内する際に多くの女房が付き従ったことが書かれるが、その中には、元々は高貴な家柄の姫として育てられていた人々の名前が挙がっている。このことにつ

いては第三、四章でも紹介したが、元は帝の妻になるべく育てられたような姫君たちが勝者の家の姫に仕えるようになるというのは、実に屈辱的なことであり、しかし抗えないことでもあったであろう。しかしながら、『栄花物語』は道長家を直接批判はしない。これらの人々の名前を挙げ、「さてもあさましき世なりや。太政大臣の御女もかく出でまじらひたまふ、いみじきことなり」（2：三五頁）とだけ述べている。

巻十三「ゆふしで」

巻十一で予感された道長の試練は、早くもここで現実となる。「ゆふしで」では三条天皇の崩御と敦明親王の廃太子が描かれるが、〈道長中心〉の視点でこれらのできごとを見た場合、この廃太子を以て道長の地位が当面揺るぎないものになったということは間違いない。道長は外戚の地位を手放さずに済んだばかりか、三条皇統の流れを断ち切り、自らの姉と娘たちが成した一条皇統が生き残ることとなったのである。しかし、肝心の後一条天皇の元服の記事は『栄花物語』では詳しく描かれず、それに先立って道長が太政大臣になったことも『栄花物語』には言及すらない。松村氏[20]は『大鏡』では詳細にこの廃太子の真相が語られているのに対し、『栄花物語』では、小一条院となった敦明親王と寛子の結婚や、それと対比される堀河の女御延子と顕光の姿に関心を持っているようであると指摘する。

ではその顕光や延子のような〈道長以外〉の人々にとって、この巻十三で起きたことはどういった意味を持つか。言うまでもないことである。今上帝と東宮がどちらも道長の孫となった今、それに勝利することは非常に困難になった。しかも顕光と延子にとって更につらいことには、当の小一条院が道長の女寛子に婿入りし、顕光親子を見捨てる形になった。『栄花物語』はこの堀河殿を出ていく小一条院と残される人々の様子を追っている。

> よろづにただわが御命知らぬことをのみ、えもいはず聞えたまひて、出でさせたまふに、宮たちのたち騒ぎ見送りたてまつらせたまふに、御涙もこぼるれば、ついゐさせたまひて、よろづに慰めたてまつらせたまひて、御乳母ども召して、抱かせたてまつらせたまひて、殿の御方におはしまさせてぞ、すこし心やすく出でさせたまふ道のそらもなくいみじう思さるべし。

---

[20] 注3　解説四七三頁

（2：一二六頁）

延子との間に生まれている宮たちはまだ幼いようで、父を慕って騒ぐのを乳母に抱かせてなだめるが、小一条院自身も子供たちのことを思って心を痛めている。『栄花物語』はこの廃太子事件について、気ままな自由を懐かしむ親王による辞退という姿勢を貫いているが、敦明親王に対しては強く否定するようなことをしない。その一方で、顕光に対する厳しい見方は依然としてある。

殿はこはぎにて、足駄はきて、杖をつきて、道のままに歩かせたまひて、御前の小木どもの小さき繕はせたまへば、一、二の宮は人に抱かれさせたまひてつづき歩かせたまふほども、あはれにすごげなり。高松殿の有様を、院いかに御覧ずらむと、御目移りのほども、恥づかしうすずろはしう思さるる御心の内もことわりながら、またあながちなり。

（2：一三二頁）

栄えた道長家と比べられては、小一条院はそちらに目移りしてしまうことだろうと考える姿勢について、もっともではあるがと一応の理解を示しつつも、「あながちなり」とする。新編全集は「身のありようをわきまえぬというもの」としているが、ここはやや意訳であろう。次の用例は、巻八「はつはな」にて、敦成親王が生まれた後、彰子が再び懐妊により退出するという場面である。これを見れば、顕光についての「あながちなり」という表現は、強情にこうでなければならないと考えることであると思われる。

こたみは男女の御有様あながちなるまじけれど、なほさし並ばせたまはんほどの威さはこよなかるべければ、同じさまを思し心ざすべし。

（1：四三三頁）

既に男皇子が生まれているのであるから、次に生まれる子には男女の有り様に「あながちなる」ことはないのだが、それでもやはり男皇子が二人立ち並ぶのはこの上ない喜びであるから、今回もそのように祈願するのであろうというのである。では、ここで顕光の何が「あながちなり」と批判されているのかというと、いつまでも過去にこだわり嘆いていることではは

ないかと思われる。顕光の描写の直前には、「上陽白髪人」の詩句が引かれ、延子が小町の「わが身世に経る」という歌句で嘆いている。こちらは批判ではなく「あはれ」が強調されるが、二人の嘆きは同じである。巻を通して中関白家に寄り添った巻五「浦々の別」ほどの分量ではないにせよ、こうした顕光親子の嘆きにも『栄花物語』は注目している。

この顕光親子に加えて、この廃太子に関連する一連の事件で、自ら退位を申し出た（ということになっている）敦明親王は除いて、本来最も絶望するはずの人物がいる。残る一条天皇の皇子は敦良親王だけではない。定子所生の敦康親王は、またしても帝位を逃したのである。彼もこの事態を注視し、今度はもしやと望みをかけていたかも知れないが、東宮となったのは敦良親王であった。それは同時に、中関白家にとどめを刺すことになったであろう。既に伊周は亡く、弟の隆家も病を理由に大宰府に赴任しており、更に伊周の息子の道雅も本巻の冒頭で前斎宮との恋愛スキャンダルを起こしていた。そんな状態ではそもそも望みはなかったであろうが、これら中関白家の人々に関する記述はほぼなく、敦康親王についての言及があるのみである。それも顕光と延子に比べればかなり少ない。

敦康親王、ひいては中関白家と、顕光親子の違いは何であるか。それは「諦観」だったのではないだろうか。立太子の記述に続き、敦康親王について次のような言及がある。

> 式部卿宮、この方にはむげに思しめし絶えにしかど、このたびの隙にはかならず立ち出でさせたまふべかりつるを、御宿世をば知らせたまはずとも、なほあやしくとはいかでか思しめさざらん。世とともにはればれしからぬ御気色にも、心苦しうなむ。
>
> （2：一一一頁）

敦良親王の立太子を聞いた敦康親王は、やはり不条理なことと落胆する。しかし顕光と異なっているのは、「むげに思しめし絶え」ていたことである。彼自身も自分の後ろ盾のなさをよくよく理解していたのであろう。自分だって皇后腹の皇子であるのに道理に合わぬことは思うけれども、元より諦めはついているという点に顕光との違いがある。そして顕光の「執心」に対する批判は、物の怪となって道長家に大きな祟りをもたらすことの、一種の伏線であると思われるのである。敦康親王も『栄花物語』では一度だけ物の怪として名前が挙がったことがある[21]が、その時は大ごとにならず収束している。

---

[21] 「さまざまの御物の怪どもいみじうこはし。関白殿わたり、式部卿宮さへ出でたまひ

本巻は延子や顕光をはじめとした多くの人々の死や天然痘の流行といった記述が目立つ。〈道長中心〉の視点から見ても、当然この社会不安が根底にあるが、それに対して道長は阿弥陀堂を建立しようとしていることが語られる。『栄花物語』の中ではその完成は描かれないが、ゆくゆくは法成寺に発展するものであり、道長の仏教帰依の一つと言えよう。この阿弥陀堂は、本巻にて妍子方で書写された法華経の供養の場となり、美しく仕立てられた経巻と人々が御堂へ集まる様が描写されている。他にも道長家に関わる仏教の話題は、倫子と明子の出家、倫子による西北院建立があり、巻の後半になると、実際に行われるのは巻十七「おむがく」であるが、法成寺金堂供養の準備についての記述がある。また、四女の嬉子が東宮に参入しており、その周辺の記述だけは暗い社会背景に相反して華やかな様子である。このように、道長の周辺だけに限って言えば、死者の記述が多いこの巻も、仏教と東宮参入の話題だけで終わってしまう。世間は暗い雰囲気である一方、道長周辺の人々が仏道に励んでいる姿が差し挿まれるような構成になっているのである。異母兄弟である道綱が死を覚悟して出家した際には「あへなむ、めやすきことなめり」（2：二二〇頁）という道長の反応がわずかに見られたが、『栄花物語』においてはそれ以上のことは言及がない。

これまでの三巻では、同一のできごとに対して二つの視点から見た場合、どのように意味づけられるか、というものが多かったが、本巻では両者にそれぞれどのようなことが起きているか、という見方になりがちである。これは道長に近しい人物に不幸がなかったからという理由もあるが、巻十三「ゆふしで」の敦明親王廃太子により、道長の絶対的優勢が確定しているため、道長の視点が治世者としての視点となっていることも一因ではないだろうか。治世者にとって、死者の増加や疫病は「自らが治めている世の中の社会問題」なのであり、仏教の話題が増えるのは、治世者一族がその社会問題に対応する手段として仏教に頼っていることの表れではないかと考えられるのである。

一方、〈道長以外〉の人々は、登場する場面のほとんどが誰かの死に関わるものであり、〈道長以外〉の人々は、社会問題ではなく自らに起こったできごととして、死や病に向き合

て、いと恐ろしきこと多かるなかに、東宮の御乳母などの、貴船に祈り申したるなどいふことさへ御物の怪申すを」（3：七五頁）

っている。藤原行成の人事異動に関わる部分が例外であるが、それもなぜ異動することになったかというと、これも娘の結婚と死が間接的に関わっている。巻名の由来でもある小一条院による引歌は巻頭から語られる延子の死に際して引かれたものである。そこでは当然父親である顕光の様子に言及があるが、ここでもやはり顕光は嘲笑されている。

この殿はおはせぬ人をつと抱きて、よろづに言ひつづけて泣かせたまふも、いみじう悲し。「かかるをりにや、人は法師にもなるらん」とのたまはするに、御前なる人々心の中にほほゑまれける。源宰相はいと心苦しき殿の御有様を見捨てたてまつりたまふも、事のはじめいと情けなかりし御心の、思ひ忘れたまはぬなりけり。

（2：二〇七頁）

娘を失った悲しみに暮れ、こういった折に人は世を捨てるものであるかと言ったことを、軽々しい道心であると周囲の人々は嘲笑する。もう一人の娘である元子と連れ添い、体面上は婿であるはずの源頼定が顕光を見捨てていることにも言及し、それは顕光自らが招いたことであったのだと念を押す。延子死去の翌年にその頼定が亡くなった際にも、軋轢を残したままであり、頼定への態度が非情であると非難されている。しかし更にその翌年、顕光自身が亡くなった時の描写は「あはれに心細き御事なり」（2：二三二頁）と顕光に対して否定的な見方はされず、亡き妻の家のことを世話する婿小一条院への称賛が述べられている。巻十三「ゆふしで」での廃太子と寛子との結婚以降、『栄花物語』は顕光に厳しい目を向けてきたが、その死の描写はあっけないものであった。

巻二十「御賀」

巻五「浦々の別」がほぼ中関白家にのみ注目した内容であったように、この巻二十「御賀」は、ほぼ道長家の祝賀に集中している巻である。〈道長中心〉の視点では当然家族の慶事であるが、『栄花物語』は倫子や御賀の儀式にだけ注目しているわけではない。普段は一堂に会することの少ない彰子、妍子、威子、嬉子の四姉妹が母の御賀のために参集し、更にそこには妍子所生の禎子内親王も加わっている。彼女たちの引き連れている女房たちについての描写もまた引歌を用いていてきらびやかである。その他、庭の景色、高名な人物による調度品、集まった人々への禄なども、道長家の圧倒的な栄えを象徴するものである。

そのような道長家の繁栄も、〈道長以外〉の視点から見た場合には、「敗北の象徴」となるであろう。「浦々の別」が道長にとって「ライバルの弱体化」、つまり政争に勝利したことを意味するものであったのとは逆の構図である。しかし「浦々の別」での中関白家の没落には、それを描くことによって次の巻から始まる道長家の明るい話題を際立たせるというもうひとつの意味があった。ではこの「御賀」はどうだろうか。道長家の幸せにのみ注目した本巻に続く巻二十一「後くゐの大将」では、道長の息子教通の妻（公任女）が出産後に物の怪によって亡くなるという事件が起きている。この時の物の怪は道隆の息子隆円の霊であると思われた。それだけでは道長家に直接大打撃を与える事件ではなかったが、物の怪騒ぎはこれだけに留まらなかったのである。

巻二十七「ころもの玉」

本巻は、巻二十五「みねの月」と巻二十六「楚王の夢」にて起きた物の怪による大きな事件の後から始まる。その事件とは、道長の二人の娘、寛子と嬉子の死である。巻は二つに分かれているものの、この二人の死はひと月しか離れていない。〈道長中心〉の視点で見る本巻は、常に悲しみに沈んでいる。長家の妻であった斉信女が亡くなり、娘の死を嘆いている斉信も、その悲しみに呼応しつつ出家を選んだ公任も、もはや道長にとっては鏡を見ているようなものである。死産であった斉信女に対して嬉子は親仁親王を遺していったが、その親王の五十日祝いも、道長にとっては死んだ娘を思い出す機会となってしまっていることが伺える。

> 東宮よりも思し至らぬことなく、こまかにせさせたまへるにつけても、殿の御前、いとど忍びがたく思さるべし。花籠や折櫃物など、殿上人などにのたまはせたれば、みな書きつけをしつつまゐらせたり。あべいかぎりはめでたきにつけても、ましてとぞ思されける。
>
> （3：三三頁）

道長家を悲しみに追いやった二人の娘の死は、どちらも顕光と延子親子の物の怪によるものであるとされている。特に寛子は巻二十五「みねの月」にて、死の直前に、道長が小一条院にした所業によって自分が死ぬのだとはっきり述べている。

「何ごとをかともかくも思ひはべらん。ただつらしと思ひきこえさすることは、この院の御ことを、かからではべらばやと思ひはべりしことをせさせたまひて、身のいたづらになりはべることなんある」（2：四八一頁）

寛子が「敦明親王の件で、そうしないで欲しいと思っていたことを（道長が）なさって」と言っているが、この結婚について寛子本人の気持ちが叙述された部分は『栄花物語』には見受けられない。あるいは物の怪が言わせたことであるかもしれない。この訴えに対し、道長は「さやは思ひはべりし」（2：四八一頁）と弁解するが、寛子は亡くなり、更には巻二十六「楚王の夢」では嬉子も同じ物の怪によって死去する。このやりとりは「悲劇の種をまいたのは道長である」という考えを読者に印象付けている。

このように、〈道長中心〉に見た場合の本巻は「物の怪によってもたらされた死を嘆く」巻であったと言えよう。もっとも、「ころもの玉」において道長家にとって喜ばしいことが全くないわけではない。巻末では中宮威子が春以来妊娠していることが語られ、里下がりの準備をしているところで本巻は終幕となる。しかし、二度にわたって娘を失った道長には、「いみじう思されながら、もの恐ろしう胸つぶれ」（3：七五頁）と感じられ、これも不安の種となるのである。

では、〈道長以外〉の人々にとっての本巻が、娘の死によって心が弱った道長を他者が眺めるものとなっているかというと、そうではない。その他にも人々の死を報じる記事が多くあり、その正体には言及がないものの、斉信女も同じように物の怪によって亡くなっている。しかもこちらは死産であって子供を残すことができなかったのである。斉信の長い嘆きの言葉にも「児君をだに、平らかに得させてぞうせたまはまし」（3：二五頁）と、せめて子供だけでも形見に遺していてくれたならという訴えがある。こうした世の中の様子を『栄花物語』自身が次のように語っている。

あさましういみじう、えさらぬ人々を置きて別れたまふ人多かる年の有様、いはん方なく心憂しや。誰もよそよそなればこそおろかにもあれ、おのおの御家には、これに似たることなしとのみ思しまどふぞ、げにいみじうあはれに見えたまひける。（3：四〇頁）

他人事であったならなおざりであろうが、当事者にはまたとないつらいことだという、至極当然のことではあるが、この巻では道長家も道長以外の家もその「当事者」なのである。

引歌が多い巻によって作られる「あらすじ」

巻	道長中心	道長以外
5	（ライバルの弱体化）	中関白家の没落 **（続く彰子入内との対比）**
6	**彰子入内**	
11	妍子に禎子内親王誕生 **（後宮における試練の予感）**	顕光の頑迷 高貴な姫君たちの没落
13	**試練**を乗り越えて外戚確立	敦明親王廃太子 敦康親王、延子と顕光の嘆き **顕光の執心**
16	社会問題への対応策としての 仏教帰依	自家に関わる疫病や死 **顕光と延子の死**
20	家族の慶事、自家の栄え **（続く道長女の死との比較）**	（政争における敗北）
25・26	**寛子、嬉子の死**	
27	**物の怪による死に対する嘆き**	物の怪による死に対する嘆き

表１　引歌数の多い巻の展開図

ここまで、引歌数が比較的多い六つの巻について、視点を変えることによって各巻がどう違って見えるのかを分析した。巻五「浦々の別」から、既に道長優位の時代は始まっていたが、正編の終りに近づいた巻二十七「ころもの玉」に至って、どちらの視点からも同じものが見えるという事態になった。ここまでの分析で得られた内容を表にまとめると**〈表１〉**のようになる。

太字は展開の伏線や、その伏線の回収となっている部分を示している。濃い色で示した部

分は、引歌数の上では該当巻ではないが、補足として表記している巻である。引歌数が多い巻々は分散しているようでいて、実は話の展開には繋がりを持っており、この六巻だけで一種のあらすじを追える巻の集団である。そして、そのあらすじは最終的に物の怪となって道長家に害をなす顕光親子に大きく関わっていると言えよう。前節にて挙げた巻十三「ゆふしで」をどう解釈するべきかという問題についても、顕光に注目すれば一種の伏線を内包した巻として位置づけることができる。同様に、岡氏は巻十六「もとのしづく」を仏教行事の華美を述べる巻の例として挙げていたが、行事の主催側でない人々に目を向ければ、これもまた顕光親子に関わるものであると言える。

しかし、『栄花物語』の正編を全体的に見た場合、物語は顕光にそれほど注目しているわけではない。巻八「はつはな」まではまだ伊周が存命であり、中関白家との対比構造は続いている。また、巻十五「うたがひ」以降は仏教を中心とした、いわゆる「法住寺グループ」の巻が見え始め、顕光親子が関わる話題の合間にそれらが挟まれることになる。加えて、中関白家における巻五「浦々の別」のように、顕光家だけに集中していると言えるような巻もない。各巻でどういった場面で引歌が用いられているかは本章第二節と付録の一覧表を参照されたいが、延子が悲しみに暮れる様子に用いられたものは数例確認されるものの、顕光の心情などに対して用いられた引歌はない。

それらを踏まえると、この引歌数は顕光自身に注目させるためのものではなく、巻の展開や場面を飾り、強調し、印象付けるためのものであると言えよう。道長にとっての輝かしい栄花ばかりを徹底して述べる巻、所謂「敗者」と呼ばれる人々の嘆きを描いた巻、社会全体が暗闇に沈んでいる巻、「勝者」と見られていた道長家の人々までもが等しく「死」という悲しみを得る巻など、引歌で飾られたこれらの巻を並べると、さながら群像劇の様相を成すのである。そして、その巻々の最後に「勝者と敗者が同じ悲しみを感じている巻」が当たっていることは、群像によってつくられた「諸行無常」の歴史の姿を読者に印象付けたいという『栄花物語』の意図を象徴しているとは言えないだろうか。それは坂本太郎氏が「道長の栄花を述べ、その人となりを讃嘆するのに誇張のいい廻しをしているが、しかし著者はすべての人に深い同情をもち、共感をいだいて筆を進めている[22]」とした「善意の歴史」にも通じるものがある。

---

[22] 坂本太郎『日本の修史と史学』第二章「物語風歴史と宗教的史論の時代」講談社学術文庫／二〇二〇　＊原本　坂本太郎『日本の修史と史学』日本歴史新書／至文堂／一九五八

おわりに

本章では『栄花物語』の正編における引歌表現に注目し、その用例数の比較的多い巻について、道長を中心にした視点と道長以外による視点を比較しつつ、内容や構成について分析した。その結果、引歌で飾られた巻々は必ずしも道長の栄花を語るばかりのものではなく、道長の栄花の陰に隠れた敗者の様子や、勝者と思われた者でさえも死を嘆いている様子に目が向けられるような仕組みを成しており、『栄花物語』が表現したいものを浮かび上がらせる機能を有しているのではないかという考察結果を得た。

『源氏物語』で「物語構成上の重要な巻」に引歌が配置されていたのとは少し異なるが、道長にとっての「ただの栄花」だけでなく、「諸行無常」が浮かび上がる構成を意識して引歌を用いていたとするならば、『栄花物語』のその叙述と構成の能力は大いに再評価されるべきではないだろうか。

また、残る課題として、先行研究にて挙げられていたＡＢ型の分類の問題がある。吉田氏は『栄花物語』でのＡＢ分類と、元歌の部立の傾向について、「Ｂ型の引歌はＡ型のそれと比べ、四季歌が際立って多くなっている」と述べており、『源氏物語』の傾向との一致を見ている。しかし、今回の調査によって大きく用例数が増えたため、この点についても再度検証したい。加えて、ＡＢ型を分ける理由は他に見出だせないかという点についても、今後改めて考えていきたい。

第三章　巻八「はつはな」における伊周の遺言

：姫君たちの退場

はじめに

いつの世も、親は子より先に死ぬものであるが、子を遺して死ぬ親の不安や心配もまた、いつの世にもあるものであろう。平安の世も例外ではない。現存最古の歴史物語『栄花物語』には、死期を迎え、妻子を遺して最期を迎える父親たちの姿が描かれている。

中でも、巻八「はつはな」での、藤原伊周の死を前にした家族への訓戒の場面は、一家全体が重苦しい絶望の雰囲気をまとっている。二人の娘、息子道雅、北の方を前に、もう長くないことを匂わせ、没落による苦労や屈辱を予想し、今後の身の振り方、自らの後悔を子供たちに懇々と語り掛ける体で物語は綴られている。二人の娘はまだ結婚前の身であるが、その結婚を世話するべき父である自分は、今日とも明日とも知れぬ身である。頼るべき母（伊周北の方）も、子供の世話役として頼みにできるような人ではない。入内を夢見て大事に育てた娘たちは今後どうなってしまうだろうか。そんな嘆きの言葉に続いて、伊周が時勢について述べた「今の世のこととて、いみじき帝の御女や、太政大臣の女といへど、みな宮仕に出で立ちぬめり」という一節がある。「昨今は、貴き帝の御息女や太政大臣の御息女といえど、みんな宮仕えに出てしまうようだ。同じように自分の子供たちも身を落としてしまうのだろうか」、という危惧に加えて、「そうなったら自分の恥だから何とか踏みとどまってくれ」というのが伊周の最後の願いであった。

巻八「はつはな」は、その中関白家没落の仕上げともいうべき伊周の死――道長に対抗しようとした最後の相手の死が描かれる。伊周本人が巻八の時点で退場してしまうため、それ以前の話になるが、『栄花物語』は中関白家、とりわけ伊周の斜陽に注目しているのではないかと思われる点が多い。巻五「浦々の別」は「巻の大半を挙げて、藤原伊周・隆家兄弟が、花山院に対する不敬事件に坐して、それぞれ筑紫と但馬に流されてから赦されて帰京する

までの顛末を描いて、特殊な一篇の物語を構成してゐる」と言われ、しかもその端々に『源氏物語』のオマージュを織り込んで書かれている。このことからも『栄花物語』は伊周の人生に少なからず興味関心を持っていたのではないかと思われ、『栄花物語』を読み解く上で、伊周の描かれ方を追究することは非常に重要であろうと思われる。

本章では、伊周の死とその遺言に注目し、『栄花物語』における伊周の描かれ方の一端を明らかにする。また、伊周の妻や子供たち、弟隆家といった中関白家の人々、及び伊周と同時期に道長と外戚を争う位置にあった藤原為光とその娘についても考察する。巻八「はつはな」は、既に彰子の入内が達成され、後に後一条天皇となる皇子が誕生するなど、道長の栄花の始まりとも言える時期のことである。しかし『栄花物語』は、道長家の華々しい喜びの裏側にいる敗者ともいえる人々に目を向けることを忘れていない。これらの人々に対してどういった描写で向き合っているのかを考えてみたい。

一、伊周の遺言場面

伊周の遺言

巻八「はつはな」は、『栄花物語』の中で最も長編であり、その名の通り「栄花の初花」たる敦成親王の誕生を描いた巻である。その一方で、道長との政争に破れた伊周の最期を描く巻でもある。松村博司氏[2]は本巻を三部構成と見て、第一部は彰子の懐妊まで、第二部は敦成親王誕生記、そして第三部は、皇子誕生に対する伊周の嘆きから遺言と死を経て、一条天皇の譲位思案で巻が締め括られるまでとしている。本章で注目する伊周の遺言はこの第三部に当たる。また、松村氏は第三部の主要記事を「伊周の晩年と薨去」「中宮彰子引続き皇子出産の事」「具平親王女隆姫と頼通の結婚」「尚侍妍子東宮御参り」と大別し、伊周家に関わる一連の関連記事は、「巻八全体の中においては、道長関係記事と明瞭な明暗の対照を見せるような文学的構成が意図されているものである」と述べている。

以下、内容で区切りつつ遺言の内容を紹介する。伊周の遺言は子供と妻に語りかける台詞

---

[1] 松村博司『栄花物語の研究　第三』第一篇二「栄花物語巻五・六に関する覚書」桜楓社／一九六七　一五頁　＊初出「金城国文」二七／一九六三

[2] 松村博司『栄花物語全注釈　二』角川書店／一九七一　五八七～五九一頁

の体裁で書かれている。

年もかへりぬ。寛弘七年とぞいふめる。よろづの例の有様にて過ぎもて行くに、帥殿は今年となりては、いとど御心地重りて、今日や今日やと見えさせたまふ。何ごとも月ごろしつくさせたまへれば、今はいかがすべきと思し嘆き、さるは一昨年よりは、御封なども例の大臣の定に得させたまへど、国々の守も、はかばかしくすがやかに奉らばこそあらめ、いといとほしげなり。御心地いみじうならせたまへば、この姫君二所、蔵人少将とを並め据ゑて、北の方に聞えたまふ。

（1：四四八頁）

『栄花物語』巻八「はつはな」の後半、時は寛弘七年（1010）、道長との政争に破れ、中関白家の巻き返しはもはや絶望的な状況である。藤原伊周の病状は悪化し、地方からの税収もはかばかしくない。そんな状況について草子地、語り手部分は、傍線部で「たいそうお気の毒である」と言っているように同情を示している。そして、伊周は体調も優れず、自らの死を悟ったのか、三人の子供たちと妻を並べて遺言とも訓戒ともいえるものを語る。

「己なくなりなば、いかなるふるまひどもをかしたまはんずらん。世の中にはべりつるかぎりは、とありともかかりとも、女御、后と見たてまつらぬやうはあるべきにあらずと思ひとりて、かしづきたてまつりつるに、命耐へずなりぬれば、いかがしたまはんとする。今の世のこととて、いみじき帝の御女や、太政大臣の女といへど、みな宮仕に出で立ちぬめり。この君達をいかにほしと思ふ人多からんとすらんな。それはただ異事ならず、己がための末の世の恥ならんと思ひて。

（1：四四八頁）

伊周の長い台詞部分が始まる。これが本人の言ったものとしても一字一句違わないほど正確に伝えられているかなどは一旦おくとして、言っている内容やその表現には臨場感があって非常に写実的であると言えよう。二人の姫君を前に、「今の世は貴人の娘たちもみんな〈宮仕え〉に出るらしい」「娘たちを女房に欲しいと思う人は多かろう」と娘たちの将来や結婚について危惧する。また、娘たちに不本意な結婚があったとすれば、「世間には自分の采配と思われるだろう」と語るところを見ると、娘たちの将来を

心配していると思われる一方、自分の不名誉への心配が伺える。

ここで伊周は、**ゴシック**で表記した部分で、「今の世の中では、高貴な帝の娘や太政大臣の娘もみんな宮仕えに出て行く」という内容を述べる。ここでいう「宮仕え」は、貴人の家に使用人として仕えるという意と思われ、内親王や大臣家の女でさえも使用人に身を落とすこと、自分の娘たちもそれに類するものとして考えられること、そしてそれが自分の死後の恥であることを言ったものであろう。

男にまれ、何の宮、かの御方よりとて、こともよう語らひよせては、故殿の何とありしかばかかるぞかしと、心を遣ひしかばなどこそは、世にも言ひ思はめ。母とておはする人、はたこの君達の有様をはかばかしう後見もてなしたまふべきにあらず。などて世にありつるをり、神仏にも、『己があるをり、先にたててたまへ』と、祈り請はざりつらんと思ふが悔しきこと。さりとて尼になしたてまつらんとすれば、人聞きもの狂ほしきものから、あやしの法師の具どもになりたまはんずかし。あはれに悲しきわざかな。まろが死なん後、人笑はれに人の思ふばかりのふるまひ有様掟てたまはば、かならず恨みきこえんとす。ゆめゆめまろがなからん世の面伏、まろを人に言ひ笑はせたまふなよ」

（1：四四八～四四九頁）

その彼の懸念の原因のひとつと思われるが、子供たちの後見人として頼るべき母親（伊周北の方）が当てにならないことを嘆く。それは本人の気質もあるだろうが、血縁的にもあまり当てにならないようである。伊周の北の方は源重光女であり、具平親王の母荘子女王の姪に当たる。しかし重光は長徳四年に他界しており、いとこの関係にあたる具平親王は娘の隆姫が前の年に頼通と結婚しているため、頼るのは難しかろう。こんなことなら自分の目が届くうちに「子供たちを先に死なせてくれ」と神仏に頼めばよかったのだ、と伊周は後悔を語る。そうは言っても、娘を尼にしたところで不安が晴れるわけでもなく、伊周は娘たちに言い聞かせることしかできない。そんな伊周の訓戒に対して、娘たちや北の方も泣くことしかできない。そして次に「松君の少将」すなわち息子道雅に訓戒の対象が移る。

など、泣く泣く申したまへば、大姫君、小姫君、涙を流したまふもおろかなり、ただあきれておはす。北の方も答へたまはん方もなく、ただよよと泣きたまふ。松君の少将などを、「とりわきいみじきものに言ひ思ひしかど、位もかばかりなるを見置きて死ぬる

こと。われに後れていかがせむとする。魂あればさりともとは思へども、いかにせんとすらんな。いでや、世にありわづらひ、官位人よりは短し、人と等しくならんなど思ひて、世にしたがひ、ものおぼえぬ追従をなし、名簿うちしなどせば、世に片時あり廻らせじとす。その定ならば、ただ出家して山林に入りぬべきぞ」など、泣く泣く言ひつづけたまふを、いみじう悲しと思ひまどひたまふ。げにことわりに悲しともおろかなり。

（1：四四九〜四五〇頁）

娘たちに対しては「結婚や宮仕えで恥をかかせないように」という話が主立ったもので、「人聞きもの狂ほしきものから、あやしの法師の具どもになりたまはんずかし」と、尼になったとしても卑しい法師たちのものになってしまい、家名に傷をつける結果になりかねないことを想定していた。一方、息子に対しては、「官位を追い求める余り、他人に追従をするな」という訓戒であり、「出家して隠遁せよ」と具体的に出家を推奨している。

伊周の娘たちの結末

伊周の台詞はここまでで、続けて弟の隆家が弱気になっている伊周を励ます様子や、定子所生の脩子内親王と敦康親王が伯父伊周の容態を心配する様子、伊周の妻子のひととなりの描写がある。そしてついに正月二十九日に死去したとの記事があり、中関白家の話題は一旦途切れている。しかし悲劇はそれだけでは終わらず、同巻の終盤、伊周が懸念していたことが早々に現実となってしまう。

かの帥殿の大姫君にはただ今の大殿の高松殿腹の三位中将通ひきこえたまふとぞいふと、世に聞えたり。あしからぬことなれど、殿の思し掟てしには違ひたり。中将いみじう色めかしうて、よろづの人ただに過ぐしたまはずなどして、御方々の女房にもののたまひ、子をさへ生ませたまひけるに、この御あたりにおはし初めて後は、こよなき御心用ゐなれど、なほをりをりのものの紛れぞ、いと心づきなうおはしける。あはれに心ざしのあるままによろづにあつかひきこえたまへば、仕まつる人もうち泣き、女君も恥づかしきまで思しけり。母北の方、もとより中の君をぞいみじく思ひきこえたまへりければ、よろづにこの御ためにはおろかなるさまに見えたまひける。

（1：四五九頁）

二人の姫君のうち、年長の大姫君の方に、道長の明子腹の息子頼宗が通い始めた。道長家への配慮からか、「あしからぬこと」や「こよなき御心用ゐ」などと肯定的な見方をする一方、「御方々の女房にもののたまひ、子をさへ生ませたまひける」と頼宗の好色性に言及している点や、「伊周が訓戒していたことには背いてしまった」と伊周の立場から見た物言いもされている点にも注目される。また、伊周の目算通りとする意図なのか、「当てにならない」と心配していた母北の方の無策の様についても描写がある。

加えて、大姫君に続いて妹の中の君のその後まで、巻八で完結してしまう。

> 中の君をば中宮よりぞたびたび御消息聞えたまへど、昔の御遺言の片端より破れんいみじさに、ただ今思しもかけざめれど、目やすきほどの御ふるまひならばさやうにやと、心苦しうぞ見えたまひける。あはれなる世の中は、寝るが中の夢に劣らぬさまなり。
>
> （1：四六〇頁）

右の引用からそのまま続いている本文である。妹には中宮彰子からたびたび「手紙」があったという表現がされているが、これが女房出仕の要請であることは、続く「昔の御遺言の片端より破れんいみじさ」という語からも明らかである。「御ふるまひ」を『栄花物語全注釈』と新編全集は「お取り扱い」「お扱い」と、彰子側の待遇のように訳すが、ここは「難のない身の振りであるならば」と中の君本人の挙動と解せる。亡父伊周の遺言の手前、「今のところは考えられない」とは言いつつも、話が進みそうな様子を見せている。とはいえ、伊周の遺言に背いていることには重点が置かれ、世の儚さを思わせる表現がなされている。心苦しと「見えなさっている」主体は、前の部分から続いていると見れば中の君本人ではなく、娘を使用人に落とさねばならなくなった北の方であろう。

また、この部分には富岡本に異同がある。『栄花物語の研究：校異編』（松村博司編／風間書房／一九八五～一九八六）を参考に、反映させると以下のようになる。重要な部分に傍線を付し、仮名遣いなど大意に影響のないものは新編全集の校訂に従い、濁点などは筆者が補った。

> 中の君は、中宮よりぞたびたび御消息聞えたまへど、昔の御遺言の片端より破れんがいみじさに、ただ今思しかけざんめれど、やすきほどの御ふるまひならばさやうにやと、

心苦しうぞ見きこえたまひける。あはれなる世中は、寝るが中の夢に劣らぬさまなるに、

富岡本では「夢のような世の儚さ」の形容から、次の話題（敦道親王薨去）に続いている。こちらの本文では、「気楽な程度の身の振りならばそのように」という条件になり、「北の方が我が子中の君に対して」つらいと感じていることになろう。富岡本の方が梅沢本よりも姫君本人に対しての気遣いがあるように思われる。

二人の姫君はこれ以降『栄花物語』に登場することはほとんどないが、大姫君は次の巻九「いはかげ」で頼宗との子を出産する場面がある。

かくいふほどに、故帥殿の姫君には、高松殿の二位中将住みたまひければ、このごろぞ御子に生みたてまつりたまへれば、いみじううつくしき女君におはすれば、殿は后がねと抱き持ちて、うつくしみたてまつりたまふ。七日がほどの御有様かぎりなく、御方々よりも御とぶらひどもあり。殿の御前はたさらなり、よろづに知りあつかひきこえさせたまふ。あはれ、帥殿のいみじきものにかしづきたまひきを思し出づるにも、これわろき振舞にはあらねど、世にかぎりなき御有様に思し掟てしものをと、まづ思ひ出できこゆる人々多かり。詳しき御事も、世の騒がしき営みなれば、え書きつくさずなりぬ、推しはかるべし。この君生れたまひて後は、内裏、殿などに参りたまふも、暇惜しう思されてなん。

（1：四七九〜四八〇頁）

巻八「はつはな」で頼宗が通って来ていた話の後日談で、二人の間には早くも子が生まれている。ここでも巻八の時と同様に、伊周家側の無念と道長家側の厚遇を混在させる書きぶりで、「悪い身の振りではないが」というように、母北の方が気にしていた「ふるまひ」という観点で大姫君の結末を語っている。

一方の中の君にいたっては、女房の一人として名前が挙がったり、出仕の待遇の参考として言及されたりするのみである。

母北の方、さることなりと思したちて、さるべきことどもせさせたまふに、宰相、「大人十人、童女二人、下仕、さやうにてあへはべりなん。帥殿の御方、大宮に参りたまひし、さやうになん聞きたまへし」と申したまひて、靡ききこえたまふよしの御返り聞え

たまひつ。　（2：一四三頁）

『栄花物語』における姉妹の物語はここであっけなく終わっている。

問題の所在

さて、注目したいのが、冒頭にも述べたゴシック部分である。この「今の世のこととて、いみじき帝の御女や、太政大臣の女といへど、みな宮仕に出で立ちぬめり」という部分は、「高貴な女性が使用人として家に仕える」という世相について言及しているものと思われる。素直に読めば、「最上級のクラスの女性たちでさえ宮仕え（貴族の家庭で使用人として働くこと）に出て行くらしい。道隆の孫であり、伊周の正妻腹の娘である二人は、教養もたしなみもしっかりしているだろう。それを目的に、自分の死後、娘たちを手に入れたがる者が大勢いるだろうし、二人はそれに抗えず使用人に身を落としてしまうに違いない」といった伊周の危惧が伺える。

まず、ここで、出で立ちぬ「めり」と、伊周が「推定」を用いていることに注目したい。小田勝氏は「推定」について、「証拠性をもって成立した認識[3]」と定義している。また、助動詞「めり」については、「視覚によって事態を推定する意を表す」もので、「話し手の主観的な判断に偏ることになる」としている。つまり、個人的、主観的な判断ではあるが、彼の中には何らかの根拠があってこのように言ったと考えられるのである。

ここで一つ疑問が浮かぶ。伊周の発言に彼なりの判断基準があったとして、それは一般的に妥当なもので、伊周の独りよがりで的外れな心配ではなかったのだろうか、ということである。

というのも、『栄花物語』の失脚前の伊周は、その愚行とも言える失政を描かれている。長徳元年（995）、巻四「みはてぬゆめ」で、道隆の死が四月十日と明記された直後に、「人の衣袴の丈、伸べ縮め制せさせたまふ」の記事が挟まれるのはその好例である。それに続く記事は四月二十三日の済時の薨去なので、当然まだ道隆の四十九日すら済んでいない時点に据えられた記事であるが、実際は、この宣旨はこの約三か月後、七月に至ってから出され

[3] 小田勝『実例詳解古典文法総覧』第七章「推定・推量」和泉書院／二〇一五　一一七頁

たものである[4]ので、これは明らかに作為的な挿入である。新編全集は「道長が内覧となってからのこと。この制に伊周が関与したかどうかは不明」（1：二一一頁頭注）とさえ見る。彼の遺言は、これと同様に、伊周の愚かさや疑心暗鬼を示すような『栄花物語』の手法ではないかと疑われるのである。

結論から言えば、先に述べたように伊周次女は彰子の女房になり、『栄花物語』内では他にも「貴女の宮仕え」の例が散見されるので、伊周の読みそのものは全く正しいものとして書かれていることになる。しかし、そうやって「太政大臣の女」の例はあるものの、「帝の女」はどうであろうか。帝の孫なら源道方女（醍醐帝孫／寛子女房）、敦平親王女（三条帝孫／禎子女房）など実例が見つかるが、内親王が人に仕える身分になるというのは『栄花物語』に一例[5]あるものの他資料では確認できず、少々言い過ぎの感がある。

「物語」という性質上、この台詞が史実とは異なる「演出」、つまり伊周が実際に発言したものではないフィクションであることは当然考えられる。しかし、この台詞が実際の発言を伝えていたとしても、または他の誰かによる脚色や創作であったとしても、『栄花物語』での伊周のエピソードを享受する上で、このように「推定」の助動詞でもって書かれた「主観的根拠」、すなわち「みな宮仕に出で立ちぬめり」の具体例を探ることは無駄ではないだろう。有力な「根拠」が実際の史実において発見できる場合は、『栄花物語』の作者、及び読者は、それによる具体的なイメージをもって彼の遺言を受容したはずである。

はたして『栄花物語』の意図はどこにあったのか。実際の寛弘七年時点の女性たちの宮仕え事情はいかなるものであったのだろうか。次節では、伊周が遺言で述べる「宮仕えする貴女」の実際の例が如何なるものか検討する。具体的には、古記録の類から「太政大臣の女」が宮仕えに出た例を探し、『栄花物語』の記述と照らし合わせて、『栄花物語』を読む上での実例として想定できるか否か、考察を進める。

二、宮仕えする太政大臣の女

---

[4] 「長徳元年七月十五日、御衣袖令縫縮給事、…」東京大学史料編纂所編『小右記　十』小記目録下　第十七禁制事　大日本古記録／岩波書店／一九八二

[5] 『栄花物語』巻三十六「根あはせ」で、花山院の乳母子腹の内親王が彰子に宮仕えをしていたことが語られる。

藤原為光とその女

本節では、「太政大臣の女が宮仕えに出る」ことについて、史実の例を確認していく。手順としては、まずこの点について指摘している松村博司氏の先行研究を参照し、指摘されている人物について、古記録の記述、『栄花物語』での描かれ方を参照する。

太政大臣―おほとの大臣〔富〕

（『栄花物語全注釈　二』**校異**）

富岡本は「おほとの」と尊称でいわれるような人や大臣などの意。「おほとの」に太政大臣を含めるならばそれでもよい。

（『栄花物語全注釈　二』　五五九頁**校異考**）

太政大臣為光の女五の君は三条后妍子の女房となるような例がある。

（『栄花物語全注釈　二』　五五九頁**語釈**）

取り上げた部分には異同があるが、松村氏が言うように、「おほとの」は太政大臣のほか大臣クラスの人間を指し、大意に影響なしと考えられるので、今回は詳しく扱わない。そして、松村氏は「太政大臣の女」の例として、藤原為光の五女が道長の娘妍子の女房になる例があることを指摘している。

まずは父である藤原為光について、『公卿補任』の正暦三年[6]の記事では、彼は正暦三年に死去し、諡は恒徳公、法住寺の建立によって法住寺殿とも呼ばれているとある。太政大臣までのぼった人物で、正一位を追贈されている。為光は師輔の九男で、道長たち兄弟から見ると叔父に当たるため、為光女たちと道長は従兄弟ということになる。為光女たちについて、『大鏡』は以下のように記述している。

御男子七人・女君五人おはしき。女二所は、佐理の兵部卿の御妹の腹、いま三所は、一

---

[6] 黒板勝美ほか編『公卿補任』一条天皇　正暦三年（992）　新訂増補國史大系／吉川弘文館／一九七一

条摂政の御女の腹におはします。男公達の御母、皆あかれあかれにおはしましき。女君一所は、花山院の御時の女御、いみじう時におはせしほどに、うせたまひにき。いま一所も、入道中納言の北の方にてうせたまひにき。（中略）まこと、一条摂政殿の御女の腹の女君達、三・四・五の御方。三の御方は、鷹司殿の上とて、尼になりておはします。四の御方は、入道殿の俗におはしましし折の御子うみて、うせたまひにき。五の君は、今の皇太后宮にさぶらはせたまふ。

（『大鏡』為光　二三〇頁）

『大鏡』によると、五人の娘のうち上の二人はそれぞれ花山天皇と入道中納言（藤原義懐）の妻となり、亡くなったという。三、四、五女は同母姉妹であり、三女は鷹司殿（源雅信）の妻になり、後に尼になった。四女は入道殿（藤原道長）の出家前にその子をなしたが亡くなった。五女は皇太后宮、すなわち三条天皇中宮であった妍子に女房として出仕したことが語られている。宮仕えを経験したのは四女と五女であるようだ。

『尊卑分脈』の記述はこれらと照らし合わせると概ね一致しているが、系図に書かれた五人の女子のうち、五番目の女子には「隆家卿室」[7]と傍記がある。一方、「この外女子二人／一人皇后宮女房／一人安木守家平室」との記述が見られるので、『大鏡』が「五の君」とする人物は、この系図外の「一人皇后宮女房」であるのだろう。為光女のうち、隆家や家平の妻になったという人物は、『栄花物語』『大鏡』ともに見えない。

次に、為光女たちを古記録の類で追うと、父為光を失ったのちの姉妹の動向が僅かながら分かる。その流れを〈**表1**〉にまとめた。まず正暦三年（992）の父為光の死から三年後、『日本紀略』長徳元年（995）二月七日ﾟの記事には「今夜。故太政大臣家焼亡」とあり、娘たちの居所と思われる為光邸が火災に遭っていることが分かる。更に『権記』長徳四年（998）十月二十九日ﾟの条に、一条殿は女院詮子の手に渡っていることが分かる。その後、娘たちの動向は二十年ほど不明であるが、長和四年（1015）、四女と五女が道長家の「家子」すな

---

[7] 『尊卑分脈』隆家の子季定は「母恒徳公女」とある。（黒板勝美ほか編『尊卑分脈　第一篇』新訂増補國史大系／吉川弘文館／一九五七）

[8] 黒板勝美ほか編『日本紀略　後編』新編増補國史大系／吉川弘文館／一九七九

[9] 増補史料大成刊行会編『権記　一』増補史料大成／臨川書店／一九六五

わち「道長家に属する妻子及び使用人」となっていることが『小右記』によって分かる。為光女たちが道長家に出仕することは『栄花物語』や『大鏡』でも語られていた。しかし、為光邸焼亡以降の空白のせいで、四女と五女の正確な道長家出仕の開始時期は不明である。

年	月日	できごと	典拠
992（正暦3）	6月16日	為光薨	補
995（長徳元）	2月7日	為光邸焼亡	紀
998（長徳4）	10月29日	詮子、為光邸を入手	権
1001（長保3）	2月10日	詮子、東三条院に遷御	権
1010（寛弘7）	1月29日	伊周死去（遺言？）	権
1015（長和4）	9月20日	為光女、道長家子として叙位	小
1016（長和5）	1月21日	為光女死去（公信同腹）	小
	4月24日	道長、妊娠者により賀茂参詣せず	小
	6月15日	道長、妊娠者により祇園参詣せず	小

表 1　為光女関係年表

（補：公卿補任、紀：日本紀略、権：権記、小：小右記）

そして長和五年（1016）正月二十一日、春宮大夫斉信卿の妹の死亡記事が『小右記』[10]に見られ、更に同日、『御堂関白記』[11]では、物忌のために道長が外出せずに斎食に努めたという旨が記録されている。『小右記』では、参議藤原公信と同腹の妹が懐胎中に亡くなったという旨を述べており、公信の母は伊尹女であるから『大鏡』によれば三、四、五女の同母兄弟である。五女はこれ以降も「五君」という名前が見えるので、これは三女か四女の死亡の記述であろうか。

ちなみに、道長の寵を得たのは四女だけではなかった。長和五年（1016）六月十五日、『小

---

10 「春宮大夫斉信卿妹亡、懐妊未産云々、参議公信同腹」

11 「依物忌無他行、斎食如常」　東京大学史料編纂所編『御堂関白記　下』大日本古記録／岩波書店／一九五四

右記』が「法住寺太相府女懐妊、世号五君」と、同じく道長家に仕えていた五女の懐妊を伝えている。その様は十六箇月に及ぶ異常な妊娠である。恐らくは道長の子であろう。その後、古記録の類では彼女がどうなったのか不明であるが、『栄花物語』では前述の通り、この後も女房として名前だけは登場している。

『栄花物語』における為光女

では、『栄花物語』では、為光女たち——特に四女と五女はどのように書かれているのだろうか。巻四「みはてぬゆめ」で、為光の死去に際して子女に言及された部分では、まず四、五女の容貌について述べられている。

> 女君たち今三所一つ御腹におはするを、三の御方をば寝殿の御方と聞えて、またなうかしづききこえたまふ。四、五の御方々もおはすれど、故女御と寝殿の御方とをのみぞ、いみじきものに思ひきこえたまひける。「女子はただ容貌をおもふなり」とのたまはせけるは、四、五の御方いかにとぞ推しはかられける。
>
> （1：一九〇頁）

三女に比べて、四女と五女は父為光からの愛情はさほど深くなかったようである。その理由を、『栄花物語』は遠回しに容貌のせいであろうと推察している。その後、『栄花物語』には、為光邸である一条殿を相続したのは、とりわけ父の鍾愛を受けていた三女で、それ故に彼女は「寝殿の上」と呼ばれるようになったとある。この三女は、巻四で、藤原伊周が通っていたことが語られている。

> かかるほどに、一条殿をば今は女院こそは知らせたまへ、かの殿の女君たちは鷹司なる所にぞ住みたまふに、内大臣殿忍びつつおはし通ひけり。寝殿の上とは三の君をぞ聞えける、御かたちも心もやむごとなうおはすとて、父大臣いみじうかしづきたてまつりたまひき、女子はかたちをこそといふことにてぞ、かしづききこえたまひける、その寝殿の御方に内大臣殿は通ひたまひけるになんありける。
>
> かかるほどに、花山院この四の君の御もとに御文など奉りたまひ、気色だたせたまひけれど、けしからぬこととて聞き入れたまはざりければ、たびたび御みづからおはしまし

つつ、今めかしうもてなさせたまひけることを、内大臣殿は、よも四の君にはあらじ、この三の君のことならんと推しはかり思いて、…

（1：二二八～二二九頁）

三女は詮子に一条殿を譲り、鷹司殿というところに住んでいた。そこへ伊周は通って来ていたようなのだが、同じころ、四の君には花山院が恋文を送り、誘いをかけていたようである。この後、『栄花物語』の記述は伊周が起こした花山院奉射事件に続く。史実ではまだ一条殿に居たようであるが、『栄花物語』での年次によると、三女はこの時既に鷹司殿に移っていることになっている。まだ結婚に至っていなかったと考えられる四女と五女も、『栄花物語』では同所に身を寄せていたということになっているのであろう。

こうして男たちの争いに巻き込まれた四女は、古記録では長和四年（1015）まで動向が不明であったが、『栄花物語』ではもう少し早い段階で消息が語られる。伊周隆家兄弟の左遷と復帰の騒動も過去のものとなり、彰子の入内、定子の死去を経て、いよいよ道長の天下が目前に迫った頃、物語は巻八「はつはな」に至っている。年次で言うと寛弘六年（1009）の時点に、道長夫妻から四女に出仕のお呼びがかかるという記述がある。

かの花山院の四の御方は、院うせさせたまひにしかば、鷹司殿に渡りたまひにければ、殿聞しめして、かれをもがなとは思しめしけれど、思しもたたぬほどに、殿の上ぞつねに音なひきこえさせたまひけれども、いかなるべいことにか、思し立ちがたかりけり。

（1：四三四頁）

恋人だった花山院が亡くなって頼る相手がいなかったのか、四女は姉が住んでいる鷹司殿へ移った。その噂を聞き、道長は「かれをもがな」と思う。これを松村氏は「情人にしたいものだの意[12]」と見るが、「殿の上」すなわち倫子が彼女の獲得に動いていることが述べられるので、ここは女房としての出仕を要請していると見るべきであろう。この部分について、新編全集は頭注で次のように述べる。

この一節は〔八四〕で同じ内容が繰り返され、そこで、四の御方が道長に寵愛されたこ

[12] 注2　五二五頁

とが記される。ここは、この時点に置かれるべき必然性は乏しく、予告的な記事とみてよいだろう。『栄花』は道長と四の御方の関係を意外に重視している。

（1：四三四頁頭注）

その〔八四〕に当たるのが、次の部分である。こちらは既に寛弘七年に年が替わったことが明言された後に位置しているが、そのすぐ前には具平親王の死亡記事（寛弘六年）が書かれ、年次の錯綜が疑われる部分でもある。このことについて、新編全集は「年季不明の記事や時間が限定されない状況記事を巻末にまとめることが多いためであろう」と分析している。

まこと、花山院かくれさせたまひにしかば、一条殿の四の君は、鷹司殿に渡りたまひにしを、殿の上の御消息たびたびありて、迎へたてまつりたまひて、姫君の御具になしきこえたまひにしかば、殿よろづに思し掟てきこえたまうしほどに、御心ざしいとまめやかに思ひきこえたまふ。家司などもみな定め、まことしうもてなしきこえたまへば、いとあべいさまに、あるべかしうて過ぎさせたまふめれば、院の御時こそ、御はらからたちも知りきこえたまはざりしか、このたびはいとめでたくもてなしきこえたまへりけり。

（1：四五六頁）

この二度目の言及では、四女は既に道長家に出仕してしまっている。また、ここでも「花山院かくれさせたまひにしかば」という語があって、出仕に踏み切った理由を花山院の死に求めている。待遇や兄弟たちの評を述べ、『栄花物語』は道長の所業に肯定的な言葉を並べている。これ以降、『栄花物語』に四女は登場しない。一方、『大鏡』では道長の子を産んだ後に死亡したというように、彼女のその後についても言及があった。『大鏡』の記述は淡々としていたが、道長に対して批判的に見るならば、彼女は道長夫婦によって使用人の身分に堕とされ、手籠めにされて孕まされた挙句死んだということになる。道長との子供が無事に育ったのか否かについて『大鏡』は曖昧だが、『小右記』長和五年正月二十一日の記事が彼女についてのものであれば、死産の上に母体も助からなかったということになろう。

一方、松村氏が「宮仕えする太政大臣の女」として例示していた為光の五女の出仕は、『栄花物語』では、三条天皇の皇女禎子内親王が誕生した折に描かれる。巻は十一「つぼみ花」、

年次は長和二年（1013）である。

月ごろさまざま参り集りたる女房の数など多かるべし。こたみは法住寺の大臣の五の君、やがて五の御方とてさぶらひたまふ。故関白殿の御女、対の御方の腹の君、この帝の麗景殿の尚侍の御はらからなるべし、また正光の大蔵卿の女、源帥の御中の君腹も参りたまへり。それも御匣殿になさせたまへり。

（2：三四頁）

「こたみは」とあることから『栄花物語』は五女の女房出仕はここからであるとする文脈が伺える。『小右記』で「家子」になっていると確認できるのが長和四年（1015）のことであったから、『栄花物語』では、五女はその二年前に出仕したことになっている。『栄花物語』での彼女はこの後、三条天皇の中宮となる道長の次女妍子と、その娘である禎子内親王の周辺で宮仕えをしている。たびたび登場し、続編に入ってからも姿は見えるが、たくさんいる女房の中の一人として名前を挙げられる程度に留まり、彼女が大きくストーリーに関わるような場面は特にない。

このことから、史実ではなく『栄花物語』中に限って言うと、松村氏が「宮仕えをする太政大臣の女」として指摘していた為光五女は、伊周が想定している「太政大臣の女」ではないことが分かる。巻十一の時点での妍子出仕が彼女にとって初めての宮仕えであるように書かれているため、『栄花物語』の中に限って言えば、彼女はまだ読者の念頭に上っていなかったはずである。

『栄花物語』における太政大臣の女

ここまで松村氏によって指摘された為光女たちの出仕について諸記録や『栄花物語』での記述を確認してきたが、為光女の他に仕え人となった「太政大臣の女」には、宮の宣旨（兼

家女？）[13]、御匣殿（道隆女）[14]、二条殿の御方（道兼女）[15]などがいる。前者二名はほぼ名前だけだが、道兼女は一つの物語のように詳細に記される。しかし、いずれも『栄花物語』内での女房出仕は寛弘七年より後とされている。

阿部秋生氏はこうした『栄花物語』の女房事情について、事例やその前後にある作者の意見を参照し、まとめている。以下そのうちの関係深いと思われる一部を抜粋する。

一　道長時代以前にも全くなかつたわけではないが、道長時代以後には、上達部・大臣の子女の出仕する者が非常に多くなつた。

二　（中略）

三　（中略）

四　（中略）

五　かうした現象が起るのは、いはゆる受領・諸大夫の子女の出仕希望者が減少したわけではない。むしろ増加の一途を辿つてゐたわけで、出仕したいと望む者の一半をしか採用しなくなつている。しかも、それとは別に、上達部の息女の出仕を、半ば強制的に督促してゐる。

六　関白・大臣の子女の如きは、公的関係においては、為光の五の君・伊周女周子の場合に明らかなやうに、一般女房と何の相違もなかつた。

七　⑭の「二条殿の御方」の例によると、道長の北の方倫子が、道兼の姫君引き出しに一役買つてゐる。帥源中納言の姫君の場合には道長がかなり強硬な発言をしてゐる。この姫君達引き出しの一連の動きは、気まぐれなものではないし、その中心人物には、道長・倫子・頼通を考へて然るべきであらう。[16]

---

[13] 巻三「さまざまのよろこび」に「殿の御女と名のりたまふ人ありけり。殿の御心地にも、さもやと思しける人、参りたまひて、宮の宣旨になりたまひぬ」（1：一四〇頁）とある。

[14] 巻十一「つぼみ花」で、禎子内親王の女房たちの中に「故関白殿の御女」（2：三四頁）とあった人物。為光五女の同僚。

[15] 巻十四「あさみどり」で、「なにかと思すべきにあらず、つれづれの慰めに語らひきこえさせん」（2：一四二頁）と倫子から声が掛かる。

[16] 阿部秋生『源氏物語研究序説』第一篇第二章「作者の環境」　東京大学出版会／一九五九　四五二～四五三頁

これによると、『栄花物語』は、上達部の子女を女房に招聘することを道長家の施策だと見ていることが伺える。道長「家」の施策としたのは、姫君たちを召致した人物は道長一人ではなく、倫子や彰子など道長家の様々な人物に設定されているからである。

こうした出仕要請を『栄花物語』は肯定的に見ていたのだろうか、否定的に見ていたのだろうか。伊周次女の出仕場面を見るだけでも、大臣家の姫君が出仕の要請に応ずるなどということを、本人や家族が喜んでいたとはとても言い難い。しかしその一方、為光四女の出仕場面では、父に代わって後見を務めていたであろう男兄弟たちの好意的な反応を描いたり、「御方」と呼ばれる特別待遇を強調したり、ネガティブになりすぎないような配慮も見え、判断は容易ではない。慎重な考察が必要となろう。

さて、ここまで「宮仕えする太政大臣の女」の例を探し、それぞれの『栄花物語』での記述を追ってきたが、伊周の遺言の時点で「宮仕え」を連想できる人物は、強いていうなら為光四女ということになる。しかしここで問題となるのが、伊周の遺言が具体的な人物として為光四女を想起させている積極的な根拠があるのか、ということである。内親王や太政大臣の娘などというのは単に例えであって、特別に思い浮かべてほしい具体的な人物を設定していないということも、もちろん考え得ることである。

次節では、為光四女に殊更に注目させられるような仕掛けがあるのかどうかに加えて、当初の問題であった「具体的な人物を想起させること」と、それを踏まえた伊周の遺言の効果について考察する。

三、『栄花物語』の意図

為光四女に注目させる構成

前節では、『栄花物語』での伊周の遺言にある「太政大臣の女」は、藤原為光の四女が想定されているのではないかと述べた。本節では、『栄花物語』の構成面からこの点について考察する。また、残っている疑問点として、四女の出仕について少し離れた位置に二度言及があったことが挙げられる。その記述の内容や、二度言及している理由ついても改めて考察していく。

この為光四女についての二度の記述や、伊周の遺言の位置関係を把握するため、巻八の巻

末周辺の章立てを、新編全集から引用した〈**図1**〉。伊周をはじめ、中関白家に関わる人々の記事は**ゴシック**で表記し、為光四女の記事には傍線を付した。

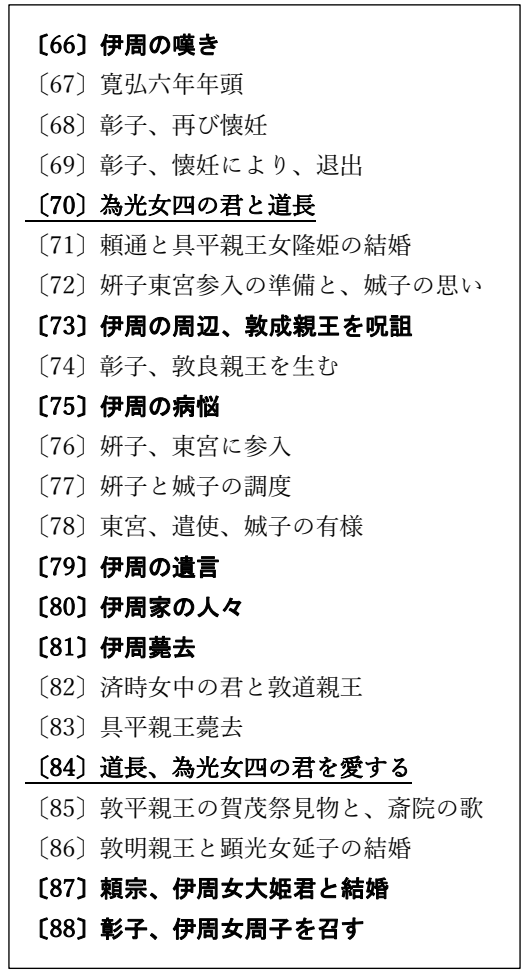


図1　伊周の遺言場面前後の章立て
（新編全集による）

巻八「はつはな」はその名の通り、道長の後宮政策の結実、すなわち彰子所生の皇子誕生が話題の中心となる。後半はそれに加えて妹の妍子の東宮入内も加わる。そうした道長家について書かれたメインストーリー部分を削ぎ落していくと、伊周の遺言場面と薨去の場面の前後に為光四女の話が配置されていることが分かる。「予告」と言われていた為光四女の出仕譚は、伊周の遺言と死をはさんで、後にその結果が語られており、伊周の遺言にあった「太政大臣の女」としてまさしく一致する人物が、遺言の前後に配置されているのである。伊周の遺言は当然その子女に向けてのものであったが、この構成を踏まえると、為光四女がこの遺言に無関係であるとは到底思えない。

ここで、第一節で問題として取り上げた「読者に具体的な人物を想起させること」について考えてみたい。為光本人はもちろん太政大臣を歴任した貴族だが、その子女たちはというと、女子は前述の通り花山天皇女御の怟子が早逝し、男子も四納言に数えられた斉信以外は振るわない。その斉信の隆盛も、言うなれば道長の傘下に入った結果のものである。つまり為光家は、伊周家と全く同じ運命をたどっていると言って良いだろう。伊周家は後宮政策の中心だった定子とその妹である道隆四女（御匣殿）を続けて亡くし、伊周の死後、二人の娘

は道長家に妻と女房という形で吸い取られてしまった。息子道雅もまだ幼く、唯一希望が残されているのは弟の隆家だが、彼は道長に取り入ることで没落を免れたのである。為光家も同様で、残された娘たちは道長家の妾や女房となった。斉信も隆家と同じ選択をしたのである。

伊周の遺言の前後では、そうした為光家の中でも四女に注目する構成になっているが、これは彼女が早くに伊周の懸念する「使用人に身を落とすこと」と「結婚で失敗すること」の両方を経験してしまったためと思われる。妹の五女もゆくゆくは同じ境遇になるが、伊周が遺言する時期に持ち出すには早すぎたのであろう。為光四女は一人でその両方の境遇を得てしまった上に、前節の考察の通りならば、父の政敵であった道長の子を孕んだまま亡くなっていることになる。『栄花物語』がその死を描かないのは、道長の名誉に配慮してのことであったか、それともその死亡時期と思われる長和五年正月に三条天皇が譲位し、いよいよ「はつはな」たる後一条天皇の御代が始まろうとしていた時勢に泥を塗らないよう配慮したものか、あるいはその両方だったろうか。

いずれにせよ、伊周の遺言にある「太政大臣の女」は為光四女を想定していると考えられる。そして読者には、そのすぐ後に、伊周が心配していた自身の娘たちが為光四女と同じ境遇に身を落としたという結末が提示されるのである。

「まこと」で始まる二回目

さて、次に問題となるのは、『栄花物語』は何故わざわざ二回「為光四女の宮仕え」について述べたのかということであるが、それに先立って注目したいのは、二回目の言及が「まこと」という言葉で始まる点である。これについて、松村博司氏は二度目の語り始めの「まこと」を「忘れていたことを思い出して書く場合に用いる[17]」と述べているが、『栄花物語』が影響を受けているとされる『源氏物語』でも、これに類する「まことや」という語り始めの手法が用いられている。

小林美和子氏[18]は、『源氏物語』での「まことや」の用法について「当時日常的に消息文や

---

17 注2　五七三頁

18 小林美和子「複線型叙述の物語構造に於る効果」「国語と国文学」五二‐一二／一九七五

会話に使われていた形をそのまま模写して、物語や日記の世界へ持ち込んだ文型と、理解される」と分析し、「複線型に分析された叙述部分の流れを整理しながら、主流・傍流の位置関係をも、明確化する機能を果たしている」と述べる。つまり、「まことや」で叙述された部分は、一旦間を置いた事柄を再び取り上げたり、漏れた事柄を拾ったり、後日談だったりといったニュアンスの記述であり、想起される人物は物語の傍流に位置付けられる人物であるということである。

小林氏の論は『源氏物語』の用法についてのものだが、『栄花物語』ではどうだろうか。新編全集の本文によれば、話題の転換や付け足しなどの語り始めで用いられている「まこと」及び「まことや」は、管見の限り正編で一二例、続編で一三例見られる。この割合の差から、正続では何らかの事情で文体が変わっていることが伺えるため、今回は正編のみに注目する。正編の一二例で「まこと」「まことや」で想起される側の人物を列挙すると、祐姫（藤原元方女）、藤原公季、恭子斎宮、選子大斎院、藤原有国、為光四女、藤原実方、弁の乳母の姪、藤原公信室、殿の宣旨の女、藤原師房室、藤原長家である。最後の長家以外には道長の家族はいない。その長家も道長の息子ではあるものの、明子腹であり、やはり彼らは物語の中心になるような人物ではない。『源氏物語』では「まことや」で語られる人物は物語の傍流に位置するという小林氏の論は『栄花物語』にも適用できるだろう。そのうちの一人として、「まこと」で語り出される為光四女も「傍流」にあたる人物であると考えられるのである。

巻八は道長・伊周の両家が交互に話題に上り、その明暗が描き出されるという構成[19]になっていることは前述の通りであるが、為光や済時、顕光といった他の有力貴族の娘たちも時折話題に上る。特に妍子の東宮居貞親王参入に関わる場面では、十年以上連れ添って多くの子を成している済時女娍子がたびたび言及されるのだが、巻八全体を見渡したとき、やはり伊周家に比べると注目度は低い。しかし、巻五「浦々の別」で伊周・隆家兄弟の左遷が物語の中心だったころに比べると、徐々にその注目度の差は埋まってきている。確実に中関白家への注目度は下がっていると言わざるを得ないだろう。

また、吉海直人氏[20]は前掲の小林氏の研究を受けて「まことや」と六条御息所に注目し、

---

19 注2　五八七～五九一頁

20 吉海直人「六条御息所と「「まことや」」　中古文学研究会編『源氏物語の人物と構造』笠間書院／一九八二

「夕顔」の巻では夕顔が「まことや」で想起される傍流の女性であるのに対して、「六条のわたり」が主流の女性として想定できることを述べている。また吉海氏は、そのように「夕顔」の巻では主流として位置づけられる六条御息所だが、「葵」の巻では今度は立場が変わり、「まことや、かの」が使われる側になることも指摘している。

これに対して、巻八「はつはな」にもこの本流傍流の関係があると考えた場合、「本流」に相当するのは誰であろうか。『栄花物語』の中心が道長の栄華であると考えるならば、巻八での主役は当然道長と、巻名の「はつはな」である皇子を生んだ彰子であろう。だが、その陰にはやはり明暗として対になる中関白家の存在があり、伊周やその眷属を無視することはできない。思えば、『源氏物語』でも主流と見なせる人物は一人ではなかった。「夕顔」の巻では、若紫はまだ物語に登場しておらず、藤壺にも特段言及がなかったので、傍流の夕顔と主流の「六条のわたり」のほぼ一対一だったが、「葵」の巻に至ると、主流と見なせる人物は、後世に巻名を冠されることになる葵の上だけではない。若紫は巻末にならないと新枕を交わさないので「女君」とは呼ばれないが、同巻の端々で溺愛されている様が描かれる。もちろん巻末になれば立派な「主流」の人物の仲間入りをしているが、それ以前から彼女は主流の人物と見なせるだろう。この二人は直接対峙することはないが、「紅葉賀」の巻では源氏が若紫を迎え入れたとの噂を聞いて葵の上が思い悩む様が描かれるように、当初から潜在的に光源氏をめぐってその愛情を争う関係にあった。

このように、本来、本流の人物たちには本流同士の人間関係があって、そもそも傍流など相手にならない。だからこそ傍流なのである。『栄花物語』でも、傍流に位置する為光親子は、本流の人間関係を構成している道長親子や伊周親子と比べられることなど、本来はなかったはずである。しかし伊周が亡くなり、その娘たちも伊周の遺言の通りに身を落とすことになった。そして、大姫君の結末は「かの」で語り出されている。それは「まこと」で想起されるような傍流の人物と全く同じ立場である。そのことをはっきりと意識させるのが為光四女の二度目の言及なのではないだろうか。

二度目の言及がもたらすもの

これまで、為光四女が二度話題に上る理由は、新編全集で「予告的」と表現されるように一種の伏線回収のように見られていたが、逆に「この話題を出したいタイミングが二度あった」と考えてみるとどうだろう。

一度目の言及は、伊周が遺言で述べる懸念が実際に起こり得ることの具体例を先んじて述べたものであるだろう。これはつまり、伊周の懸念は誇大妄想ではなく実際に起こることなのだという例が先に示されていることになる。そして伊周の遺言後に、二度目の言及で改めて為光四女の正式な出仕が書かれることによって、伊周の読みは間違っていなかったことが示される。更に、為光四女の出仕にさほど間を置かずに伊周女たちの顛末が語られることにより、ただ「伊周女が没落した」という事実だけではなく、傍流の人物として語り出された為光四女と同じ境遇になったことを読者に印象付けるのである。

おわりに

本章では、伊周の遺言の内容の一節に注目し、その前後文脈から、「宮仕えをする太政大臣の女」の具体的な人物像として為光四女を読者に想定させる構造があったこと、また、物語の「傍流」の人物を想起させる「まこと」という語によって、為光四女は『栄花物語』の文脈の中で「傍流」に位置する人物に設定されていることを述べた。そして、後に続く伊周女たちの顛末と絡み合い、伊周女たちは遺言を破ったというだけでなく、為光四女と同じ境遇になった、つまり物語の中心からの退場を印象づけるものだったのではないかと考察した。巻八「はつはな」は一条天皇が譲位を考える場面で終わり、次の巻九「いはかげ」は天皇の病と譲位で始まっている。この二巻の境目は、物語の大きな節目となっている。その節目の一つとして、伊周の遺言は、彼自身の物語からの退場だけでなく、その子供たちや家全体、更には、同じ境遇にあるその他の家々の様相に読者の目を誘導している。

『栄花物語』での伊周は、家督を継ぐ契機となった道隆の死の前後では、政策の迷走など未熟な様子が強調されていた。その一方で、本人の死の直前に至ると、自分の運命を嘆きながらも、残していく家族の今後を的確に予想して訓戒を残す姿が描かれる。当然ながら後の祭りであるし、物語において、そうした訓戒は破られるためにあると言っても良い。しかし、その遺言は、『栄花物語』が伊周をただの「愚かな人物」としてではなく、敗者としての悲哀を込めて描こうとした姿勢が表れている。そして伊周の遺言は、その死後、中関白家の子供たちを物語の中心から退場させ、「その他大勢」となった事実を描き出しているのである。

この遺言は『栄花物語』にしか見ることができない。これが物語を劇的にするための『栄花物語』による創作であるとするならば、「はつはな」を手にした道長の栄花に対し、敗者たちに注目させる構造を敢えて作ったとは言えないだろうか。一方で、事実は小説より奇な

りで伊周が実際に言ったものであったという可能性もある。そうであるならば、如何なる方法で伝わり、『栄花物語』に組み込まれたものか。残る疑問は多々あるが、それは次章に譲ることとする。

第四章　巻八「はつはな」における伊周の遺言

：父親たちの遺言

はじめに

『栄花物語』には、臨場感に溢れた、実際に見てきたような描写がたびたび現れる。死を目前にして、藤原伊周が遺言めいたものを語る場面もその一つである。父道隆の死後、長徳二年（996）に大宰権帥に堕とされた後、長保三年（1001）には本位の正三位に復位しているが、病が重くなり、寛弘七年（1010）に死去する。この死去の直前場面で、伊周の長い台詞の体裁をとって書かれている部分は、彼の遺言として見られている。子女を遺して逝くことへの心配、死後に自分の名誉が傷つけられることへの危惧、昨今の没落貴族の事情など、内容が非常に生々しい。

これは「物語」としてはまま起こり得る場面であろう。前章では、伊周の遺言とその周辺の構成に注目し、父を亡くした高貴な姫たちが物語から退場していく様子を文学的に描き出しているのではないかと考察した。

一方、視点を変えて、「史実」としてはどうであろうか。没落を待つばかりの伊周一家に、このような哀れな父の遺言ともいうべき訓戒があったと言われれば、確かにそういうこともあるだろうと思えるが、ごく近しい家族に限って語られたはずの遺言を描いているこの場面は、どういった制作過程を経ているのだろうか。

倉本一宏氏は「本当にこんなことを言ったとはとても考えられないが（伊周の遺言を、誰がどうやって聞き、それを誰がどうやって原史料に作り、それを誰がどうやって作者にまで伝えたというのであろう）」[1]と一笑に付しているが、一般的に考えて、「歴史物語」の執筆に際し、作者が何らかの資料を用いることは当然想定できることである。『栄花物語』においても同巻に『紫式部日記』がほぼそのままの形で引用されている部分があることが知られ

---

[1] 倉本一宏『藤原伊周・隆家――禍福は糾える縄の如し――』第六章「呪詛事件と伊周の死」ミネルヴァ書房／二〇一七　一七五頁

ている。また、当該場面の、いわゆる地の文の特徴としては、傍線部「今日や今日やと見えさせたまふ」（1：四四八頁）のようなその場に居合わせたかのような写実性や、「いといとほしげなり」（1：四四八頁）のような時折差し挟まれる主観性が入り交じる文体で書かれていることが挙げられる。とすれば、伊周の遺言も同様に、遺言の場にいた中関白家周辺の女房のような、名もなき女房の日記だとか証言だとかを引用、または一部参考にして作られたのではあるまいかと想像をたくましくしたくなる。しかし、そうした資料は残念ながら現存していない。

証明できない以上、現存しないものをいくら考えたところで机上の空論であるという意見は至極もっともなのだが、もう少しこの素材と成立の問題について考えてみたい。引用元になるような資料がなかった場合を考えてみると、次なる可能性として、『栄花物語』作者による大胆な脚色によってこの場面が創作されたのでは、という仮定が浮上してくる。その場合、次に考えるべきは、ではその脚色は如何なる意図のもとになされたのかという点であろう。そこで注目したいのが今井源衛氏の次の指摘である。今井氏は『源氏物語』と晩年の伊周について、次のように述べている。

> しかし、その翌年正月の末に伊周逝去の報がその臨終のあわれな遺言とともに世間に伝わったとき、式部の脳裏にはにわかに新しい創作への欲求がはげしく動き出していたのではあるまいか。
>
> 二月に入ると、式部は再び筆を執り一心にかき始めた。巻頭の重要人物八宮とその二人の娘には伊周晩年のおもかげが宿った。[2]

式部の耳に入ったであろう実際の伊周の最期と『源氏物語』での八宮親子の描かれ方には影響関係があるのではないかというのである。しかし『栄花物語』における伊周の表現との関係性については言及がない。『栄花物語』には『源氏物語』の影響を受けていると見られる箇所[3]が多数あるが、その『源氏物語』は史実の人物をモデルにしている可能性がある。こ

---

[2] 今井源衛『紫式部』第九章「『源氏物語』の展開と『紫式部日記』」人物叢書（新装版）／吉川弘文館／一九八五　二〇五～二〇六頁

[3] 巻五「浦々の別」で伊周が亡父道隆の墓前に参る場面があるが、『栄花物語』以外にはそうした記録はなく、須磨流離前の光源氏が故桐壺院の墓前に参ること参考にしたと見られる。（参考：山中裕『歴史物語成立序説』東京大学出版会／一九六二）

の複雑な関係性が『栄花物語』での伊周の遺言を考える上でヒントになるのではないかと思えるのである。

そこで、本章では、伊周の遺言場面における他資料利用の可能性について確認した上で、今井氏の述べる宇治の八宮と伊周との関係性が見出せるかどうかを検証する。その上で、『栄花物語』による潤色の可能性と、如何なる意図でもってその潤色がなされているかを考察する。

一、他資料利用の先行研究

先に述べた通り、『栄花物語』には『紫式部日記』を利用した部分がある。まずはそうした他資料利用が他にも想定し得るかどうか、伊周の遺言場面もこれと同様に女房日記などの他資料を利用しているのか、といった可能性について考えてみたいが、現存資料がない限り仮定の域を脱し得ず、またそうであると断定することも困難であろう。しかし、現状確認できる『紫式部日記』利用部分に見られる特徴や、今回取り上げる遺言の場面にその特徴は如何ほど見られるのかについて、先行研究を参考に整理しておきたい。

内容について

巻八「はつはな」で、一条天皇の皇子敦成親王が誕生した折の一節は、『紫式部日記』を用いて執筆されたことが古くから指摘されている。この場合は『栄花物語』『紫式部日記』両者に明確に共通している本文があることから、素材として用いられたことが明らかになった。それを足掛かりに、日記を利用した部分の文体や内容について、多くの研究がなされている。まずはこの『紫式部日記』の例に見られるような、未発見の他資料からの引用、利用が想定できるのかどうか、松村博司氏の研究を参照する。

> 式部日記以外においてもこの物語は女房日記の如きを取り入れている所は多いと思われる。この場合そうした日記の利用法は大体式部日記の場合と同じであったと考えてよいであろう。式部日記の場合は幸いにして日記が現存するから、物語と日記の両者を比較対照して区別を明瞭にし得るのであるが、典拠となった女房日記の現存しない場合にあっては、漠然とこれを推定する他はない。そして女房日記的な部分はすべて既

成の文であるのか、それとも作者自身もその種の文を書き得たのであり、作者の文と既存の成文とが混在しているのであるか、（たとえば後述の皇太后妍子に関する部分の如き）かなり問題はあると思うのであるが、何れにせよ資料として用いられたものの範囲を定めることには相当の困難がある。[4]

松村氏も他の日記的な素材の存在を想定しており、それら資料と『栄花物語』作者による文章が混在することについても言及があるが、やはり現存の『栄花物語』本文からではその実情を判ずるのは困難であると述べている。

また、松村氏による『栄花物語全注釈』では、巻八の『紫式部日記』を利用している部分の特徴について、『栄花物語』作者は積極的に『紫式部日記』を用いて執筆しようとしたのではないかという見解が示されている。

本巻の約三分の一の量を占める誕生記というのは、全体との均衡を失しているとも見られるが、そのような結果になったことはたまたま『紫式部日記』が存在したからともいいうるが、道長の栄華を伝えようとする作者の立場からいえば、『紫式部日記』があったからそれをただ利用したというだけではなく、積極的にこれを用いて委細を書き残そうとしたものであろうし、そうすることがまた、村上天皇以降三条天皇にいたるまでどの天皇の場合にも見られない詳細な帝王の誕生記になったのであり、道長の栄華の頌としての目的を十二分に果たすことができたというべきであろう。[5]

これに従うと、『紫式部日記』があったからこそ、敦成親王の誕生記が長大な巻八の三分の一という長さに至るまでの詳細さでもって書かれたことになる。更に穿った見方をすれば、仮に『紫式部日記』が存在しなかった、または『栄花物語』作者が日記を手に入れられなかった場合、敦成親王の誕生記はもっと簡略になっていた可能性があるのか、という疑問がわいてくる。この疑問の消化に有用なのが、白井たつ子氏の論考である。白井氏は『栄花物語』の敦成誕生時の描写が詳細である一方、年子で生まれた敦良親王の誕生場面が簡略で

---

[4] 松村博司『栄花物語の研究』第二篇第四章「正篇の典拠」刀江書院／一九五六　二八四～二八五頁

[5] 松村博司『栄花物語全注釈　二』角川書店／一九七一　五八九～五九〇頁

ある点に注目して、次のように述べる。

> 『栄花物語』における敦良親王誕生の記事の叙述のしかたを具にみると、（中略）等々といった、先の敦成親王誕生の際の記述を意識においての言辞が目立つ。つまり、前の記述によりかかっての、省筆が行われているのである。これは、重複を避けるための構成上、措辞上の配慮がなされたことを意味するとともに、『栄花物語』の作者が、敦良親王誕生に関する良い資料を手にしていなかったという事情をも反映していることではなかろうか。[6]

白井氏は、『栄花物語』作者は後に日記として纏められることになる「紫式部による手記」を断片的に得ていたのではないかとしている。その中には敦成親王の誕生記に比べ、詳細な敦良親王の誕生記が含まれなかったため、同程度の重要トピックであったにも関わらず、詳細さの点で『栄花物語』での記述に差が生じていると見ているのである。

両氏の論によれば、『栄花物語』において詳細に叙述されている箇所は、相応の参考資料があったからこそ詳細に書くことが可能になったのであり、それは同時に、参考資料の存在の有無によって自ずと記事にする内容が定まらざるを得ないということになる。

では同様に、伊周の台詞や家族の反応を詳細に伝える当該場面は、執筆に際して有用な資料に恵まれた部分だと推定できるのだろうか。中関白家の内部事情を詳細に描いたエピソードは他にもある。例えば巻五「浦々の別」では、九州配流の宣旨が下された伊周が亡父道隆の墓に参る様子や、伊周不在の二条第を荒々しく捜索する検非違使の様子、その後の配流から召還に至るまで、この一連の伊周・隆家配流事件が事細かに描写され、巻五は中関白家が話題の中心だとさえ思える。「詳細さ」「資料がなければ書けない」「中関白家に関する記述が多くある」という点に注目すれば、これらは『紫式部日記』利用部分と同様に、「中関白家に仕えていた女房の誰か」によるような、まとまった他資料の記述を利用している可能性を考えたくなる。

しかし、『栄花物語』はもう一つの「参考資料」、すなわち『源氏物語』から多大な影響を受けていることが指摘されているのは周知のことであろう。例えば、下向前に父の墓に詣で、

---

[6] 白井たつ子「『紫式部日記』と『栄花物語』「はつはな」との比較の問題」　日本文学研究資料叢書『歴史物語1』有精堂出版／一九七一　＊初出「文芸研究」五三／一九六六

自らの悲嘆と潔白を訴える伊周は須磨下向前の光源氏に重なる[7]。また、伊周と隆家が召還された理由を『栄花物語』が「今宮の御事のいといたはしければ、いとやむごとなく思さる」（1：二八五頁）としていることは、源氏の帰京が東宮の後見のためとされたことを模していると考えられる。加えて、伊周の姿を「かの光源氏もかくやありけむと見たてまつる」（1：二四八頁）と例えていることからも、『源氏物語』を意識していることは間違いない。しかしながら、この一連の描写は、女房日記など、長徳二年当時にその様子を見ていた人物による資料からの引用とは考えにくい。なぜならば、仮にそんな人物と作品が存在したとしても、伊周の配流を直に見たであろうその時には、まだ当の『源氏物語』がこの世に生まれていないからである。

したがって、これらの「源氏オマージュ」が仮に『栄花物語』作者によるものではなく散佚した他資料によるものだったとしても、『栄花物語』が『源氏物語』成立後に書かれた何らかの資料を採用していることになる。加えて、『栄花物語』内に見られる「源氏オマージュ」は一つや二つではない。年次の離れた巻々に散らばり[8]、オマージュの対象となる人物や事象も様々であるから、もし「源氏オマージュ」が施された日記などを引用しているとしても、複数の異なる資料が『源氏物語』を意識する書き方をしていることになるのである。それは現実的とは言い難く、史実を脚色した他資料からの引用ではなく『栄花物語』によって主導された演出であると考えた方が自然であろう。

こうしたことを考慮すると、記述が具体的かつ詳細であるからといって、安易に他資料の存在を想定するのは早計である。

文体について

次に、他資料利用部分の文体について見ていく。用いられている表現や、本文から伺える語り手の造型などについて、こちらも先行研究を参照しておく。

まず、白井たつ子氏は前掲の論考にて、『紫式部日記』受容部分の記述の特徴についても見解を述べている。

---

[7] 注3参照。

[8] 山中裕『歴史物語成立序説』第二章第五節「栄花物語における源氏物語の影響」東京大学出版会／一九六二　＊初出「国語と国文学」三〇・七／一九五三

『栄花物語』の作者は、大方において、日記の中から、私的な感慨の表白が行われているところを、切り捨てようとしたには相違ないが、外的事象と、自己の内面の問題とを、しかと絡み合わせて叙述している『紫式部日記』が、優れた主体性を持って叙述されていれば、それだけ、これを利用する側の困難は大きかったはずである。『栄花物語』の作者が、日記の中に纏綿する紫式部の私的感懐を抜き去り、客観的事象についての記述だけをわがものにしようと試みて、失敗したとしても、それはあながち、力量不足のせいばかりではなかろう。[9]

白井氏によると、『紫式部日記』受容部分では、紫式部の私的な感情表現は除いて記述される傾向にある――それに失敗することもあるのだが――という。当該場面が仮に日記類から引用されているとしても、白井氏の述べる通り、そもそも『栄花物語』作者が他資料を得た段階で断片的であるなど、様々な理由により、引用部分と作者による創作とが混在していることも考えられる。そうした原資料の記述を加工して取り込むことを、山下太郎氏は「語り換え」と呼び、更なる可能性について、次のように述べる。

> おそらく語り換えの適用は、『日記』と『初花』との間に限らないであろう。現在は確認のできない、多彩な『栄花物語』の原資料も周到な語り換えののちに、『栄花物語』の叙述展開のなかに位置付けられたのである。[10]

しかし、このように『栄花物語』の原資料ともいうべき類があったとしても、特別な人称や個人的な感慨など、その作者の存在が伺える部分は『栄花物語』に吸収される際に削除されていると思われるので、やはり文体の面からも、他資料からの引用であると確証を得ることは困難であるだろう。

『紫式部日記』の利用部分に関しては右の通りだが、そもそも『栄花物語』全体を通しての語り手像とは如何なるものなのか。加藤静子氏が以下のように述べている。

---

[9] 注6に同じ。

[10] 山下太郎「『栄花物語・初花』の〈語り手女房〉：語り換えの方法」　高橋亨、辻和良編『栄花物語　歴史からの奪還』森話社／二〇一八

『栄花物語』という作品が、道長・倫子に対して過剰と言ってよい呼称を用いているのは、『赤染衛門集』『伊勢大輔集』『弁乳母集』のような、宮仕え女房が主人に待遇するのと同じ発想であるからなのだろう。それは、身分の差異を示す目的からではなく、道長・倫子を主人格とするところに作者が属しているから、としか言いようがあるまい。[11]

加藤氏は用いられている呼称を詳細に分析し、『栄花物語』の作者が道長や倫子を主人として特別視していることを述べている。「作者が」としているが、道長や倫子への呼称を用いているのは「語り手」と呼ばれる部分も含むのだから、これは語り手像にも通じてくるだろう。しかし作品全体を通してこの語り手像を当てはめて良いかというと、そうではあるまい。例えばこの伊周の遺言場面のように「他家（ここでは伊周家）」の内部事情を間近に見ている場面などでは、「主家（道長家）」の色を出し過ぎていると、知り得ないことを知っている体になって不自然だからである。

同じく『栄花物語』の「言語主体」に注目したものに、渡瀬茂氏の論がある。渡瀬氏は日記的な文体の分析を踏まえ、『栄花物語』全体の文体的特徴を論じている。

ところが、栄花物語の場合には日記のような言語主体の具体的な形象は与えられない。叙述の基調の客観的な表現には言語主体を読み取る契機は欠けているが、そこに挟み込まれる主観的・主体的な表現は背後に言語主体を読み取らせる契機となる。しかもこの作品は言語主体が明確な人物像となることを避ける。この点がこの作品の文体の日記と決定的に異なったところである。しかもあふれるほどの主観的・主体的な表現を使いながら、日記のように具体的な言語主体の像を与えないため、個々の表現はその帰属する焦点を欠く。そのためにこの作品の文体は動的な緊張を欠いて平板なものとなり、「主情的」なものととらえられるのである。

しかしこのような文体は、この作品が歴史叙述としての客観性の装いを保ちながら、

---

[11] 加藤静子「『栄花物語』における藤原道長をめぐる呼称」『王朝歴史物語の生成と方法』風間書房／二〇〇三　＊初出　「都留文科大学研究紀要」五〇／一九九九

しかもその真実性を保証してゆくためには必然のものであった。[12]

渡瀬氏によると、『栄花物語』では歴史叙述の真実性を保証するために主観的な表現が多用される一方、言語主体、つまり「語り手」の具体的人物像はつくらない[13]のだという。加藤氏の説と合わせると、「道長家に仕えている多数の女房のうちの誰か」という程度の抽象的な語り手像となろうか。渡瀬氏は、こうした主観的表現を物語作品に持ち込んだのは『落窪物語』であって、『源氏物語』がそれを更に徹底させたのだと続けている。

また、渡瀬氏は同論で、そこでは推量や疑問に加え、主観的な発話態度が伺える「めり」「べし」「けり」といった助動詞を効果的に用いていると述べる。

> さらに述べたようにこの作品ではたとえば推量表現も多く使われるが、それだけではなく、疑問表現やいわゆる「草子地」など、背後に言語主体を読み取らせる表現は少なくない。しかも濫用に陥らず、効果的に使うところにこの作品の芸術性の高さの一つの所以があるのだろうが、それは客観に徹した表現と主観性の表現との矛盾を文章表現の緊張感へと高めたことによっているのだ。そこでは、たとえば助動詞「めり」「べし」や「けり」等々は動詞の終止形と対置されて叙述に様々な彩りを与え、個々の表現は叙述全体のなかで機能している。

一方、こうした「めり」や「べし」といった推量の表現について、三谷邦明氏は巻一「月の宴」の巻末で「永平親王の発話に宰相済時が〈ひどく困ったなあ〉と思った様子」を例に挙げ、次のように述べる。

> 他者にたいして推量することで、あたかもそれを見聞した語り手が実在するように読者に語り、宰相の心中思惟を事実化しようとしているのである。つまり、「めり」「べし」などの推量表現を物語中に散在させることで、枠組みの虚構性を極力避けて、歴史的事

---

[12] 渡瀬茂『栄花物語新攷：思想・時間・機構』第五章第一節「日記文学の文体と栄花物語」和泉書院／二〇一六　＊初出　歴史物語講座『栄花物語』風間書房／一九九七

[13] 渡瀬氏は、語り手に具体的な人物像を作った例が『大鏡』であるとの見解を同論稿で述べている。

実であるという姿勢を示唆しているのである。しかし、そのような多視点的な姿勢を取って読者を説得しようとしても、枠組みが三人称過去でありながら推量表現を伴わない言説である限り、平安朝においては物語虚構として認識されてしまうのである。[14]

語り手が推量を使うことによって得られる効果とは、その内容が「虚構ではなく事実なのだ」という姿勢を示すものであるというのだが、その一方で、三人称過去、つまり「他人の過去」を語るという枠組みの中では、自分の直接体験ではないにもかかわらず推量を使わない場合、「虚構のものである」と読者に受け取られる[15]というのである。

この「虚構性」について桜井宏徳氏は次のように述べる。

> 確かにいいうるのは、いわば歴史のフィクション化とも評すべき、そのような「語り」の方法によって、仮名文の新たな担当領域を切り拓いていったことこそが、文学史上・文章史上における『栄花物語』の最大の功績であった、ということである。[16]

前掲の三谷氏は、虚構性の要素を含んだ仮名文によって歴史を記したことを『栄花物語』の「敗北」としていたが、桜井氏は逆に、それまでは漢文の独壇場であった歴史叙述が仮名文でも可能になったという点に『栄花物語』の功績を見出している。

ここまで、他資料利用箇所を含めた『栄花物語』の文体の特徴について、先行研究をまとめた。次節ではこれらの先行研究を踏まえた上で、伊周の遺言場面の内容とその文体を改めて確認し、諸本異同を含めて考察する。

---

14 三谷邦明「歴史物語の方法―虚構と事実あるいは栄華物語と大鏡をめぐって―」「平安朝文学研究」復刊一二／二〇〇三

15 三谷氏は、このことを克服した『大鏡』は「栄華物語が敗北した、歴史的事実性を、それによって回復することができた」とするが、そのために『大鏡』は「語りを犠牲として捧げなければならなかった」とも述べている。

16 桜井宏徳「歴史を仮名文で「書く」ということ―『栄花物語』論のための序章―」『古代中世文学論考』二七／二〇一二

二、伊周の遺言

前節では伊周の遺言場面を考えるにあたって、他資料利用の可能性について先行研究を参照した。本節では前掲の先行研究を踏まえ、伊周の遺言場面――寛弘七年の年変わりから始まる中関白家の様子を描写した部分の内容及び文体的特徴について、諸本異同を加味しつつ考察する。

伊周の心配と訓戒

まず伊周の遺言場面について確認する。本節にて比較する八宮との遺言と共通する要素を、用例中に傍線で示した。文章中に登場する順にA～Fの要素を挙げ、伊周は小文字、八宮は大文字で示している。また、A～Fまでの各要素に相当するが片方の例に複数の要素が含まれるところを「x」、順序通りの配置ではないところを「Y」で補った。

太宰府への左遷から帰京、復職して十年余り、三十七歳で失意のうちに伊周は没した。『栄花物語』の寛弘七年、年変わりの表現に続いて、伊周の訓戒は始まる。

「己なくなりなば、いかなるふるまひどもをかしたまはんずらん。世の中にはべりつるかぎりは、とありともかかりとも、女御、后と見たてまつらぬやうはあるべきにあらずと思ひとりて、(a)かしづきたてまつりつるに、命耐へずなりぬれば、いかがしたまはんとする。今の世のこととて、いみじき帝の御女や、太政大臣の女といへど、みな宮仕に出で立ちぬめり。この君達をいかにほしと思ふ人多からんとすらんな。(b1)それはただ異事ならず、己がための末の世の恥ならんと思ひて。男にまれ、何の宮、かの御方よりとて、こともよう語らひよせては、(b2)故殿の何とありしかばかかるぞかしと、心を遣ひしかばなどこそは、世にも言ひ思はめ。

（1：四四八～四四九頁）

二人の姫君を前に、**（a）**「これまで大事に育ててきたのに、自分が死んだらどうするつもりか」、今の世は貴人の娘[17]たちもみんな〈宮仕〉に出るらしいのにと娘たちの将来や結婚に

17 「太政大臣」には「大殿おとゝ」という異同（明暦二年版本、富岡甲乙本）があるが、

ついての言及がある。次に娘たちに不本意な結婚があったとすれば、(b)「世間には自分の采配と思われるだろう」と語り、娘たちの将来を心配しているはずなのだが、それだけではなく、自分の不名誉を懸念している。ここではまだ「訓戒」というよりも「危惧」である。伊周は次に、「後悔」や「嘆き」を語り始める。

(x)母とておはする人、はたこの君達の有様をはかばかしう後見もてなしたまふべきにあらず。などて世にありつるをり、神仏にも、『己があるをり、先にたてたまへ』と、祈り請はざりつらんと思ふが悔しきこと。さりとて尼になしたてまつらんとすれば、人聞きもの狂ほしきものから、あやしの法師の具どもになりたまはんずかし。あはれに悲しきわざかな。まろが死なん後、人笑はれに人の思ふばかりのふるまひ有様掟てたまはば、かならず恨みきこえんとす。(c)ゆめゆめまろがなからん世の面伏、まろを人に言ひ笑はせたまふなよ」など、泣く泣く申したまへば、大姫君、小姫君、涙を流したまふもおろかなり、ただあきれておはす。北の方も答へたまはん方もなく、ただよよと泣きたまふ。

（1：四四九頁）

(x)「母（伊周の妻）は子供の世話では頼りにならない」と妻の無力を嘆く。富岡本系統では「母御とておはするは、はたこの君達の御有様なり（也）。はかばかしくもてなしたまふべきにあらず。」となっており、若干の異同が見られる。「也」と「を」との誤写関係であろうが、「君達の御有様なり」と読めば、親としての役割を果たすわけではなく、姉妹のような様子であるとも解せるだろうか。何にせよ北の方が娘たちの後見として頼りないという点は一致している。更に、何故神仏に自分の存命中に娘たちを自分より先に死なせてほしいと願わなかったのかと悲観し、(c)「自分の死後、嘲笑の的になるようなことをして、〈面伏〉になるようなことをするな」と重ねて自分の不名誉の心配をし、娘たちに釘を差すのである。そうした娘たちへの訓戒に続き、次は息子道雅へと訓戒の対象が移る。

松君の少将などを、「とりわきいみじきものに言ひ思ひしかど、位もかばかりなるを見置きて死ぬること。われに後れていかがせむとする。魂あればさりともとは思へども、

大意には影響ない。

いかにせんとすらんな。いでや、世にありわづらひ、官位人よりは短し、人と等しくならんなど思ひて、世にしたがひ、ものおぼえぬ追従をなし、名簿うちしなどせば、世に片時あり廻らせじとす。(d)その定ならば、ただ出家して山林に入りぬべきぞ」など、泣く泣く言ひつづけたまふを、いみじう悲しと思ひまどひたまふ。げにことわりに悲しともおろかなり。

（1：四四九〜四五〇頁）

道雅には、(d)「人並みになろうとして世間に追従をするくらいなら、出家して隠遁せよ」という。ここでようやく「〇〇しろ」という具体的な指示が出される。続いて伊周は弟隆家に懇ろに語り掛ける。

中納言殿あはれに聞きまどひたまひて、「何かかくは思しつづくる。げにみなさる事どもにははべれど、などてかいとことのほかには誰もおはせん」など、いみじう泣きたまへば、「君をこそは年ごろ子のやうに思ひきこえはべりつれど、かくわれも人もはかばかしからでやみぬることの、あはれに口惜しきこと。(e)道雅をなほよく言ひ教へたまへ」など、よろづに言ひつづけ泣きたまふ。

（1：四五〇〜四五一頁）

三十二歳の隆家は、兄の懸念を払おうと言葉を尽くすが、伊周は(e)「道雅をよくよく教え導いてくれ」と言い置く。この遺言が済むと、娘たち、妻、息子、そして伊周本人の様子が描写され、いよいよ正月二十九日に没したという展開となる。

伊周家の結末

前述のような遺言の後、『栄花物語』は同巻末で、早々に彼の家族が危惧の通りになってしまうことを描く。娘たちのうち、姉の大姫君は道長の明子腹の息子、頼宗の通い人となる。伊周の言うところの「語らひよせ」にあってしまったのである。伊周の死去以降、巻八では年が改まった記述がなく、この後に続く敦康親王元服からも、物語はまだ寛弘七年の時点にあると思われるが、早くも大姫君に頼宗が通っているという噂が立つ。

かの帥殿の大姫君にはただ今の大殿の高松殿腹の三位中将通ひきこえたまふとぞいふと、世に聞えたり。(f1)あしからぬことなれど、殿の思し掟てしには違ひたり。中将いみじう色めかしうて、よろづの人だに過ぐしたまはずなどして、御方々の女房にもののたまひ、子をさへ生ませたまひけるに、この御あたりにおはし初めて後は、こよなき御心用ゐなれど、なほをりをりものの紛れぞ、いと心づきなうおはしける。あはれに心ざしのあるままによろづにあつかひきこえたまへば、仕まつる人もうち泣き、女君も恥づかしきまで思しけり。母北の方、もとより中の君をぞいみじく思ひきこえたまへりければ、よろづにこの御ためにはおろかなるさまに見えたまひける。中の君をば中宮よりぞたびたび御消息聞えたまへど、(f2)昔の御遺言の片端より破れんいみじさに、ただ今思しもかけざめれど、目やすきほどの御ふるまひならばさやうにやと、心苦しうぞ見えたまひける。あはれなる世の中は、寝るが中の夢に劣らぬさまなり。

（1：四五九〜四六〇頁）

妾腹とはいえ道長の息子であるから、**(f1)**「悪い結婚ではないにせよ、伊周の意向には背いて」いる。頼宗の好色さと大姫君への愛情深さが混在し、この結婚についてやや不安が残る書きぶりで、伊周が懸念していた母北の方の動きについても言及がある。更に、中の君についての記述も続く。中宮彰子から女房としての出仕を促す手紙がたびたびあったが、**(f2)**「遺言を破ってしまう」ことに心を痛め、この時はまだ思いもかけないことと考えている。出仕後の彼女については、『御堂関白記』寛仁二年十月二十二日[18]の項に「正五位下藤原周子、大宮、故帥殿（藤原伊周）二姫」と叙位の記述があり、彼女の名前が「周子」であることが分かる。

このように大姫君の結婚は「父の遺言を破った結婚」として語られ、入内を見据えて娘たちを養育してきた父伊周の悲哀が思い起こされる。妹の中の君は、倫子の要請を受けて、彰子付きの女房になる。彼女は「宮仕に出で立」ったわけで、姉妹二人して伊周の遺言を違えてしまったことになる。

語り手の造型と主観的表現

[18] 東京大学史料編纂所編『御堂関白記　下』大日本古記録／岩波書店／一九五四

こうした臨場感に溢れた遺言は如何にして書かれたのか。この問題を考えるにあたってまず検討したいのが、この場面が本当に『栄花物語』の意図によって作られているものなのか、つまり『紫式部日記』を利用して敦成親王の誕生記が書かれたように、誰かが記録に残していたものを『栄花物語』が利用したのではないかということである。しかし、ここでの『紫式部日記』に当たるものが現存していない以上、それ以外の情報から類推するしか方法はない。

そこで、手がかりとなるのが、先に挙げた先行研究で注目されていた文体である。具体的には、渡瀬氏が述べていた『栄花物語』全体を見た時の特徴である「抽象的な語り手像」が、この伊周遺言場面の「語り」にも合致するのか否か、考えてみたい。

まず、人称についてである。伊周は「帥殿」「この殿」、隆家は「中納言殿」、隆円は「僧都の君」、道雅は「松君の少将」「少将」となっており、役職を用いた敬称であるので、これもどこかの家への帰属を示すようなものではないだろう。富岡甲本は息子道雅に言及する時に「みちまさ」と名前を出している部分があるが、これは後世に傍書が混入したものであろう。加えて、『紫式部日記』利用部分では、女房たちについても「紫」「宮内侍」「大納言の君」のような具体的な人物名が見られたが、伊周の遺言場面の女房たちにはそうしたものは見られない。人称について概観すれば、伊周の遺言場面でも「抽象的な語り手像」が用いられていると言って良いだろう。

次に、語り手の行動についてである。伊周の遺言からその薨去の場面、新編全集の章立てでは〔七九〕から〔八一〕にあたる部分の草子地は、場面そのものが伊周家の内部の話なので、その場に居合わせ、人々の様子を見ている人間が語っている体になる。語り手はその場を描写しているのみで特に行動を起こしたりはしない。

その一方で、語り手の「主観的」な表現――同情を示す言葉、主観的に見た容貌の形容などは認められる。その例として、語り手が伊周に対して同情を示している部分が挙げられる。伊周の御封についての情報が提示され、封戸からの上納が滞っていることが述べられるのだが、単に淡々と事実を述べたものではなく語り手による含みがある個所が見られる。

年もかへりぬ。寛弘七年とぞいふめる。よろづの例の有様にて過ぎもて行くに、帥殿は今年となりては、いとど御心地重りて、今日や今日やと見えさせたまふ。何ごとも月ごろしつくさせたまへれば、今はいかがすべきと思し嘆き、さるは一昨年よりは、御封なども例の大臣の定に得させたまへど、国々の守も、はかばかしくすがやかに奉らばこそ

あらめ、いといとほしげなり。御心地いみじうならせたまへば、この姫君二所、蔵人少将とを並め据ゑて、北の方に聞えたまふ。

（1：四四八頁）

梅沢本を底本に用いる新編全集は「こそあらめ」を「であればともかく」と訳し、注で「そんなことはないから、くらいを補い読む」としている。加えて、松村氏は『栄花物語全注釈』で「ともかくと口訳したが、「こそよくあらめ」の略と見てもよい」とも述べている。「め」が「適当・勧誘」の助動詞であるとして、そこには「だったらよいのだが」という語り手による同情が覗いているという解釈であろう。それに「いといとほしげなり」という同情的な表現が続く。ここには流布本系に「…と、いとをしげなり」という異同があるが、大意に影響なしと見てよかろう。こうした部分は、渡瀬氏の言う「歴史叙述としての客観性の装いを保ちながら、しかもその真実性を保証してゆくためには必然」の、主観的な表現に数えて良いと思われる。

こうした「語り」の部分を概観すると、伊周の遺言場面の「語り手」も、中関白家の内部事情を伝え、伊周家の様子を間近に見る視点で書かれているが、やはり具体的な人物像はないと言える。これも渡瀬氏の言う「客観性」と「真実性」を保証する「文体」に一致する。そうした点からもここに積極的に他資料の利用を見出す理由はないだろう。

伊周の長台詞

次に、この場面の特徴として特筆すべきことは、伊周の台詞の長さである。「己なくなりなば」から「など、泣く泣く申したまへば」まで、発話主体は伊周から変わっていないと見え、諸注釈もその判断に揺れはない。諸本を見ても、「己なくなりなば」から始まる部分は、富岡本には若干本文に壊れが見えるが、「など、泣く泣く申したまへば」と、草子地に続くことは共通しており、一続きと見て良いだろう。梅沢本で数えると約二四行（一頁十行）という長さである。

こうした長大な独白は、『栄花物語』の中でどのように位置づけられるだろうか。新編全集を参考に『栄花物語』正編に見られる比較的長い台詞の例――具体的には、梅沢本で二十行（一丁）を超えるものを確認すると、以下の八例が挙げられる。新編全集から、巻〔節〕節題（冊：頁）話者、及び概要を〈表1〉にまとめた。

巻〔節〕	節題	発言者	概要	冊：頁
5〔6〕	伊周、木幡に詣る	伊周	配流前、道隆の墓前で定子への加護、自身の無実を訴える。	1：二四三
8〔79〕	△伊周の遺言	伊周	臨終が近づき、家族に対して訓戒と無念を訴える。	1：四四八
15〔4〕	△道長の述懐	道長	死を覚悟して人生を振り返り、死すとも恥はないと述懐。	2：一七六
16〔32〕	経典供養	**永昭**	妍子方女房たちの書写した経典の供養のための説法。	2：二三九
26〔18〕	▲院源、悲しみに暮れる道長を諭す	**院源**	嬉子の死を悲しむだけではなく、往生の機縁にせよと諭す。	2：五二八
26〔22〕	▲小一条院とある殿ばらとの世間話	敦明	自分が先に死に寛子を遺すことにならずに良かったと思う。	2：五三一
27〔27〕	▲斉信、公任を訪れ、ともに嘆く	斉信	娘を失った悲しみ。娘婿が家に来なくなると慰めもなくなる。	3：五四
30〔14〕	▲道長の葬送	**院源**	道長の死に際しての法話。	3：一六九

表1　梅沢本正編における二十行（一丁）以上の台詞

用例の分布としては巻五から巻三十まで散らばっている。また、八例のうち、発言者を**太字**で示した三例が僧による発言であり、更にそのうちの二例が大人数に対して語られた法話、説法である。順番が前後するが、表に▲で示した後半の四例は、「人の死に際して述べられた言葉」という特徴がある。これらのうち、比叡山の座主院源が発した二例は、身近な

誰かを亡くした人に対して僧の立場から発言したものであり、生者の死への執着を諫め、故人の往生を願わせるための法話である。それに対して、敦明親王と斉信の発言は、それぞれ妻と娘を亡くした折の悲しみの吐露である。

注目したいのは、表に△で示した伊周の遺言と、巻十五「うたがひ」での道長の述懐である。見てきたように、伊周の遺言は自身の死が近いことを察しての発言であるが、ここでの道長の台詞もまた、病による死を覚悟した際に語られたものである。寛仁三年（1019）の年変わりの後、道長は三月十七日以降病に伏せっているとされる。道長の台詞部分を以下に引用する。

殿の御前、「さらに命惜しくもはべらず。さきざき世を知りまつりごちたまへる人々多かるなかに、おのればかりすべき事どもしたる例はなくなんある。内、東宮おはします、三所の后、院の女御おはす。左大臣にて摂政仕うまつる。次は内大臣にて左大将かけたり。また大納言あるは左衛門督にて、別当かけたり。この男の位ぞまだいと浅けれど、三位中将にてはべり。みなこれ次々の公の御後見仕うまつるべし。みづから太政大臣准三宮の位にてはべり。この二十余年のほど並ぶ人なくて、身一つして、あまたの帝の御後見を仕うまつるに、ことなる難なくて過ぎはべりぬ。おのが先祖の貞信公、いみじうおはしたる人、われ太政大臣にて、小野宮の大臣左大臣、次郎九条右大臣、四郎、五郎など大納言にてさし並びたまへりけれど、后立ちたまはずなりにけり。近くは九条の大臣、わが御身は右大臣にてやみたまひにけれど、大后の御腹の冷泉、円融院おはしまし、十一人の男子のなかに、五人太政大臣になりたまへり。今にいみじき御幸ひなりかし。されど后三所かく立ちたまひたる例は、この国にはまだなきなり」など、世にめでたき御有様を、言ひつづけさせたまふ。

（2：一七六頁）

まず初めに「命は惜しくはない」と言い切り、儲けた子や孫たちは、帝や東宮、后、大臣と、まさに栄華を極めた位にあることを語る。伊周が「女御、后と見たてまつらぬやうはあるべきにあらず」と述べたことを、道長はやってのけたのである。次に、自分は「太政大臣准三宮」の身分であること、后を三人も出すというこれまで先祖が成し得なかった快挙を誇る。

そしてこの一続きの台詞に次いで、やり残したことについても言及する。

「今年五十四なり。死ぬともさらに恥あらじ。今行く末もかばかりのことはありがたくやあらん。ただ飽かぬことは、尚侍を東宮に奉り、皇太后宮の一品宮の御有様、この二事をせずなりぬるぞあれど、大宮おはしまし、摂政の大臣いますがれば、さりともしたまふことありなん」と、言ひつづけさせたまふに、宮々、殿ばら泣かせたまふ。僧俗も涙とどめがたし。上はさらにも言はず、聞えさせん方なし。

（2：一七六頁）

ここで死んでも恥じることはないが、心残りなのは娘の嬉子と孫の禎子内親王の処遇である。とはいえ、彰子と頼通がいれば心配はないだろう、と続ける。伊周は「われに後れていかがせむとする」と、自分の死後はどうなってしまうのかと心配し、北の方は居るものの「はたこの君達の有様をはかばかしう後見もてなし」てはくれず、頼りないと悩んでいた。伊周とは見事に対照的である。

こうした対比は、道長と伊周、二人の人生の対比そのものである。巻八「はつはな」は、巻全体で道長と伊周の悲喜が交互に描かれ、両者が対照的に表現されていることが指摘されている[19]が、ここでは巻を越えてそれと同様の構図が作られているのではないだろうか。二人の遺言――道長はこの後持ち直すので厳密には遺言ではなくなるのだが――は、その長さや観点が一致していることにより、二人の明暗がはっきりと分かるように構成されている。とすれば、ここにも『栄花物語』作者の意思が働き、潤色されていると見て良いのではないだろうか。表にあげた残る一例、巻五「浦々の別」の例も、発言者である伊周を光源氏に準えるよう潤色されているのではないかと指摘[20]されている。それと同様のことが遺言の場面にもあったのだろうと思われるのである。

遺言場面についての先行研究

加えて、諸注釈はこの遺言の場面についてどのように分析をしているかを確認する。松村博司氏はこの遺言の場面の補説として、次のように述べる。

---

19 注5　五八七～五九一頁

20 注8に同じ。

本書の作者は中関白家については大きな関心を抱いて相当なスペースをさいて詳述してきた。それらの中には本書をおいては他に見られない話もあったし、摂関政治時代の裏面史というべきようなものもあった。（中略）本節の記事は、なお第七十二節から七十四節までと、後日譚として第七十九節に続いている。[21]

作者の中関白家に対する強い興味に注目し、この出自不明の遺言を「裏面史」と評している。「第七十二節から七十四節まで」は前述の「伊周家の結末」に当たる部分である。なお、松村氏は、伊周が「みな宮仕に出で立ちぬめり」と言う「いみじき帝の御女や、太政大臣の女」について、「太政大臣為光の女五の君は三条后妍子の女房となるような例がある」という注を付しており、実際の例として想定できるものがあったことを示している。

次に新編全集[22]は、頭注で「〔二九〕にみえた花山院の臨終の言葉も、ここの伊周と同じく、死後の不名誉を恐れ、娘の死を願うもの」というように、巻八の前半に崩御した花山院の臨終の言葉と、伊周の言葉に共通する点のあることについて言及する。『栄花物語』での花山院の崩御は寛弘五年二月である。それに先立ち、同月の月替わりの記述に続いて、花山院の不調と遺言めいたものが語られる。

かかるほどに二月になりて、花山院いみじうわづらはせたまふ。いみじうあはれいかにと聞きたてまつるほどに、御瘡の熱せさせたまふなりけり。あはれにかぎりと見ゆる御心地を、医師など頼みすくなく聞えさす。この女腹、親腹に、あまたの御子たちおはするに、おのおの女宮二人づつぞおはしける。「われ死ぬるものならば、まづこの女宮たちをなん、忌のうちに皆とり持て行くべき」といふことをのみのたまはすれば、御匣殿も女も、さまざまに涙流したまふ。親腹の弟宮をば、そのはらからの兵部命婦にぞ生れたまひけるままに、「これはおのれが子にせよ。われは知らず」とのたまはせければ、やがてしか思ひてぞ養ひたてまつりける。

（1：三八八〜三八九頁）

---

21 注5　五五九〜五六〇頁

22 山中裕ほか校注『栄花物語1』新編日本古典文学全集／小学館／一九九五　四四九頁頭注

「御匣殿」は「中務」とも呼ばれる女で、花山院は中務とその娘の両方と関係を持ち、女宮が二人ずついたという。その女宮たちについて、一人を除いて「自分が死んだら四十九日の間に娘はあの世に連れて行く」という予言めいた遺言をしている。この件は他の記録には見られないが、『栄花物語』では、以下に引用するようにこの予言は実現し、「われは知らず」と除外された一人以外はみんな死亡したとされる。

まことに御忌のほど、この兵部命婦の養ひ宮をはなちたてまつりて、女宮たちは片端よりみなうせたまひにければ、…

（1：三八九頁）

三、八宮の遺言

本節では、今井氏によって実際の伊周との類似性を指摘されていた宇治の八宮の遺言について分析する。「椎本」で語られる彼の遺言は、宇治十帖の物語展開において非常に重要である。作中で語られる八宮の遺言及び訓戒は大きく分けて三つあり、薫、娘姉妹、侍女たちに、それぞれ異なった言葉を遺している。伊周の遺言は正月であったが、八宮のそれは秋が深まり、もの心細い時節のことである。

八宮の心配と訓戒

まず薫への遺言であるが、八宮の薫への遺言は、「宇治十帖最初の「橋姫」巻で既になされていた」という山畑幸子氏[23]の指摘がある。氏は「橋姫」の場面を、「「とぶらひ」とお願いしていることから、宇治から離れさせることは念頭にないようである」「薫への実質的な結婚の依頼であり、結婚の事前の承諾であると考えられる」と解している。しかし、その「橋姫」の場面でも、次に引用する「椎本」でも、八宮が薫に頼んでいることは同じ内容である。こちらも伊周の用例と同じく、重要と思われる箇所に傍線と記号を附した。

---

[23] 山畑幸子「『源氏物語』続編における八宮の遺言の一視点：遺言を乗り越えた女性たち」「清心語文」九／二〇〇七

…宮はまいて、例よりも待ちよろこびきこえたまひて、このたびは心細げなる物語いと多く申したまふ。「(Y)亡からむ後、この君たちをさるべきもののたよりにもとぶらひ、思ひ棄てぬものに数まへたまへ」などおもむけつつ聞こえたまへば、「一言にてもうけたまはりおきてしかば、さらに思ひたまへ怠るまじくなん。世の中に心をとどめじとはぶきはべる身にて、何ごとも頼もしげなき生ひ先の少なさになむはべれど、さる方にてもめぐらひはべらむ限りは、変らぬ心ざしを御覧じ知らせんとなむ思ひたまふる」など聞こえたまへば、うれしと思いたり。

（5：一七九頁）

(Y)「折に触れて二人の娘を訪れ、人数に入れて世話をしてほしい」と薫に頼んでいる。

一方の伊周は娘のことを頼み置くのに相応しい相手がいなかったようであるが、息子に関しては、弟の隆家に庇護を頼んでいる。それから間もなく、八宮は静謐な山寺での念仏を志し、娘たちに訓戒する。

「世のこととして、つひの別れをのがれぬわざなめれど、思ひ慰まん方ありてこそ、悲しさをもさますものなめれ。(A)また見ゆづる人もなく、心細げなる御ありさまどもをうち棄ててむがいみじきこと。されども、(B)さばかりのことに妨げられて、長き夜の闇にさへまどはむが益なさを。かつ見たてまつるほどだに思ひ棄つる世を、去りなん後のこと知るべきことにはあらねど、わが身ひとつにあらず、(C)過ぎたまひにし御面伏に、軽々しき心ども使ひたまふな。(D1)おぼろけのよすがならで、人の言にうちなびき、この山里をあくがれたまふな。ただ、かう人に違ひたる契りことなる身と思しなして、ここに世を尽くしてんと思ひとりたまへ。ひたぶるに思ひしなせば、事にもあらず過ぎぬる年月なりけり。まして、(D2)女は、さる方に絶え籠りて、いちじるくいとほしげなるよそのもどきを負はざらむなんよかるべき」などのたまふ。

（5：一八四～一八五頁）

伊周と同じく(A)「娘を置いていくことの懸念」を示しつつ、(B)「娘を心配するせいで自分の悟りがうまく行かないのでは」と言う。伊周の場合は、娘の結婚の失敗が自分の汚点になることを心配していた。方向性は違うが、娘の心配をしているようで実は自分のことも

考えている点が共通している。

また、両者に共通する語として（C）「面伏」が挙げられる。伊周は自分の、八宮は亡き母の面目を潰さぬようにせよとそれぞれ訓戒している。伊周も母のことに触れはしたが、母の面目という点での言及ではなかった。

そして伊周と同じく、具体的にどうしてほしいかという点を述べる。この点は、具体的に語った相手が息子か娘か、そして八宮の場合は皇族という特殊な身分が関わっているので若干の相違があるが、（D1・2）「他人から誹られぬように」という訓戒と、「然るべきところに隠遁せよ」という教えとを見れば、両者に共通していると見て良いだろう。八宮家の場合は宇治を「離れるな」という言い回しである。

八宮家の結末

こうした八宮の遺言の後に娘たちが迎えた結末については、詳述の必要はないだろう。姉の大君は亡くなり、妹の中の君は匂宮に妻として迎えられ、宇治を離れて行った。大君の四十九日の後、薫が大君を偲んでいるのを見た女房が、次のように薫に語る。

「御心地の重くならせたまひしことも、ただこの宮の御事を、思はずに見たてまつりたまひて、人笑へにいみじと思すめりしを、さすがにかの御方には、かく思ふと知られたてまつらじと、ただ御心ひとつに世を恨みたまふめりしほどに、はかなき御くだものをも聞こしめしふれず、ただ弱りになむ弱らせたまふめりし。うはべには、何ばかりことごとしくもの深げにももてなさせたまはで、下の御心の限りなく、何ごとも思すめりしに、(F)故宮の御戒めにさへ違ひぬることと、あいなう人の御上を思し悩みそめしなり」

（5：三三四頁）

妹の不本意な結婚に心を痛め、（F）「父の戒めにまで背いてしまった」と思いつめるあまりに大君は死んでしまったのだと老女房は言う。女房の口を借りてはいるものの、その後悔は大君のものである。同じことは伊周家の姉妹の後日談でも語られており、姉と妹それぞれについて言及があった。

長谷川政春氏は遺言の呪縛性に注目し、「薫君の場合も姫君たちの場合も、故八宮の遺言

の呪縛性が顕在化している例[24]」と述べた。一方それを受けて、山畑氏は「遺言に呪縛されているのは八宮と薫の男性であって、大君・中君、女房も含めて女性はその呪縛を乗り越えている[25]」と述べる。また、正道寺康子氏は、娘たちへの影響を「八宮の遺言は、軽率な結婚を戒めると言う消極的な遺言であったため、娘たちに苦悩をもたらすものとなった[26]」というように見る。

四、二つの遺言の類似

ここまで二つの遺言とその結末について、内容の上での類似点を見てきたが、それらをまとめると〈**図1**〉のようになる。

語彙のレベルでは「面伏」以外に目立つ一致は得難い。しかし、両者の話題の流れはほぼ一致している。「子の心配→自分の心配→隠遁せよ」という大きな流れである。更に遺言の前後に子女の後見の依頼をしている点と、後に遺言に違反したことを後悔する娘が描かれる点も共通している。細かい事情が違っているため、全く同じ言い回しにはならないが、伊周と八宮の遺言は大筋で似通っていると言えるだろう。『栄花物語』に『源氏物語』からの影響が非常に大きいことを思えば、伊周の遺言は八宮の遺言から大きく影響を受け、執筆時の潤色に際して大いに活用されたことが考えられるのではないだろうか。

---

[24] 長谷川政春「宇治十帖の世界――八宮の遺言の呪縛性――」『物語史の風景』若草書房／一九九七　＊初出「國學院雑誌」七一‐一〇／一九七〇

[25] 注23に同じ。

[26] 伊藤禎子・正道寺康子・八島由香・谷晃一「人物ファイル――八宮」『人物で読む『源氏物語』第十八巻――匂宮・八宮』勉誠出版／二〇〇六

	子を遺して死ぬ心配	自分の心配	面伏	母	隠遁	後見の依頼	遺言を破った
伊周	（a）かしづきたてまつりつるに、命耐へずなりぬれば、いかがしたまはんとする。	（b1）それはただ異事ならず、己がための末の世の恥ならんと思ひて。 （b2）故殿の何とありしかばかかるぞかしと、心を遣ひしかばなどこそは、世にも言ひ思はめ。	（c）ゆめゆめまろがなからん世の面伏、まろを人に言ひ笑はせたまふなよ	（x）母とておはする人、はたこの君達の有様をはかばかしう後見もてなしたまふべきにあらず。	（d）その定ならば、ただ出家して山林に入りぬべきぞ	（e）道雅をなほよく言ひ教へたまへ	（f1）あしからぬことなれど、殿の思し掟てしには違ひたり。 （f2）昔の御遺言の片端より破れんいみじさに…
八宮	（A）また見ゆづる人もなく、心細げなる御ありさまどもをうち棄ててむがいみじきこと	（B）さばかりのことに妨げられて、長き夜の闇にさへまどはむが益なさを。	（C）過ぎたまひにし御面伏に、軽々しき心ども使ひたまふな。	（C）過ぎたまひにし御面伏に、軽々しき心ども使ひたまふな。	（D1）おぼろけのよすがならで、人の言にうちなびき、この山里をあくがれたまふな。 （D2）女は、さる方に絶え籠りて、いちじるくいとほしげなるよそのもどきを負はざらむなんよかるべき	（Y）亡からむ後、この君たちをさるべきもののたよりにもとぶらひ、思ひ棄てぬものに数まへたまへ	（F）故宮の御戒めにさへ違ひぬることと、あいなう人の御上を思し悩みそめしなり

図1　八宮家・伊周家の比較

そうだとすると、残る問題は、『栄花物語』はなぜこうした潤色を行ったのかという点である。『栄花物語』の中関白家についての記述について、福家俊幸氏は、『紫式部日記』と『栄

花物語』における隆家の記述を考察し、次のように述べる。

『栄花』は権力闘争が一定の決着がついた時点で書かれており、そのような余裕があらわれているのではないだろうか。つまり、道長の覇権を見届けた上の描写であるがゆえに、当時の対抗勢力であった、あるいは対抗勢力になりえた人々に対してもやさしいまなざしを向けているのではないかと思うのである。すでに結果の出ている過去であるがゆえに、敗者に鞭打つような態度は、『栄花』の成立時点においてよくするところではなかったのであろう。[27]

『栄花物語』内での伊周周辺の悲劇的、同情的な描かれ方の理由を、執筆された時期の権力の帰趨に見ている。中関白家全体についてこの点は確かに首肯できるが、今回の場面を説明するには、これだけではまだ不十分であろう。敗者に優しく、同情的に描くだけならば、ここまで紙幅を割く必要はないからである。実際に、ここまでの分量を割かずに没落した姫君を描いた例としては、松村氏が言及していた藤原為光女があげられるだろう。父為光の没後、娘たちは道長の妾や女房になったが、『栄花物語』では娘たちに言及はあるものの[28]大きく取り上げられることはなく、父為光の遺言などが書かれているわけでもない。

注目度という点では、伊周は既に巻五「浦々の別」で没落する姿が注目されている。巻五「浦々の別」は「巻の大半を挙げて、藤原伊周・隆家兄弟が、花山院に対する不敬事件に坐して、それぞれ筑紫と但馬に流されてから赦されて帰京するまでの顛末を描いて、特殊な一篇の物語を構成してゐる[29]」と言われ、ここでの伊周は須磨に下向する光源氏に模されていた[30]。このことからも『栄花物語』は彼の人生に少なからず興味関心を持っていたことが分

---

[27] 福家俊幸「『紫式部日記』と『栄花物語』との距離」　山中裕、久下裕利編『栄花物語の新研究：歴史と物語を考える』新典社／二〇一八

[28] 為光四女は巻八「はつはな」で倫子に出仕し、道長の愛人として寵愛される描写があり（1：四五六頁）、五女は巻十一「つぼみ花」で禎子内親王の誕生に際し、出仕したことが述べられる（2：三四頁）

[29] 松村博司『栄花物語の研究　第三』第一篇第二章「栄花物語巻五・六に関する覚書」桜楓社／一九六七　一五頁

[30] 注3参照。また、巻五「浦々の別」では、検非違使による家宅捜索が行われているところに帰邸した伊周について「御かたちととのほり、太りきよげに、色合まことに白くめで

かる。遺言の場合もこれと同様に、彼の周辺をドラマティックに描く演出としても想定できるのではないだろうか。

伊周の遺言を踏まえて見たとき、巻末の大姫君の結婚場面は、松村氏が言うように彼女たちの「後日譚」であり、遺言の伏線を回収する部分である。逆に言えば、伊周の遺言が作者によって創作されたものであるならば、それは彼女たちの結末の伏線として書かれたと言えるであろう。

『栄花物語』作者は、史実として知られている結末を淡々と述べるのではなく、物語としての「あはれ」に満ちた表現で描き出す手法を『源氏物語』から学び取っていた。ここでは、物語的な「伏線」の張り方とも言うべき手法を、宇治の八宮親子に求めたのではないだろうか。

娘の結婚について

もうひとつ注目しておきたいのが、伊周の娘たちが「父の遺言を破ったことを嘆く」という点である。というのも、娘の結婚を否定的に語らない遺言の例が存在するのである。それが『うつほ物語』の俊蔭と、『源氏物語』の桐壺更衣の父大納言である。

まず俊蔭の例から確認する。「俊蔭」の巻で、俊蔭女が十五の年に父母が相次いで死去する。まず母が死に、その後病に罹った俊蔭が、娘に遺言する。

「われ、ありつる世には、わが子に高き交らひをもせさせむと思ひつれども、若くては知らぬ国に渡り、この国に帰り来ても、おほやけにもかなひ仕うまつらでほど経れば、貧しくて、わが子の行く先の掟せずなりぬ。天道にまかせ奉る。わが領ずる荘々、はた多かれど、たれかはいひわく人あらむ。ありともたれかいひまつはし知らせむ。ただし、命の後、女子のために、け近き宝とならむものを奉らむ」

（1：四六頁）

俊蔭は、娘を高貴な人物に嫁がせたいと思ったこともあったが、今となってはそれも運を天

たし。かの光源氏もかくやありけむ」（1：二四八頁）と検非違使が伊周を評している描写がある。

に任せるしかないと諦観を見せる。娘のための尽力だったともとれるが、男親の野心でもあったはずである。伊周が「女御、后と見たてまつらぬやうはあるべきにあらず」と言っていたのとそう大差はなかっただろう。しかしここからは伊周とは大きく異なる。物語のテーマである「琴」を譲り、人生の禍福が極まったら弾くように、また優れた子ができたらそれへ与えるように、と言い置いて俊蔭は亡くなる。

このように、俊蔭の遺言には娘の結婚についての言及はあるものの、伊周のように「ろくでもない結婚はするな」という訓戒には至らない。それを言ってしまうと、俊蔭女にはこの後しばしの没落が待っているが、その没落から救ってくれる結婚に水を差してしまうことになりかねないのである。

次に、「娘の結婚」を俊蔭よりも更に肯定的に見ているのが『源氏物語』の桐壺更衣の父、故大納言の遺言である。『源氏物語』における「没落する娘を危惧して遺言する父」の例として、桐壺更衣の父、故大納言を取り上げないわけにはいくまい。物語の当初から彼は既に故人であり、その遺言は更衣の母の台詞の中で明かされる。

> 生まれし時より思ふ心ありし人にて、故大納言、いまはとなるまで、ただ、「この人の宮仕の本意、かならず遂げさせたてまつれ。我亡くなりぬとて、口惜しう思ひくづほるな」と、かへすがへす諫めおかれはべりしかば、はかばかしう後見思ふ人もなきまじらひは、なかなかなるべきことと思ひたまへながら、ただかの遺言を違へじとばかりに出だし立てはべりしを、
>
> （1：三〇頁）

更衣の母は、内裏からの使者の命婦に、更衣の入内は父の故大納言の「本意」であったという事情を語る。命婦が持ち帰ったその話と母の手紙に、帝は以下のように述べた。

> 「故大納言の遺言あやまたず、宮仕の本意深くものしたりしよろこびは、かひあるさまにとこそ思ひわたりつれ、言ふかひなしや」とうちのたまはせて、いとあはれに思しやる。「かくても、おのづから、若宮など生ひ出でたまはば、さるべきついでもありなむ。寿くとこそ思ひ念ぜめ」などのたまはす。
>
> （1：三四頁）

大納言の遺言を守り、宮仕えをした甲斐を与えてやりたかったと残念がり、自分たちに残された若宮の成長を帝は思いやったのである。

このように、故大納言も伊周と同じく、娘の入内を願っていた。しかし自分の失脚と死でそれを諦めた伊周とは異なり、大納言は自分が死んでも娘の入内は諦めるなと遺言したのである。その結果、娘の入内は成り、遺言は達成された。

この大納言の遺言について日向一雅氏は、大納言家と明石一門は源氏の家系であったと推測し、以下のように述べる。

> 彼らは家の断絶を代償として、女子を介して新しい源家として再生することに賭けた。大納言が更衣を入内させた意図はそこにあり、光源氏は大納言のそういう遺志を負って生まれてきたということになる。[31]

この視点に立てば、大納言家と八宮家は同じ皇族出身でありながら、片や積極的に娘の入内を推し進め、片や娘の軽率な結婚を戒めるというように、娘の結婚に対する姿勢が大きく異なっていることになる。八宮が右大臣家に担ぎ出され、見捨てられた過去を持っていることを思えば、この対照は非常に興味深い。とはいえ、中の君が次期東宮候補である匂宮の妻となり、若宮も生まれていることから、家としては、再生の萌芽も見えないではない。

俊蔭と故大納言の二例を思えば、伊周の大姫君の場合も、頼宗との結婚が彼女を没落から救ったと、もっと肯定的に語っても良かったはずである。前述の通り、同じ「はつはな」の巻にて、倫子に出仕した藤原為光四女が道長の愛人となったことが語られている。これも太政大臣の娘という高貴な姫が没落した例と言えようが、『栄花物語』はこれについて、次のように語る。

> いとあべいさまに、あるべかしうて過ぎさせたまふめれば、院の御時こそ、御はらからたちも知りきこえたまはざりしか、このたびはいとめでたくもてなしきこえたまへりけり。
>
> （1：四五六頁）

---

[31] 日向一雅「按察使大納言の遺言――明石一門の物語の始発――」　日向一雅・仁平道明編『源氏物語の始発――桐壺巻論集』竹林舎／二〇〇六

彼女が「望ましい」有様に扱われ、彼女の兄弟たちもそれを歓迎したとするのである。為光四女本人は、出仕前に倫子からの誘いに対して「思しもたたぬほどに」（1：四三四頁）とためらっている様子を見せる。新編全集は同頁の頭注にて「結婚ではなく、女房としての出仕であり、故太政大臣の女としては簡単には受け入れがたい」とし、もちろんそれはもっともなのだが、本文中には道長家に否定的な言葉を使った躊躇は描かれないのである。

しかし『栄花物語』は、伊周の娘たちの結婚に「父の遺言を違えた」という一文をなくすことはしなかった。このことも伊周家と八宮家の共通点であり、八宮の遺言が影響を与えている点だと考えられるのではないだろうか。

おわりに

本章では、『栄花物語』における伊周の遺言の場面について、その成立について主に文体の面から検証し、『栄花物語』の文体的特徴を持っていることから敦成親王誕生の場面のように他資料からの引用は積極的に認められないことを述べた。また、伊周の遺言と『源氏物語』における八宮の遺言の関係性を検証し、前者が後者に深く影響を受け、史実を潤色して物語を作り上げる手法を学び取っていた可能性を示唆した。

『源氏物語』では、父の遺言を破ったことを気に病む娘の存在に注目が集まるが、『栄花物語』では、遺された家族が遺言を破ることによって、失意のうちに世を去った父の存在が物語の中で際立ってくるのである。高麗の相人が光源氏を占ったことに見られるように、予言が「達成」されることに大きな軸が見出せる物語は多い。それに対し、八宮と伊周の物語は、遺言が「破られること」に悲劇を見出し、破られるからこそ意味があるように作られているのではないだろうか。「予言」と「遺言」の違いはあるが、物語内に見られる「伏線」であることには変わりないだろう。こうした物語における「伏線の構造」については、今後も課題としたい。

第五章　『源氏物語』「葵」の巻における雲と雨の哀傷

はじめに

万寿二年（1025）七月、三条天皇の皇子敦明親王（小一条院）の妃であった寛子が亡くなるというできごとがあった。寛子は藤原道長の明子腹の娘である。翌八月、道長は倫子腹の娘嬉子も亡くしてしまう。こちらは東宮敦良親王の妃で尚侍であった。栄華を誇った道長であったが、この頃は立て続けに不幸に見舞われている。『栄花物語』巻二十六「楚王の夢」は、嬉子の親仁親王（後の後冷泉天皇）出産と、その直後の死去、殯、葬送、そして人々の嘆きが描かれる悲劇的な巻である。

『栄花物語』「楚王の夢」の巻における嬉子の葬送の場面には、『源氏物語』「葵」の巻の、葵の上の出産から死去、光源氏と三位中将（頭中将として知られる人物）による哀傷の場面からの影響があることが加藤静子氏[1]によって既に指摘されている。この影響関係、及び「楚王の夢」の考察については次章で詳しく触れることにして、本章では、それに先んじて『源氏物語』における哀傷表現について考えたい。

光源氏の妻、葵の上が死去したのは、「葵」の巻、八月廿余日のことである。後には光源氏と遺児夕霧が残され、光源氏をはじめ周囲の人間は悲しみに沈んだ。葬送が終わり、四十九日までの七日ごとの法要が済みつつある頃、既に季節は晩秋であるが、光源氏は未だ喪に服し、左大臣邸に籠っている。そんな光源氏を友人であり義兄でもある三位中将（頭中将）が見舞う。時雨が降る庭を見ながら光源氏が漢詩の一節「雨となりしぐるる空の浮雲をいづれの方とわきてながめむ」と歌を詠み、「行く方なしや」と独り言のように言う。光源氏が「見し人の雨となりにし雲居さへいとど時雨にかきくらすころ」と歌を返し、中将はその光源氏の姿に感じ入り、葵の上の薄命を嘆く。これは葵の上の死後、若紫との新枕を経て、巻の終わりま

---

[1] 加藤静子「『栄花物語』――源氏物語の影」「解釈と鑑賞」五四・三／一九八九

で続く葵の上追悼のうちの一幕（2「葵」五四〜五六頁）である。

ここで光源氏が詠じた言葉は、漢詩の一節であるとの指摘が古注釈の時代からなされているが、その典拠の事情はやや複雑である。『文選』所収の〈高唐賦〉と、劉禹錫による〈有所嗟〉と題された二つの詩が典拠とされているが、〈有所嗟〉は〈高唐賦〉を踏まえて作られている。そして『源氏物語』は直接的には〈有所嗟〉を引いているという複雑な関係を持っている。

こうした典拠を持つ部分は、その典拠の内容も踏まえた本文解釈が必要となる。しかし、これまでの注釈書においては、典拠そのものを追いかけることに力が注がれていて、典拠の内容が物語本文の解釈にまで十分に還元されてこなかったのではないだろうか。

本章では、この漢籍を典拠に持つ言葉に注目し、二つの典拠の日本における用例を分析し、「雨となり雲とやなりにけん」という言葉の意味するところを再考する。また、光源氏が朗詠した漢詩文の訓読に注目し、漢詩文を和文にする際に作者が行っていると思われる工夫について考察する。これらの考察から、漢詩文の典拠を物語の読みに反映させ、より精緻な解釈を進めたい。

一、問題の所在

本文：雲と雨の哀傷

まずは改めて本文を引用し、その内容を確認する。

前後の場面から、舞台は亡き妻の居所であった左大臣邸と思われる。この部分の少し前に「大将の君は、二条院にだに、あからさまにも渡りたまはず」（2「葵」五〇頁）と見え、後に続く部分では、葵の上付きの女房で召人でもあった中納言の君を話し相手としている。葵の上が死去してから、光源氏は左大臣邸を離れていないようである。

> 時雨うちして、ものあはれなる暮つ方、中将の君、鈍色の直衣、指貫うすらかに更衣して、いとををしうあざやかに心恥づかしきさまして参りたまへり。君は、西のつまの高欄におしかかりて、霜枯れの前栽見たまふほどなりけり。風荒らかに吹き時雨さとしたるほど、涙もあらそふ心地して、「雨となり雲とやなりにけん、今は知らず」とうち独りごちて、頬杖つきたまへる御さま、女にては見捨てて亡くならむ魂かならずとまり

なむかしと、色めかしき心地にうちまもられつつ、近うつゐたまへれば、しどけなくうち乱れたまへるさまながら、紐ばかりをさしなほしたまふ。これは、いますこし濃やかなる夏の御直衣に、紅の艶やかなるひきかさねてやつれたまへるしも、見ても飽かぬ心地ぞする。中将も、いとあはれなるまみにながめたまへり。

「雨となりしぐるる空の浮雲をいづれの方とわきてながめむ
行く方なしや」と独り言のやうなるを、

見し人の雨となりにし雲居さへいとど時雨にかきくらすころ

とのたまふ御気色も浅からぬほどしるく見ゆれば、あやしう、年ごろはいとしもあらぬ御心ざしを、院などゐたちてのたまはせ、大臣の御もてなしも心苦しう、大宮の御方ざまにもて離るまじきなど、かたがたにさしあひたれば、えしもふり棄てたまはで、ものうげなる御気色ながらあり経たまふなめりかしといとほしう見ゆるをりをりありつるを、まことにやむごとなく重き方はことに思きこえたまひけるなめり、と見知るに、いよいよ口惜しうおぼゆ。よろづにつけて光失せぬる心地して、屈じいたかりけり。

（2「葵」五四～五六頁）

晩秋の頃、「時雨」「暮つ方」「高欄」などの言葉で情景が語られ、光源氏はその景色を見て漢詩の一節を詠じたという体になっている。それに続く中将の歌は「雨となってしぐれる浮雲のどれが亡き人と見分けて眺めようか、どこへ行ったものやら」と独り言のようであり、それに光源氏が「愛した人が雨となってしまった空までも、たいそう時雨に暗くなるこのごろであるよ」と更に返歌する。これらの歌二首にも光源氏が詠じた「雨となり雲とやなりにけん、今は知らず」という詩句が踏まえられている。

加えて注目しておきたいのは、その光源氏の返歌を聞いた中将が、「浅からぬほどしるく」と、光源氏の葵の上への深い気持ちを感じ取ったことである。親友と妹の夫婦関係を間近で見ていたであろう中将は、光源氏の愛情をさほどでもないと思っていたのだが、「やむごとなく重き方」としては格別に思っていたのだと察している。

これを新編全集では、「家柄の高い、たいせつな人という点では。源氏が葵の上を歴とした正妻と考えていたこと」（2「葵」五六頁頭注）としている。「やむごとなく」については家柄の高貴さ、正妻という地位の高さ、という解釈で問題ないが、「重き方」の意を十分に反映できていないように思われるので、用例を引いて検討したい。

『源氏物語』に「重き方」は他に二例ある。

人のけはひ、いとあさましくやはらかにおほどきて、もの深く重き方はおくれて、ひたぶるに若びたるものから世をまだ知らぬにもあらず、いとやむごとなきにはあるまじ、いづこにいとかうしもとまる心ぞとかへすがへす思す。

（1「夕顔」一五三頁）

「夕顔」の巻、廃院での逢瀬の際に、夕顔の人柄について光源氏が述べている部分である。女の様子は驚くほど柔和でおおらかであり、思慮深く「重き方」は劣っていて、ひたすらに幼いと見えるのだが男は知っているという、夕顔の不思議な魅力の描写である。

兵部卿宮、人柄はめやすしかし、同じき筋にて、他人とわきまへおとしむべきにはあらねど、あまりいたくなよびよしめくほどに、重き方おくれて、すこし軽びたるおぼえや進みにたらむ。なほさる人はいと頼もしげなくなむある。

（4「若菜上」三五頁）

こちらは男性について用いられている「重き方」である。女三宮の婿選びに苦慮している朱雀院が、候補として挙げた蛍兵部卿宮の人柄について述べている。全体的なひととなりは無難であるが、あまりにも優雅に風流ぶっているから「重き方」が劣っていて、少し軽薄な評判が勝っているようである。やはりそうした人間は頼りにならないように思われる、とあまり良い評価ではない。これら二例の「重き方」は、ともに性格や人柄のことであって、「しっかりと思慮を持って落ち着いている」という意であると解せる。

したがって、中将が言う「まことにやむごとなく重き方はことに思きこえたまひけるなめり」は、「本当に、高貴な正妻としてしっかりと落ち着いている点は、格別に思っていらっしゃったようだ」という解釈ができるだろう。そうした確固たる正妻として大事にされていたことを実感し、改めて妹の死を残念に思ったということであろう。

先行研究

次に、先行研究において、この漢詩文を踏まえた部分の読解、解釈が如何になされているかを参照する。

まず、日本古典文学大系[2]（以下「大系」と略称）は、「雨となり、雲とやなりにけん、今は知らず」の部分に以下のように注を付けている。

葵上は雨となってしまったか、雲となってしまったであろうか。今は、雨も雲もどれが葵上の形見か、一向にわからないので悲しい。

（大系1「葵」三四五頁）

これに加えて、補注にて典拠に言及があり、この一節は漢詩が踏まえられたものであることを述べる。この一節を逐次訳するとこうなるということであろうが、この部分は漢詩の一節を暗唱したものと見て、全文の現代語訳を設けている注釈書でも、敢えて訳をせず光源氏が詠じたそのままを「」で示すもの[3]もある。また、光源氏の歌に関しては以下のように、「時雨にかきくらす」という雨の描写について、光源氏本人の涙にも言及している。涙で目がくらむ様子と俄雨によってあたりが暗くなる様子が重なっていると見ている。

私は、涙のために目が暗くなって何も見えないその上に、かつて相見た葵上が雨となってしまった雲井の空までが、時雨のためにひどく真暗になっている時で、葵上の雲も他の雲も、何も見えないのが悲しい。

（大系1「葵」三四六頁）

次に、新潮日本古典集成[4]（以下「集成」と略称）は、中将と光源氏の歌で雨や雲となったと言われている部分について、荼毘の煙からの連想であることを述べている。次の注は、中将の「雨となり…」の歌に付されたものである。

（葵の上を荼毘に付した煙は空に昇って雲となったが）時雨の雨となって降る空の浮雲のどれを、それと見分けることができよう。源氏が劉禹錫の詩の「雨となり雲とやな

---

[2] 山岸徳平校注『源氏物語　一』日本古典文学大系／岩波書店／一五九八

[3] 玉上琢彌『源氏物語評釈　第二巻』角川書店／一九六五
阿部秋生ほか校注『源氏物語2』新編日本古典文学全集／小学館／一九九五

[4] 石田穣二、清水好子校注『源氏物語2』新潮日本古典集成／新潮社／一九七七

りにけむ、……」と誦したことから、その気持を歌にしたもの。

（集成2「葵」一〇一頁）

火葬の煙が雲となり、いずれ雨となって降るその雲を葵の上が変じたものであると見なしているが、どの雲を葵の上の形見と見れば良いのか、という解釈である。

新日本古典文学大系[5]（以下「新大系」と略称）は、この中将の歌に続く「行方なしや」の一言に「（葵上は）行方知れずになってしまった。「高唐賦」の神女は陽台の下にいるというのに、の気持。」と注を付している。故人の兄中将は、古詩を引用した妹婿の意図を理解して、「故事の世界では男女は再会できたのに、現実は勝手が違うね」という慰めを含んだ歌を詠み掛けたと見るべきだろうか。続く光源氏の返歌には以下の注を付している。

源氏の歌。亡き妻が雲となり雨となってしまった空までが、時雨のためにいよいよ暗くなり、私の心もますます悲しみにかきくらす今日このごろだ、の意。空に死者の魂を見出せぬ悲しみを、暗い時雨を降らす空によってかたどる。

（新大系1「葵」三一九頁）

光源氏は中将のその慰めに対し、自分の悲しみを素直に表現する歌で返したということであろう。「空に死者の魂を見出せぬ」ということは、光源氏も中将と同様に、故人の形見として心を寄せる当て（雲）さえ見出だせないのである。

同じく二人の歌について、新編全集では、「雨となり…」「見し人の…」の歌にそれぞれ次のような注がある。

源氏の誦した詩句、「高唐賦」の寝所の故事を受けて仕立てられた歌。また前の源氏の歌「のぼりぬる…」（四八ページ）と類似した発想である。

（2「葵」五五頁）

これも「のぼりぬる…」の歌と類想。空に死者の魂を見出せぬまま時雨の季節を迎える悲しみを詠嘆する。

---

[5] 柳井滋ほか校注『源氏物語　一』新日本古典文学大系／岩波書店／一九九三　三一九頁

（2「葵」五五頁）

ここで言われている「のぼりぬる…」の歌とは、葵の上の葬送が鳥辺野で行われた際に光源氏が詠んだものである。

夜もすがらいみじうののしりつる儀式なれど、いともはかなき御骸骨ばかりを御なごりにて、暁深く帰りたまふ。常のことなれど、人ひとりか、あまたしも見たまはぬことなればにや、たぐひなく思し焦がれたり。八月廿余日の有明なれば、空のけしきもあはれ少なからぬに、大臣の闇にくれまどひたまへるさまを見たまふもことわりにいみじければ、空のみながめられたまひて、

のぼりぬる煙はそれと分かねどもなべて雲居のあはれなるかな

（2「葵」四七〜四八頁）

葬送の際には、明け方の空の様子を眺め、「火葬の煙が昇って行ったのがどの雲であるとはわからないが」というように雲に寄せて哀傷の歌を詠んでいる。この「のぼりぬる…」の歌で用いられている火葬の煙から雲を連想する手法は、『源氏物語』以外では次のような例がある。

中将道信朝臣みまかりにける、をくり歛めてのあしたによめる　藤原頼孝

思ひかねきのふの空をながむればそれかと見ゆる雲だにもなし

（『千載和歌集』巻第九　哀傷　五五〇[6]）

藤原道信が亡くなったのは正暦五年（994）のことであるから、『源氏物語』が生み出される直前、もしくはまさに当代の歌である。しかし、八代集の哀傷の部を追っていくと『千載和歌集』以前では、茶毘の煙の連想としては「雲」よりも「霞」が多い。

人の忌果てて、もとの家に帰りける日　（引用者注：よみ人しらず）

---

[6] 片野達郎、松野陽一校注『千載和歌集』新日本古典文学大系／岩波書店／一九九三　一六七頁

ふるさとに君はいづらと待ち問はばいづれの空の霞と言はまし

（『後撰和歌集』巻第二十　哀傷　一四一五[7]）

円融院法皇うせさせたまひて、紫野に御葬送侍りけるに、一とせこの所にて子日させたまひしことなど思ひ出でてよみ侍りける　左大将朝光

紫の雲のかけても思ひきや春の霞になして見むとは

（『後拾遺和歌集』巻第十　哀傷　五四一[8]）

円融院の葬送は正暦二年（991）であり、道信が没した三年前である。『千載和歌集』『新古今和歌集』では「雲」に寄せる歌が二首ずつあり、少数ながら選ばれるようになる。新潮集成と新編全集ではこうした「雲」を用いた哀傷であるとしているが、光源氏の和歌の中では「見し人の雨となりにし雲居」という表現がなされ、雲ではなく雨にたとえられている。和歌の中で雲と雨を同じ用法で用いていることについて、これらの注釈では詳しく述べられていないが、これは典拠となった漢詩を踏まえてのものであるという解釈であろう。

次に、天野紀代子氏は中将と光源氏の歌について次のように述べる。

劉禹錫の悲しみの詩に白居易が唱和したように、源氏の独り言に中将が歌を持って応じるという二人の〈交友〉が、これ以後丁寧に描かれていく。中将の歌は、妹は空に昇っていったが、雨となってしぐれる空の浮雲を、どれをそれと見分けて眺めようか、というもの。「今は知らず」とおっしゃる通り、葵上の魂はどこへ行ってしまったのか。さらに源氏は歌で応える。我が妻が雲となり雨となってしまった空までが、時雨によっていよいよ暗く、私の心も悲しみに暗れるばかりだ、というもの。「見し人」への哀悼は、「煙」となった夕顔を悼む時にも使われていたが、ここでの「見し人」は雨となり、雲になったと表現されることで、漢詩的な世界がくっきりと移し取られている。

妻の死、妹の死に見舞われた男たちの心情の共有に、漢詩が効果的に使われたわけである。必ずしも、残されたものの悲嘆が表わされているのではなく、時雨にかき暗れる

---

[7] 片桐洋一校注『後撰和歌集』新日本古典文学大系／岩波書店／一九九〇　四三一頁

[8] 久保田淳、平田喜信校注『後拾遺和歌集』新日本古典文学大系／岩波書店／一九九四　一七七頁

状況を男同士で共有していることが、ここでの主要なテーマなのだ。[9]

葵の上への哀悼、「残されたものの悲嘆」が漢詩的な表現で語られただけでなく、ここでは男友達であり親戚でもある光源氏と中将の「交友」が重要であると述べている。この点について、天野氏は別の論考にて次のように述べる。

> 大陸からもたらされた白詩やそれをめぐる贈答唱和の詩によって、詩人たちの交友そのものがイメージされていたということなのだ。源氏と中将の新たな関係を創ろうとする時、作者はそうした白居易文化圏の詩の一端を借り、二人の連帯とその置かれている状況とを浮かび上がらせようとした。和歌の贈答だけでは物足りないという意識が、和歌集の部立てにはない漢詩集の「交友」をたぐり寄せたのだ。[10]

政治的に不利な状況に立たされ、その苦難を共有している光源氏と中将の連帯を表すには、和歌では力不足だった。紫式部は劉白の唱和にその表現を求めたのだというのである。

問題の所在

さて、これらの先行論を引くにつけ、ほぼすべての注釈が「雨となり雲とやなりにけん」という光源氏の言葉を、表面的な「葵の上が雨になったか雲になったか」という意味で説明している。しかし、詳しくは第二、第三節にて考察するが、典拠である劉禹錫の〈有所嗟〉での「為雨為雲」は故事による四字熟語であり、「美女との交わり」「美女との逢瀬」を表すものである。漢籍の素養を持った紫式部が原典の故事を理解せず、表面的な言葉のみを用いたなど、あり得ることだろうか。

しかし、『源氏物語』に見える「雨となり雲とやなりにけん」の訓読では、諸注が解釈するように「死んだ後に雲や雨になった」と解釈するほかないのもまた事実である。これまでの注釈は、この「雨となり雲とやなりにけん」の典拠である〈有所嗟〉〈高唐賦〉の二作品

---

[9] 天野紀代子『跳んだ『源氏物語』――死と哀悼の表現――』第二章「夕顔・葵――物の怪による死と哀傷」新典社／二〇〇九　六八～六九頁

[10] 天野紀代子「交友の方法――沈淪・流謫の男同志――」「文学」五〇・八／一九八二

を十分に説明せずにそれを踏まえた和歌に臨んでいるため、典拠となった漢詩との乖離を生み、表面的な意味しか踏まえられていない解釈となっていたのではないだろうか。

この問題を考えるには、やはり典拠となった漢詩文を確認する必要があろう。次節では、〈有所嗟〉〈高唐賦〉の二作品について、改めてその内容を確認する。

二、高唐賦と有所嗟

本節では、一連の哀傷表現の典拠となっている二つの漢詩文について詳しく見ていく。

現存最古の注釈書である藤原伊行の『源氏釈』から、この場面について既に典拠の指摘がなされている。諸注釈類で典拠として指摘されている漢籍は二種類あり、一つは『文選』所収の宋玉による〈高唐賦〉、もう一つは中唐の詩人劉禹錫による〈有所嗟〉である。〈高唐賦〉は劉禹錫の時代には既に故事として教養化していて、劉禹錫は〈高唐賦〉の故事を踏まえて〈有所嗟〉を作っていると思われる。伊行は〈高唐賦〉を引き、藤原定家による注釈『奥入』は〈有所嗟〉を引いている。これらの後に続く『紫明抄』『河海抄』には両者が引かれ、以降はこれらに従ったと見える記述が多い。

有所嗟

まずは「雨となり雲とやなりにけん」の直接の典拠と思われる〈有所嗟〉から参照する。以下はその全文である。

有所嗟二首　劉禹錫（劉夢得）

庾令楼中初見時　庾令　楼中　初めて見えし時、
武昌春柳闘腰肢　武昌の春柳　腰肢を闘（たたか）わせり。
相逢相笑盡如夢　相逢い　相笑いしも　盡く夢の如し、
為雨為雲今不知　雨と為り　雲と為る　今知らず。

鄂渚濛濛烟雨微　鄂渚　濛濛　煙雨微なり、
女郎魂逐暮雲帰　女郎　魂逐われ　暮雲歸る。
只応長在漢陽渡　只だ應に　長えに漢陽の渡に在り、

化作鴛鴦一隻飛　化して鴛鴦と作り　一隻で飛ぶ。

白詩（2552）　和劉郎中傷鄂姬　劉郎中の鄂姬を傷むに和す

不獨君嗟我亦嗟　獨り君の嗟くのみならず　我も亦嗟く、
西風北雪殺南花　西風　北雪　南花を殺らすを。
不知月夜魂歸處　知らず　月夜　魂の歸る處を、
鸚鵡洲頭第幾家　鸚鵡洲頭　第幾家ぞ。
姬、鄂人也　姬は鄂の人なり

（『劉白唱和集』[二]）

〈有所嗟〉は元々劉禹錫と白居易の唱和詩であり、劉禹錫の愛人の死に際して詠まれた作品である。劉禹錫の二首は、「庾令の地で初めて会った女性と過ごしたことも、今では夢のようである。死んだ女性の魂は暮れ方の雲を追って帰り、漢陽で一羽きりのオシドリになっている」という内容である。それに対して白居易は、「彼女の死を嘆いているのは君一人ではない」と応じ、劉禹錫の傷心を慰める。

傍線部で示した通り、劉禹錫の一首目に光源氏が詠じたほぼそのままの「為雨為雲今不知」という一節があり、典拠であると考えるには十分であろう。また、〈有所嗟〉は〈高唐賦〉を踏まえて作られていると先に述べたが、この一句がそれにあたる部分である。

高唐賦

では「為雨為雲今不知」は〈高唐賦〉の何をどのように踏まえているのか。それを明らかにするため、次はその〈高唐賦〉の序文を参照する。

昔者楚襄王、與宋玉遊於雲夢之臺。望高唐之觀、其上獨有雲氣。崒兮直上、忽兮改容。須臾之間、變化無窮。王問玉曰、此何氣也。玉對曰、所謂朝雲者也。王曰、何謂朝雲。玉曰、昔者先王嘗遊高唐、怠而晝寢。夢見一婦人、曰、妾巫山之女也。爲高唐之客。聞君遊高唐、願薦枕席。王因幸之。去而辭曰、妾在巫山之陽、高丘之阻。旦爲朝雲、暮爲

[二] 柴格朗訳注『劉白唱和集（全）』勉誠出版／二〇〇四　一八八～一九一頁

行雨。朝朝暮暮、陽臺之下。旦朝視之如言。故爲立廟、號曰朝雲。

昔者楚の襄王、宋玉と雲夢の臺に遊ぶ。高唐の觀を望むに、其の上に獨り雲氣有り。崒として直ちに上り、忽として容を改む。須臾の閒に、變化して窮まり無し。王玉に問ひて曰く、此何の氣ぞと。玉對へて曰く、所謂朝雲なる者なりと。王曰く、何をか朝雲と謂ふと。玉曰く、昔者先王嘗て高唐に遊び、怠りて晝寢ぬ。夢に一婦人を見るに、曰く、妾は巫山の女なり。高唐の客爲り。君の高唐に遊ぶを聞く、願はくは枕席を薦めんと。王因りて之を幸す。去りて辭して曰く、妾は巫山の陽、高丘の阻に在り。旦に朝雲と爲り、暮に行雨と爲る。朝朝暮暮、陽臺の下にありと。旦朝に之を視るに言の如し。故に爲に廟を立て、號して朝雲と曰ふと。

（宋玉「高唐賦」序[12]）

「楚の懐王が巫山の地で見た夢に美女が現れ、王と契りを交わした後、去り際に「朝には雲、暮れには雨となって陽台山の元に参る」と言い残した。王が目を覚ますと女の言った通りになっていた」という詩賦の内容を要約している。この夢で出会った神女と一時を過ごしたエピソードは、後世に残る故事となり、「朝雲暮雨」「巫山雲雨」「陽台の夢」といった言葉は「男女の契り」「男女が睦まじく結ばれること」などの意を示している。

〈有所嗟〉の「為雨為雲」という言葉も、「朝雲暮雨」などと同じく、この〈高唐賦〉から生まれた故事成語となっており、「美女」「男女の契り」を表す言葉であるといわれているが、〈有所嗟〉で用いられている「為雨為雲」が、本当にその故事の意で使われているのか、劉禹錫以前の中国における用例から確認しておく。

公子行　　劉廷芝

（略）

花際俳諧雙蛺蝶　　花際　俳諧す雙蛺蝶。
池邊顧歩両鴛鴦　　池邊　顧歩す両鴛鴦。
傾国傾城漢武帝　　国を傾け城を傾く漢の武帝。
為雲為雨楚襄王　　雲と為り雨と為る楚の襄王。……

12 内田泉之助ほか『文選（賦編）下』新釈漢文大系／明治書院／二〇〇一　三四三頁

（『唐詩選』巻二[13]）

七世紀の唐の詩人・劉廷芝の詩である。美しい女性たちを描写する中に「為雲為雨」の言葉が見える。「傾国傾城」「漢の武帝」と並べて「為雲為雨」「楚の襄王」が対句にされており、ここでは美女を指す言葉、または王がその美女を愛したことを表現する言葉として用いられている。劉禹錫は八～九世紀の人であるから、劉禹錫が登場する前から〈高唐賦〉の雲と雨に由来する言葉は「美女」、またはその美女と「契りを交わすこと」を指すものとして用いられていることが分かる。

一方〈有所嗟〉の一首目を見てみると、こちらも第三句と「為雨為雲」を含む第四句が対句になっている。「相逢相笑盡如夢――互いに出会い笑い合ったのも夢のようだ」といった言葉と、「為雨為雲今不知――睦まじく契りを交わしたことも今は分からない」という言葉が対になっているのである。「為雨為雲」が「逢瀬」や「美女」を指す言葉であって、劉禹錫はそれを悲しみの句に用いたのである。

〈公子行〉と〈有所嗟〉は中国漢文での用例であるが、次節で挙げるように、日本の作品においても〈高唐賦〉の故事の用例は多数ある。光源氏に引用されるまで、日本においてこの故事はどのように受容され、使われていたのだろうか。次節では、この故事について日本での用法を考察する。

三、日本における受容

本節では、〈高唐賦〉〈有所嗟〉の故事の日本における用例を参照し、日本ではどういった用いられ方をしていたのか、『源氏物語』以前には、この故事は如何に人々に知られ、使われていたのかを考察していく。

日本における〈高唐賦〉

『源氏物語』以前の例では、古くは『万葉集』の「松浦川に遊ぶ」という一連の作品群の序文に、「あるときには巫峡に臥して空しく煙霞を望む」という一文が見られる。

---

[13] 目加田誠著『唐詩選』新釈漢文大系／明治書院／一九六四　二〇八～二〇九頁

遊於松浦河序

余以暫往松浦之県逍遥、聊臨玉嶋之潭遊覧、忽値釣魚女子等也。花容無双、光儀無匹。開柳葉於眉中、発桃花於頬上。意気凌雲、風流絶世。僕問曰、誰郷誰家児等、若疑神仙者乎。娘等皆咲答曰、児等者漁夫之舎児、草庵之微者。無郷無家、何足称云。唯性便水、復心楽山。或臨洛浦而徒羨玉魚、乍臥巫峡以空望烟霞。今以邂逅相遇貴客。不勝感応、輙陳欵曲。而今而後、豈可非偕老哉。下官対曰、唯々、敬奉芳命。于時、日落山西、驪馬将云。遂申懐抱、因贈詠歌曰、

阿佐里須流　阿未能古等母等　比得波伊倍騰　美流尓之良延奴　有麻必等能古等

松浦川に遊ぶ序

余、暫松浦の県に往きて逍遥し、聊かに玉島の潭に臨みて遊覧するに、忽ちに魚を釣る女子等に値ひぬ。花の容双びなく、光りたる儀は匹なし。柳の葉を眉の中に開き、桃の花を頬の上に発く。意気雲を凌ぎ、風流は世に絶えたり。僕問ひて曰く、「誰が郷誰が家の児らそ、けだし神仙ならむか」といふ。娘等皆咲み答えて曰く、「児等は漁夫の舎の児、草の庵の微しき者なり。郷もなく家もなし、何そ称げ云ふに足らむ。ただ性水に便ひ、また心に山を楽しぶ。あるときには洛浦に臨みて徒らに玉魚を羨しみし、あるときには巫峡に臥して空しく煙霞を望む。今邂逅に貴客に相遇ひぬ。感応に勝へず、輙ち欵曲を陳ぶ。今より後に、豈偕老にあらざるべけむ」といふ。下官対へて曰く、「唯々、敬みて芳命を奉はらむ」といふ。時に、日は山の西に落ち、驪馬去なむとす。遂に懐抱を申べ、因りて詠歌を贈りて曰く、

あさりする　漁夫の子どもと　人は言へど　見るに知らえぬ　うまひとの子と

（『万葉集』巻五「遊於松浦河序」[14]）

松浦河に出掛けた折、そこで出会った美しい娘たちと歌を贈答し合ったという話が語られる。作者が娘たちに「あなた方は仙女ではないか」と身上を尋ねたところ、娘たちの返答は「我々は海人の子である」というものであった。続けて「ある時は巫山に横になり、霞を眺めておりました」という言葉で〈高唐賦〉の地名が現れている。ここでは天女のような神

[14] 小島憲之ほか校注『万葉集2』新編日本古典文学全集／小学館／一九九五　五一～五三頁

秘的で美しい女性たちが登場しており、〈高唐賦〉の神女を匂わせる発言をする。この序文に続く歌群では男女の贈答を重ねていて、〈高唐賦〉〈有所嗟〉にあるような「別れ」の描写はない。この点は次の『懐風藻』の例も同様である。

正六位上左大史荊助仁。一首。　年三十七。

五言。美人を詠む。一首。

巫山行雨下。洛浦廻雪霏。　巫山行雨下り、洛浦廻雪霏ぶ。
月泛眉間魄。雲開髻上暉。　月は泛かぶ眉間の魄、雲は開く髻上の暉。
腰逐楚王細。體随漢帝飛。　腰は楚王を逐ひて細く、體は漢帝に随ひて飛ぶ。
誰知交甫珮。留客令忘歸。　誰か知らむ交甫が珮、客を留めて歸を忘れしむることを。

（『懐風藻』「詠美人」[15]）

右の『懐風藻』の例は、「美人を詠む」と題される詩である。美女の離れがたい美しさを故事に寄せて歌っており、冒頭から「巫山行雨下り」というように〈高唐賦〉の地名と「雨」が登場している。先にあげた『万葉集』の例にも「巫峡に臥して空しく煙霞を望む」に並んで「洛浦に臨みて」という言葉があるが、「洛浦」という言葉がここでも「巫峡」と対句的に用いられている。これは〈高唐賦〉と同じく『文選』に収められている〈洛神賦〉という作品を典拠とした言葉で、〈洛神賦〉は〈高唐賦〉に影響を受けて作られた作品である。この二種類の美女の表現は、日本における漢詩文の中でもしばしば並べて使われている。

このように「巫山」「洛浦」といった言葉は、『懐風藻』が編纂された頃から、日本においても既に神仙的美女を思い起こさせる言葉として用いられていたことが窺える。『懐風藻』の例も「松浦河に遊ぶ」と同じく、美女についてのものであり、ここにも「別れ」の要素は含まれていない。

一方、次の引用は「洛雪」「巫雲」を用いながら、女性の死を主題にした作品である。

「侍中翁主挽歌詞」に和し奉る。二首。　菅原清公

（一首略）

---

15 小島憲之校注『懐風藻　文華秀麗集　本朝文粋』日本古典文学大系／岩波書店／一九六四　一〇二～一〇三頁

鳳掖榮華盡。爲書卜兆通。
向朝傷薤露。欲暮泣楊風。
漢浦星光缺。秦樓月影空。
定知雲雨貌。長絶楚臺中。

「侍中翁主挽歌詞」に和し奉る。二首。　巨勢識人

（一首略）

曉月銘旌出。春山轅馬通。
繁笳悲薤露。畫翣送松風。
洛雪廻光罷。巫雲行影空。
可嗟桃李貌。長掩重泉中。

（『文華秀麗集』巻中「奉和侍中翁主挽歌詞」15）

本来は一人が二首ずつ詠んでいる作品であるが、引用ではそれぞれ一首ずつ割愛している。これらは嵯峨天皇による挽歌詩に唱和して作られていて、女官かそれに似た立場の女性が亡くなったことを嘆くものである。柩が運ばれていく様子を語り、女性の姿を「雲雨」「洛雪」「巫雲」と表現する。その美しい姿が楼閣の中からいなくなってしまうと嘆く内容である。ここでも先の二例と同じく〈高唐賦〉と並んで〈洛神賦〉が使われ、挽歌詩に和しているということで、この詩は女性と死別するという『源氏物語』の場面と同じ状況が描かれている。

しかし注目すべきは、この死別の表現は「雲雨」「洛雪」「巫雲」に「長絶」「罷」「空」という言葉を加えて用いての別れの描写となっていることである。先にあげた（ア）～（ウ）の三例と合わせて考えてみても「雲雨」などの言葉は「美女」を指す言葉であり、これらを故事の言葉として使っている詩人たちは、それ自体に別れの要素があるという意識で用いてはいなかったと思われる。些細なことであるが、〈高唐賦〉の「雲雨」「巫雲」といった言葉だけでは「死別」の要素を表せないという、この点は留意しておく必要があるだろう。

15 注15　二七一～二七二頁

日本における〈有所嗟〉

ここまで日本における〈高唐賦〉の故事の用例を見てきたが、ここで〈有所嗟〉の例も確認したい。次の用例には、光源氏が引いた「為雨為雲」の箇所は含まれていないが、それと対句になった「相逢相笑」に該当する部分が引用されている。

七月七日、牛女に代わりて、暁更を惜しむ、各一字を分かつ、製に応えまつる
〈探りて「程」の字を得たり〉

年不再秋夜五更　年再びは秋あらず　夜五更
料知靈配暁來情　料り知る　靈配　曉よりこのかたの情
露應別涙珠空落　露は別れの涙なるべし　珠空しく落つ
雲是殘粧髻未成　雲はこれ殘んの粧ひ　髻いまだ成らず
恐結橋思傷鵲翅　橋を結ばむことを恐りては　鵲の翅を傷らむことを思ふ
嫌催駕欲啞鷄聲　駕を催さむことを嫌ひては　鷄の聲を唖ならしめまく欲りす
相逢相失間分寸　相逢ひ相失ひて　間むこと分寸
三十六旬一水程　三十六旬　一水の程

（引用者注：〈　〉は割注部分）

（『菅家文草』巻五「七月七日、代牛女惜曉更、各分一字、應製。〈探得程字〉」[17]）

第一節で引用した「相逢相笑」とは異同があるが、『奥入』古注釈にあるものと同じ「相逢ひ相失ひて」という〈有所嗟〉の語句が用いられ、劉禹錫の作品を典拠としていることが分かる。男女の暁方の別れを織女と牽牛に成り代わって語り、逢瀬の時間の短さを惜しんでいる。新間一美氏はこの〈有所嗟〉が道真の作品に度々利用されていることを指摘している。漢詩だけでなく願文の中にも引かれていることを鑑み、「平安朝においては、女性の死に際して作られた願文に巫山の神女が登場するが、そうした表現に最も影響を与えたのは劉禹錫の詩だったのではないか[18]」と論じている。

---

17 川口久雄校注『菅家文草　菅家後集』日本古典文学大系／岩波書店／一九六六　三七七～三七八頁

18 新間一美「元白・劉白の文学と源氏物語――交友と恋の表現について」　和漢比較文学

このように、日本での例においても〈有所嗟〉からの引用が女性の死を主題としている一方、『万葉集』『懐風藻』『文華秀麗集』の例で見たように〈高唐賦〉の故事を用いた言葉そのものでは「美女」や「美女と関係を持つこと」のみが示される。元々〈高唐賦〉では、夢で出会った神女との別れよりも、彼女の美しさや雲雨となる神秘的なできごとに重きが置かれている。女性との「別れ」といっても、神女は雲や雨に姿を変えて王の元に再び現れているのであるから、〈高唐賦〉の言葉自体には「別れ」や「死別」がテーマに組み入れられている感覚はさほどなかったのであろう。これらの用例を見る限り、日本においてもその意識は引き継がれている。

四、本文再考

前節では、〈高唐賦〉〈有所嗟〉両者の日本における受容の様相を確認した。その結果、〈有所嗟〉にも用いられている〈高唐賦〉に由来する故事それ自体には「死別」の要素が含まれないという結論に至った。それを踏まえた上で、本節では『源氏物語』の原文に帰り、その意図するところを考察したい。

「為雨為雲」の訓読

光源氏が朗詠したのは「為雨為雲今不知」にあたる一節のみで、いかにも断片的に独り言を言った体であった。しかし、断片的であるとはいえ「今は知らず」まで含んでいることを見ると、単に故事成語としての「為雨為雲」ではなく、劉禹錫の男女の離別の句〈有所嗟〉を踏まえていることが分かる。更に漢籍の教養を持った紫式部のこと、元は〈高唐賦〉の故事に由来することもきちんと知って使っていると見て間違いないだろう。

しかし、改めて光源氏が詠じた一節をみると、「為雨為雲今不知」は「雨となり雲とやなりにけん、今は知らず」と過去推量の語を付加して訓読されていることに気付く。諸本での異同を確認してみても、陽明家本で「あめとやなりくもとやなりにけん」と助詞が補われるのみで、やはり過去推量の付加は共通している。これまでの注釈は、この点についての解釈をおろそかにしていたのではないかと思うのである。

会編『源氏物語と漢文学』汲古書院／一九九三

〈有所嗟〉の通りに故事成語としての用法を含めて引用しているならば、ここは「女と仲睦まじく過ごしたこと」の意であるから、「葵の上と睦まじく過ごしたのだろうか、今はもう分らない」という意味になる。しかし、葵の上との夫婦生活は自分の経験であるから、過去のことではあっても推量で語る理由はないはずである。それに、こんな判然としない夫婦生活を述べたのでは、それを聞いた中将が「ことに思きこえたまひけるなめり」などという感想を持つことはなかったであろう。

では、故事成語としての意味を含んでいないと解釈して、光源氏が詠んだこの文面のまま読むならば、どう読めるだろうか。「雨となり雲とやなりにけん、今は知らず」という言葉だけを捉えると、「雨となり、雲となってしまったのだろうか、今はもう分らない」と、死んだ葵の上が本当に雨や雲になってしまったような言い方である。光源氏の言葉に応えるように中将が詠んだ和歌を見ても、「空の浮雲をいづれの方とわきて」というように「雲が誰であるか見分ける」という発想が見て取れる。これは先に述べた「火葬の煙と雲」による和歌の表現に通じるものである。故事の言葉として読むには無理があるとすれば、本来このように読むのが自然な流れであろう。しかし、こう考えるとまた問題となるのが、雲と雨を同じように用いて良いのか、火葬の煙からの連想であればなぜ光源氏の歌では雨なのか、という点である。この「雨」については、新編全集はもう少し考える必要がある。

なぜ「けん」と過去の推量が付加されているのだろうか。その疑問を考えるにあたり、日本ではこの漢詩をどう訓読していたかの例を挙げる。以下に光源氏の古注釈類[19]で訓読が確認できたもの五例を挙げた。比較しやすいよう適宜スペースを開けてある。

奥入	……	あめとなり　くもとなり	いまはしらす
光源氏物語抄	……	あめとなり　くもとやなり	いまはしらす
一葉抄	……	為雨　雲為つて	今（は）知ず
明星抄	……	雨と為り　雲と為りて	今はしらす
紹巴抄	……	雨となり　雲となりにけん	今は知ず

こうしてみると、この中には光源氏の本文と全く同じに読んでいるものは一つもない。このように訓読に差異が生じるのは、漢文を日本語に書き下す際、意味が通っていればある程度

[19] 古注釈類の引用は、中野幸一編『源氏物語古注釈叢刊』（武蔵野書院）によった。

の自由があることによるためである。この点は現代の注釈においても同様で、先に引用した柴格朗氏による訓読でも「雨と為り　雲と為る　今知らず」というように少々異なるものとなっている。十六世紀の源氏注釈『紹巴抄』が過去推量を付しているが、かなり後世になってからのものである。藤原定家による『奥入』以降、確認できるうちのほとんどが光源氏と異なる読み方をしているのは注目すべきであろう。

これらの注釈が引いているのは典拠となっている劉禹錫の〈有所嗟〉であり、光源氏はその〈有所嗟〉の一節を口ずさんでいるはずである。時代に差異があるとはいえ、同じ〈有所嗟〉の本文を訓読しているにもかかわらずこのような不一致が生じているということは、光源氏が詠んだ一節は、やはり〈有所嗟〉の訓読としては一般的でなかったのではないだろうか。

それでは、少し視点を変えて、『源氏釈』にて伊行が提示したように〈高唐賦〉だけを典拠としているとは考えられないだろうか。〈高唐賦〉では、女性は王の夢の中に現れる神秘的な人物だが、王が夢から覚めると本当に雲がたなびいていたことになっている。しかしそうすると、今度は光源氏の言葉が〈有所嗟〉に一致しすぎていることが疑問となってくる。「今不知」に当たる言葉まで四句目の全部を光源氏は詠んでいるのだと考える方が明らかに自然である。むしろこれは、漢籍を知っている読者に〈高唐賦〉ではなく〈有所嗟〉の引用であると読み取らせるために「今は知らず」まで詠んでいる、という作者紫式部による意図が働いているように思えるのである。それに第三節で見たように、〈高唐賦〉だけでは「別れ」の表現としては弱い。この後の場面に続いて登場する「霜枯れの前栽」や「草枯れ」といったものも、劉禹錫に唱和した白居易の詩にある「西風北雪殺南花」から発想を得ているのではないかとの新間氏[20]の主張もある。〈有所嗟〉を無視して良いとはどうしても考えられない。

そこで、漢籍から距離を置いて「死んだ人物が雨や雲になる」ということを考えてみると、まず思い起こされるのは「火葬の煙が空に昇って雲になる」という発想である。この類の表現は和歌によく見られ、第一節で参照したように、葵の上の葬送の折に光源氏が詠んだ「のぼりぬる煙はそれと分かねどもなべて雲居のあはれなるかな」（2「葵」四七〜四八頁）の歌がまさしくそれであり、「夕顔」の巻にも見られる。

[20] 注18に同じ。

空のうち曇りて、風冷やかなるに、いといたくながめたまひて、

見し人の煙を雲となが むれば夕の空もむつましきかな

と、独りごちたまへど、えさし答へも聞こえず。かやうにておはせましかばと思ふにも胸ふたがりておぼゆ。耳かしがましかりし砧の音を思し出づるさへ恋しくて、「正に長き夜」とうち誦じて臥したまへり。

（1「夕顔」一八九頁）

夕顔の死後、彼女の侍女であった右近から謎の多かった夕顔の素性を聞き、光源氏が詠んだのだが、ここでもやはり空の様子、風の冷たさなど、周囲の自然や環境に触発されて詠んでいる。

そして「雨」の表現は、第一節にて日本古典文学大系が言及していたように、本来和歌や和文の世界では、次の二例のように涙になぞらえる表現となりうる。

「聞こえさせてもかひなきもの懲りにこそ、むげにくづほれにけれ。身のみものうきほどに、

あひ見ずてしのぶるころの涙をもなべての空の時雨とや見る

心の通ふならば、いかにながめの空ももの忘れしはべらむ」など、こまやかになりにけり。

（2「賢木」一二八頁）

喪に侍りける人を、弔問にまかりて、よめる　忠岑

墨染のきみが袂は雲なれやたえず涙の雨とのみふる

（『古今和歌集』巻十六　哀傷　八四三[21]）

「葵」の哀傷の場面では、時雨が降っていることが冒頭で語られている。漢詩が故事を踏まえたものであることを無視して読めば、光源氏が「雨となり雲とやなりにけん」とひとりごちたのは、雨と雲を見て亡き妻の火葬の煙を連想し、「あなたは煙から雲になってしまっ

[21] 小島憲之、新井栄蔵校注『古今和歌集』新日本古典文学大系／岩波書店／一九八九　二五三頁

たのだろうか」と、煙を雲に寄せた和歌のような表現をしたのだと見えるだろう。現に数頁前には葵の上の火葬の煙を見て「のぼりぬる…」と空の様子を詠んでいる。その記憶が新しい読者たちはここでも自然とこの連想に至るのではないかと考えられるのである。

まとめると、光源氏が朗詠している「雨となり雲とやなりにけん」の言葉は〈有所嗟〉の訓読として一般的ではなかったと思われるが、その高い一致度により〈有所嗟〉を引いているということを読者に伝えている。同時に、時雨から火葬の煙と雲の関連を読者に想起させ、和歌的な雨と雲の哀傷表現を内包させているものでもある。そのために、紫式部はこの一節の訓読を敢えて「なりにけん」としたのではないだろうか。

本文再考：時雨の日の哀傷

しかし、和歌の世界だけでは説明できないのが光源氏の歌である。「見し人の雨となりにし」という言葉は、〈高唐賦〉の故事を踏まえなければ説明がつかない。その点を含めて、改めて本文を解釈する。

時雨の降る夕方、三位中将がやってくる。光源氏は西の高欄にもたれ、霜枯れした前栽を見ていた。風が荒々しく吹き時雨がさっと降ると、光源氏は自然に涙腺が緩み、その雨にちなんで劉禹錫の〈有所嗟〉を口ずさむ。その一節を引きつつも、訓読に少し手を加えて、雲と雨を用いた哀傷歌的な要素も入れた。その物憂げな様子を見て中将は、「女であったなら、光源氏を見捨てて亡くなった魂は必ずこの世に留まってしまうだろう」と感じる。劉禹錫の詩では、死んだ女の魂はオシドリの片割れになって漢陽にいるのだった。そこで中将も、光源氏の口ずさむのに答えるように、〈高唐賦〉や〈有所嗟〉、和歌の表現を踏まえた歌を詠む。

「雨となって時雨れる空の浮雲を、どれを故人と見分けて眺めようか」――〈高唐賦〉の神女は朝の雲、暮れの雨となった。劉禹錫の愛人・鄂姫は一羽だけのオシドリとなった。では葵の上はどこへ行ったのか――中将がそう独り言のように言うと、今度は光源氏が歌を返す。「契り合った人が雨となった空までもたいそう時雨れてかきくらす今日この頃」――その様子を見た中将は、長年不和を抱えていたように見えた彼らの夫婦生活について、正妻として、落ち着いて思慮を持った女性として、特別に思ってくれていたのだ、と感じ取った。同時に葵の上の死を儚み、左大臣家と光源氏の関係が希薄になってしまうことを嘆くのである。

なぜ中将がそう感じたのか。〈高唐賦〉や〈有所嗟〉を振り返ってみると、暮れ方の雨は

神女が姿を変えたものであり、「為雨為雲」とは男女の深い契りのことである。光源氏は「見し人の雨となりにし」と、葵の上が神女と同じように雨になったことを歌の中で示唆した。ここは「雨」でなければならないのである。なぜなら、その歌は暮れ方の時雨を見ながら詠まれており、神女が暮れ方に変じる姿は雨だからである。それと重ねるように、葵の上も煙から雲に、雲から雨になって光源氏の元に降っている構図が浮かんでくるのである。であるから、雨を涙と重ねる表現は和歌にはしばしば見られるものであるが、ここでは涙の比喩というよりは、漢詩の典拠を踏まえた表現と見ておくべきであろう。

こうしたやりとりと光源氏の歌によって中将はその構図に気付き、傷心に沈んだ光源氏の面持ちから、光源氏の葵の上への愛情に気づいたと読むべきではないだろうか。

「自嘲」の例

果たしてこうした漢詩文の意図的な改変は起きうるのだろうか。和歌の場合には、有名な例が『枕草子』「清涼殿の丑寅の隅の」の段にある。

春の歌、花の心など、さいふも、上臈二つ三つばかり書きて、「これに」とあるに、

年経ればよはひは老いぬしかはあれど花をし見れば物思ひもなし

といふことを、「君をし見れば」と書きなしたる、御覧じくらべて、「ただこの心どものゆかしかりつるぞ」と仰せらるるついでに、「円融院の御時に、『草子に歌一つ書け』と殿上人に仰せられければ、いみじう書きにくう、すまひ申す人々ありけるに、『さらにただ手のあしさよき、歌の、をりにあはざらむも知らじ』と仰せらるれば、わびてみな書きける中に、ただいまの関白殿、三位中将と聞えけるとき、

しほの満ついつもの浦のいつもいつも君をば深く思ふはやわが

といふ歌の、末を、『たのむはやわが』と書きたまへりけるをなむ、いみじうめでさせたまひける」など仰せらるるにも、すずろに汗あゆる心地ぞする。

（『枕草子』五一～五二頁[22]）

清少納言が『古今和歌集』春上、藤原良房の「年経れば…」の歌を改変し、その機微を定

22 松尾聰、永井和子校注『枕草子』新編日本古典文学全集／小学館／一九九七

子が褒めた。定子は、昔父の道隆が「しほの満つ…」という歌を改変して詠み、それが円融院に褒められたのだということを語った、という章段である。このように、既にある和歌を場に合わせて改変するといった例は多くある。そもそも「本歌取り」という技法自体がそれに類するものであろう。

それでは、漢詩文の場合はどうだろうか。「葵」の巻のように訓読を変化させるものではないが、『源氏物語』の中にはもう一か所、漢籍の典拠がある文を意図的に操作していると思わせる部分がある。

大将などの児生ひほのかに思し出づるには似たまはず。女御の御宮たち、はた、父帝の御方ざまに、王気づきて気高うことおはしませ、ことにすぐれてめでたうしもおはせず。この君、いとあてなるに添へて愛敬づき、まみのかをりて、笑がちなるなどをいとあはれと見たまふ。（中略）宮は、さしも思しわかず、人、はた、さらに知らぬことなれば、ただ一ところの御心の中にのみぞ、あはれ、はかなかりける人の契りかなと見たまふに、おほかたの世の定めなさも思しつづけられて、涙のほろほろとこぼれぬるを、今日は事忌すべき日をとおし拭ひ隠したまふ。「静かに思ひて嗟くに堪へたり」とうち誦じたまふ。五十八を十とり棄てたる御齢なれど、末になりたる心地したまひて、いとものあはれに思さる。「汝が爺に」とも、諫めまほしう思しけむかし。

（4「柏木」三二三〜三二四頁）

「柏木」の巻、薫の五十日餅の場面、光源氏は薫の顔を見て様々なことを思う。夕霧とは似ていない。明石の姫君腹の宮々は皇族らしく気高くはあるが、特にすばらしい様子ではない。しかしこの子は高貴さに加えて愛らしさもある。出家した女三宮や女房たちが周りにいる中で、光源氏は一人心中で思う。その中で静かに白詩の一節を口ずさむ。「静かに思ひて嗟くに堪へたり」と「汝が爺に」はともに「自嘲」という題で知られている律詩の一節で、五十八にして初めて男児をもうけた白居易が詠んだものである。この「自嘲」は同時に詠まれた二つの詩のうちの二首目で、一首目は「相賀」とされ、同時期に同様に子供をもうけた元稹と喜びあうものである。

自嘲　自ら嘲る

五十八翁方有後　五十八翁　方に後有り、

静思堪喜亦堪嗟　　静かに思へば　喜ぶに堪へ　亦嗟くに堪ふ。
一珠甚小還慙蚌　　一珠　甚だ小さくとも　還ほ蚌に慙ぢ、
八子雖多不羨鴉　　八子多しと雖も鴉を羨まず
秋月晩生丹桂実　　秋月　晩くに生ず　丹桂の実、
春風新長紫蘭芽　　春風　新たに長ぜしむ　紫蘭の芽。
持盃祝願無他語　　盃を持ちて祝願するに他語無し、
慎勿頑愚似汝爺　　慎んで頑愚なること汝が爺に似る勿かれ。

（『白氏文集』巻第五十八　二八二一[23]）

五十八歳にして初めての男児を得た白居易の喜びに溢れている詩である。しかしその一方で遅すぎたとでも思ったのだろうか、自分の頑愚に似てはいけないと息子に語りかける。「汝が爺に」とは、薫にとっての実父柏木を指している。「柏木に似てはいけない」と光源氏は思ったのだろうか、と語り手も推測している。

この典拠を見て気付くのは「堪喜」が光源氏の朗詠では省略されていることである。この点については『湖月抄増注』[24]に師説として「よろこぶにたへたりといふをば略して、なげくにたへたりと云へるは、源氏の御心にかをるの生れ給へるを、なげかしくのみおぼす故也」との言及がある。光源氏は薫の出生を「喜」んでいないから「堪喜」を省略して「堪嗟」だけを光源氏に朗詠させたというのである。この説の通りならば、ここでも作者の操作によって漢詩の一部に手が加えられている。漢籍に精通した紫式部は、それを和文に取り入れる際に様々な工夫を設け、元々の漢籍の表現を残しつつ自らの望む和文の表現に活かしていたのではないだろうか。

おわりに

本章では、典拠となっている〈有所嗟〉の該当部分が、〈高唐賦〉に由来する「美女の形容」や「男女の契り」を指した言葉であることを漢籍の例を用いて確認した。続いて、日本

---

23 岡村繁著『白氏文集　十』新釈漢文大系／明治書院／二〇一四　一四〇～一四一頁
24 北村季吟原注・猪熊夏樹補註・有川武彦校訂『増注源氏物語湖月抄　中巻』弘文社／一九二七　九八〇頁

の例を用いて、〈有所嗟〉自体が女性との死別をテーマとした作品であり、〈高唐賦〉による故事成語のみでは「別れ」のニュアンスを語れないことを確認した。また、漢詩文による引用と和歌的な哀傷表現を重ね合わせるため、紫式部が典拠となっている漢詩の訓読を工夫しているのではないかと考察した。最後に、それらを踏まえた上で、この場面の二人のやり取りを再考し、改めて読解を加えた。

今回取り上げた場面の光源氏の言葉からは、光源氏が葵の上を妻として愛していたこと、またそれ故に葵の上の死に深く悲しんでいる様子が読み取れる。それらは故事を含んだ漢詩と和歌的な表現に寄せて語られ、中将の眼差しを通して読者はそれを知ることとなる。この後、物語の焦点は光源氏と葵の上から光源氏と紫の上に移る。長編『源氏物語』を見る時、葵の上は息子・夕霧を生んで死去し、正妻の座を空けることにその役割があるといわれてきた。物語からは早々と退場してしまい、光源氏の四季の御殿・六条院に住むことの叶わなかった葵の上であるが、今回の場面を詳しく読み解いていくと、夫光源氏から、心からの愛情がこもった哀傷がなされていたことが浮かび上がるのである。

第六章　巻二十六「楚王の夢」における雲と雨の哀傷

はじめに

前章にて、『源氏物語』「葵」の巻での哀傷表現について考察した。本章で取り上げたいのは、その「葵」の巻からの影響が指摘されている『栄花物語』巻二十六「楚王の夢」の一場面である。道長の娘であり当代の東宮妃である嬉子が、東宮の御子を出産した後、物の怪に襲われて死去する。その後の葬送から人々の嘆きといった嬉子の死去をめぐる一連のできごとで、この巻は構成されている。

『栄花物語』は史実の時間軸に大筋は沿いながら、物語のような叙述でもってできごとを語るが、その叙述、構成、内容が『源氏物語』の影響を多分に受けているということは、これまでの研究史において多くの先人たちによって明らかにされ、また本論文の中でも述べてきたことである。そして、この葬送の場面では、『源氏物語』「葵」巻の、葵の上の出産から死去、光源氏と三位中将（頭中将として知られる人物）による哀傷の場面からの影響、類似性があることは、早くは山中裕氏[1]、また加藤静子氏[2]によってすでに指摘されている。

ところで、そのような『源氏物語』からの影響が注目される傍ら、この巻には、史実との間に小さな齟齬が存在している。嬉子の死後、火葬のために嬉子の遺体を移す夜に、史実にはないはずの雨が『栄花物語』では降っているのである。その齟齬の存在は知られてはいたものの、天候という間違いの起きやすい事柄であり、史実が大きく改変されたというほどのものでもない。知られてはいるが、些末な謎だったために、詳しく検討されることもなかったのである。

しかしいま一度、『源氏物語』からの影響関係を踏まえてこの些末な謎を考えてみたいと思う。すなわち、『源氏物語』で描かれた物語内容と、その『源氏物語』が典拠としている

---

[1] 山中裕『歴史物語成立序説』第二章第五節「栄花物語における源氏物語の影響」東京大学出版会／一九六二　＊初稿「国語と国文学」三〇・七／一九五三

[2] 加藤静子「『栄花物語』――源氏物語の影」「解釈と鑑賞」五四・三／一九八九

漢詩、和歌的な哀傷表現、それらを用いて『栄花物語』の内容を分析し、「歴史物語」の中に現れた小さな史実との不一致に意味を与えてみたい。

一、「楚王の夢」における「葵」の影響

先行研究

「楚王の夢」は前述の通り、当代の東宮妃である嬉子の出産から死去、その葬送を描いた巻であるが、先行研究によって『源氏物語』との類似が指摘されるのは、その葬送の場面である。この場面は、『源氏物語』「葵」巻の、葵の上の葬送と多くの類似点があり、その関係については、山中裕氏によってまず指摘され、加藤静子氏によって詳しい考察がなされている。山中氏[3]は、『源氏物語』からの影響を受けていると見られる部分の一覧を掲げた。その中にこの「楚王の夢」も明記されているが、それ以上の詳しい考察はなされていなかった。

次に加藤氏は、嬉子の死をめぐる一連の場面の構成を「父道長の視線」「嬉子女房たち」「赤き雲に尚侍嬉子の姿を重ねる」こと、そして「母倫子の視線」に注目してまとめている。

> このような手順で書き記すのは作者なのだが、この運びの根底に葵の巻があった。そもそも、男子を出産しめでたさの中で死去―夫の悲しみ、両親の惑乱、嘆き―蘇生を祈って手段をつくし遺体が変わるまで待つ―など、すべてが葵の巻の構図と同じ情況だ。だが、ここまでの運びは微に入る栄花独自の記述であった。[4]

指摘があった「父」「女房」「雲」「母」といった要素は、「根底に葵の巻があった」と言われるように、『源氏物語』にも見られる。しかし、語彙や表現のレベルではどこまでの一致が見られるだろうか。同論は『栄花物語』本文のみを提示し、『源氏物語』との語彙や表現のレベルでの細部にわたる両者の比較が少ないため、「栄花独自の記述」と言うには、もう少し詳細な分析が必要であろう。そこで、本章では、二作品の本文を引用しつつ、対応する点に傍線と記号を付し、具体的な対応関係を確認する。

---

[3] 注1に同じ。
[4] 注2に同じ。

また、加藤氏は同論にて、「楚王の夢」という巻名の言葉が見える東宮周辺の記述について、「光源氏が葵の上亡きあと時雨を眺めながら物思う場面の詩の引用と同様」であること、つまり同じ典拠を持っていることを指摘し、同場面について次のように評する。

> この場面の影響下に、栄花の楚王の夢のくだりはつくられたと思う。現実世界よりも源語の世界がリアルであったのではないか。懸命に場面をつないで春宮の心情に、光源氏の心情を重ねあわせたのは、栄花にとっては快挙の部に属そう。十分な史料をもとにしつつ、史実をそこなわずに、親しんでいる源語を利用できた例なのであろう。

加えて、加藤氏は別の論[5]にて、東宮の心中を傍らの人物が和歌にして詠じたことについて、「巻の主題性と深く関わりあって、場面形成に大きく関与した例」であり「散文部分を集約させ、三つの異なる空間を和歌で自然に一つのものにしている」と分析している。三つの空間とは、火葬まで付き従った元嬉子付きの女房たち、居所にて葬送に思いをはせる嬉子の母倫子、そしてこれも葬列には加われない嬉子の夫東宮である。

嬉子の葬送と哀傷

『栄花物語』と『源氏物語』との影響関係を確認するため、加藤氏の指摘した要素、またその他にも類似性があると思われる要素に注目しつつ、まずは『栄花物語』の本文を概観する。『栄花物語』中の各要素には、小文字のアルファベットで記号を付し、対応する『源氏物語』中の要素には大文字で付した。

> 雨降りて、日ごろむつかしげなりつるに、夜より雨こまやかに降りて、いくその人々、しほどけからんはさるものにて、殿をはじめたてまつりて、いかでか歩ませたまはんずらんと、世の中の蓑、笠など、数をつくし騒ぐに、申の時ばかりに、雨やみ空晴れて、風うち吹き、道などもただ乾きに乾くに、いとめでたし。これにつけても殿の御ありきは、昔も今も、なほいと古りがたきことに申し思へり。

---

[5] 加藤静子「『栄花物語』無名者和歌の表現性」『王朝歴史物語の方法と享受』竹林舎／二〇一一　＊初稿「国文学論考」四七／二〇一一

（2：五二二頁）

嬉子の死後、もがりを経ていよいよ葬送の当日のこと。日頃から秋雨が続き、その日も夜から雨が降っていた。そのため、これから葬送に出掛ける参列者たちのために蓑を笠をと難儀していたところ、はたと空が晴れ、道も乾いて葬送の道行が楽になった。何とも不思議な偶然、と読者には印象深い。草子地は道長が出かける際は昔も今も変わらずすばらしいと称える。

この後、引用は省略するが葬送に向かう人々の様子が描かれる。遺体が安置されていた法興院から火葬場である岩蔭まで、貴族や女房、比叡や奈良の僧たちが大勢付き従う葬列を見て、世の人々はその豪勢さに感嘆した。ここ一年ほどの間に、娍子、寛子、嬉子と、三人も死者が出た天変を思い、もうこれ以上の天変などあるまいと感じるのである。そして一行は岩蔭の地を訪れる。

おはしまし着きぬれば、殿に年ごろ使はせたまひて、睦ましう思しめさるるままに、今の信濃守保資、大炊頭為職、備後前司公則など、すべてただかやうの人をぞ、よろづにさしあづけさせたまへれば、げに火水に入りて仕うまつれど、さすがにしも知らざりけることにて、夜ふけ、鶏も鳴きぬ。(月a)あさましう月の明くめでたきに、そこらの人々参りこみたるに、(父a)殿の御声のあはれに悲しきにぞ、ここらの人もえ忍びあへざりける。(煙a)煙にて上がらせたまふにも、やがて靡きて、(雲a)いづれの雲とも御覧じわくべくもあらぬにも、(父b)御胸ふたがりて、さだかにも御覧ぜられず。

（2：五二四～五二五頁）

この日は折しも八月十五夜で、たびたび月が明るい**（月a）**という描写が見える。いよいよ道長たちが嬉子の遺体を荼毘に付す時になり、道長が悲しみゆえに泣き惑う様子**（父a・b）**が所々に描かれ、立ち上る火葬の煙**（煙a）**を見て、どの雲とも**（雲a）**見分けがつかないと胸を詰まらせるのであった。この「いづれの雲とも御覧じわくべくも…」という表現は、管見の限り従来指摘されていないが、「葵」の巻での三位中将の歌「雨となりしぐるる空の浮雲をいづれの方とわきてながめむ」の引歌であると思われる。

続いて、同時刻に別の火葬の煙が見えたという記事が挿まれるが、視点は葬送に出向いている一行から変わっていない。偶然にも嬉子に仕えていた小左衛門という女房が、船岡にて

茶毘に付されていたのである。更に命日まで同じということで、たいそう忠義ものであると人々の心を打った。

人々あはれなりけるよしを言ひ思へるに、女房車もたしかに問ひきて、いみじうあはれに見やる。高き短きこよなき御有様にこそ、同じういふべからねど、（煙b）事のさま煙にて上るほどは見え分かぬわざになんありける。殿ばらなどのあはれがりのたまはするを、殿の御前にほの聞しめして、「あはれ、とふべかりけることにこそありけれ。物などをやるべかりけるものを。人よりもあはれと思したりしかば、同じ所にや参らん」と思しめすも悲しうて、泣く泣く御覧じければ、火のいとほのかにて、人なども多くも見えず、有様のあはれに心すごげなり。かへすがへすもあはれがらせたまひて、「法事にだにかならず物遣はさん」と思しめしけり。女房車かへすがへすあはれに見やる。今宵の月はめでたきものといひ置きたれど、まことに明きはいとありがたうのみありけるに、（月b）今宵の月ぞ、まことにかぐや姫の空に上りけんその夜の月かくやと見えたる。風さへ涼しく吹きたるに、ときどきこの御あたり近う、（雲b）赤雲の立ち出づるは、わが君の御有様と見ゆるに、詮方なく悲しかりける。

（2：五二六頁）

こちらも船岡の辺りで火葬されており、煙が上っていた**（煙b）**。生前の貴賤に関わらず、死んで煙になる時は見分けなどつかないのだと草子地で述べている点は無常観を思わせる。再び月が明るいとの記述があり、それに加えてかぐや姫が昇天した夜の月はこのようであったろう**（月b）**との描写がなされる。更に、煙ではなく雲、しかも赤い雲が出ている**（雲b）**と、色まで詳しく述べられる。『栄花物語全注釈』は「赤い色をした雲。出たばかりの月光に生えて雲が赤く見えるのであろう[6]」とし、新編全集の頭注もそれを引いている。しかし、先に挙げた部分では夜が更け、鶏が鳴いたという描写があった。更にこの日は十五夜であるから、月が出たばかりというのは疑問である。

（母a）上の御前は、御格子を下さで、やがて端におはしまして、「かの岩蔭はいづ方ぞ」など、人に問はせたまひて、そなたざまにながめさせたまふに、（雲c）赤き雲の見ゆれば、

6 松村博司『栄花物語全注釈　五』角川書店／一九七五　二五〇頁

まづそれならんかしと、御衣の袖のみならず、御身さへ流れさせたまふ。

（2：五二六〜五二七頁）

所変わって法成寺の御堂にいる倫子は、格子も下ろさずにその岩陰の方向を見て、赤い雲を発見する。道長と同様、倫子の側でも赤い雲（**雲ｃ**）を眺めており、あれは嬉子の姿だろうと涙を溢れさせる。

そして、場面は嬉子の夫であった東宮へと移る。

東宮は、今宵と聞しめしたることなれば、つゆまどろませたまはず、かの昔の楚王の夢を思し合せられて、あさましく思しまどはせたまふ。「かやうにてや」とぞ、人申しいはせける、

「（歌ａ）ほどもなく雲となりぬる君なれば昔の夢の心地こそすれ

かへすがへす」と言へど、なほ思しかけさせたまはざりつる御有様のみ心憂くて。夜も明けぬれば、殿の御前には木幡へと思しめせど、「さまではいかでか」など、人々聞えさすれば、木幡へは別当僧都、播磨守泰通、すべてさるべき人々ぞ参りける。

（2：五二七頁）

東宮は自分の御所にいるのか、葬儀が「今宵」であると聞いていたので寝ずに思いを馳せていたことが語られる。そんな東宮の様子を見ていた傍らの従者の誰かが申し上げたのだろう、東宮の心中を想像するという形で詠歌する。後に詳述するが、この巻名の由来となった「かの昔の楚王の夢」は『文選』に所収されている詩賦〈高唐賦〉を典拠とする言葉であり、詠まれた歌もそれを踏まえてのもの（**歌ａ**）である。

嬉子の葬送の夜はかくして、父母でも夫でもなく、無名の第三者による歌で締めくくられて明ける。しかしその歌に関わる視覚情報である「雲」は、東宮については見ていたという明言がない。直前の倫子の記述と同様の状況を想像すれば良いということかと思われるが、東宮の目で「雲」や「煙」を見たという描写がなく、歌も東宮自身が詠んだのではないという点は少し気になるところである。

葵の上の葬送と哀傷

次に、その『栄花物語』に影響を与えたと思われる『源氏物語』の「葵」の巻の記述を確認する。まずは『栄花物語』と同じく葬送の場面である。葵の上の死去は突然であった。直前の夕霧出産の折にも現れた物の怪のしわざではないかと疑われ、数日は祈禱なども行っていたが、遺体の様子が変わり、鳥辺野にて葬送となったのである。

（父A）大臣はえ立ち上がりたまはず。「かかる齢の末に、若く盛りの子に後れたてまつりてもごよふこと」と恥ぢ泣きたまふを、ここらの人悲しう見たてまつる。夜もすがらいみじうののしりつる儀式なれど、いともはかなき御骸骨ばかりを御なごりにて、暁深く帰りたまふ。常のことなれど、人ひとりか、あまたしも見たまはぬことなればにや、たぐひなく思し焦がれたり。（月A）八月廿余日の有明なれば、空のけしきもあはれ少なからぬに、（父B）大臣の闇にくれまどひたまへるさまを見たまふもことわりにいみじければ、空のみながめられたまひて、

（煙A）（歌A）のぼりぬる煙はそれと分かねどもなべて雲居のあはれなるかな

（2「葵」四七～四八頁）

愛娘の死を悲嘆する左大臣（**父A・B**）が描かれ、葬儀の様子を経て朝が近付く。『栄花物語』では八月十五夜の満月であった空は、『源氏物語』では同じ八月の有明月の頃（**月A**）である。火葬の煙が上っていった先の空を眺めると、必然的に月にも注目されるのであろう。光源氏は空を眺め、空へ上った煙（**煙A**）はどの雲とも見分けられない、と景色に基づいた歌（**歌A**）を詠む。ここではおそらく煙と混ざった「雲」の要素も含まれてはいるのだが、語彙のレベルでは登場しない。

この後、左大臣邸に戻った光源氏の服喪の様子や、葵の上との悶着を抱えていた六条御息所とのやり取りが描かれ、服喪の日々が過ぎてゆく。その中でわずかではあるが、葵の上の母、大宮についての記述がある。

（母A）宮は沈み入りて、そのままに起き上がりたまはず、危げに見えたまふを、また思し騒ぎて御祈禱などせさせたまふ。

（2「葵」四九頁）

『栄花物語』での倫子は「御衣の袖のみならず、御身さへ流れさせたまふ」というように

泣きつつ岩陰の方を眺めていたが、大宮は傷心のあまり命が危ぶまれているほどである。

そして四十九日の法事も済んだころに、問題の場面が描かれる。三位中将――「頭中将」として知られる葵の上のきょうだいが光源氏の元を訪れた時のことである。

時雨うちして、ものあはれなる暮つ方、中将の君、鈍色の直衣、指貫うすらかに更衣して、いとををしうあざやかに心恥づかしきさまして参りたまへり。君は、西のつまの高欄におしかかりて、霜枯れの前栽見たまふほどなりけり。風荒らかに吹き時雨さとしたるほど、涙もあらそふ心地して、「雨となり雲とやなりにけん、今は知らず」とうち独りごちて、頬杖つきたまへる御さま、女にては見捨てて亡くならむ魂かならずとまりなむかしと、色めかしき心地にうちまもられつつ、近うついゐたまへれば、しどけなくうち乱れたまへるさまながら、紐ばかりをさしなほしたまふ。これは、いますこし濃やかなる夏の御直衣に、紅の艶やかなるひきかさねてやつれたまへるしも、見ても飽かぬ心地ぞする。中将も、いとあはれなるまみにながめたまへり。

「（歌B）雨となりしぐるる（雲A）空の浮雲をいづれの方とわきてながめむ
行く方なしや」と独り言のやうなるを、

（歌C）見し人の雨となりにし雲居さへいとど時雨にかきくらすころ

とのたまふ御気色も浅からぬほどしるく見ゆれば、あやしう、年ごろはいとしもあらぬ御心ざしを、院などゐたちてのたまはせ、大臣の御もてなしも心苦しう、大宮の御方ざまにもて離るまじきなど、かたがたにさしあひたれば、えしもふり棄てたまはで、ものうげなる御気色ながらあり経たまふなめりかしといとほしう見ゆるをりをりありつるを、まことにやむごとなく重き方はことに思きこえたまひけるなめり、と見知るに、いよいよ口惜しうおぼゆ。

（2「葵」五五～五六頁）

夕暮れ時に折しも時雨が降り、光源氏が「雨となり…」と劉禹錫の漢詩の一節を口遊んだ。それを聞いて中将が独り言のように歌を詠む（**歌B**）。すると光源氏がそこに唱和する（**歌C**）。中将はその光源氏の姿に感じ入り、葵の上の薄命を嘆いたのであった。

ここで『源氏物語』に見える「雲となり雨とやなりにけん」という表現について確認しておく。光源氏が詠じた詩は〈有所嗟〉と題された詩の一節で、作者・劉禹錫の時代にはすでに故事となっていた〈高唐賦〉を踏まえて作られたものである。その〈高唐賦〉は『文選』

所収の宋玉による詩賦で、故事となっている部分は主に以下のような内容である。

楚の懐王が夢の中で神女に出会った。逢瀬を交わしたのち、別れ際に「旦爲朝雲、暮爲行雨、朝朝暮暮、陽臺之下――私は朝には雲となり、夕暮れには雨となって、朝夕この楼台の下に参じます」と神女から伝えられる。懐王が目を覚ました朝、果たして神女の言の通りに雲が出ていた。

こうした内容から、「朝雲暮雨」「雲雨巫山」「雲となり雨となる」といった語が生まれた。これらは男女の仲睦まじい様子、男女の逢瀬、または神女のような美しい女性を指すこともある語である。この故事は日本においても早くから漢詩文に取り入れられ、先に拙稿[7]及び第五章でも述べたように、最古の漢詩集『懐風藻』の「詠美人」と題した詩に「巫山行雨下」という例があり、『万葉集』にも「乍臥巫峡以空望烟霞（あるときには巫峡に臥して空しく煙霞を望む）」という一文が見える。物語では『源氏物語』、今回取り上げる『栄花物語』、『松浦宮物語』などにこの故事が見える。

一方の〈有所嗟〉は、元々は劉禹錫と白居易の唱和詩である。劉禹錫の愛人の死に際して詠まれた作品で、その中に光源氏が詠じた一節「為雨為雲今不知」がある。また、〈有所嗟〉は〈高唐賦〉を踏まえて作られていると先に述べたが、この「為雨為雲」がそれにあたる部分で、前述した「朝雲暮雨」などと同義の語である。

二者の対照

さて、これまで見た『源氏物語』と『栄花物語』とを対応させてみると、**〈表1〉**のような関係が見える。主な対照点として、「父」「月」「煙」「雲」「母」「歌」を挙げた。それぞれについて二作品を簡単に比較してみる。大まかに主題である『栄花物語』側の登場順に並べているが、「雲」の要素については登場頻度が高いため、色を変えている。

---

[7] 拙稿「『源氏物語』葵の巻における雲と雨の哀傷」「語文研究」一一七／二〇一四

表1　『源氏物語』『栄花物語』の対照

	『源氏物語』葵	『栄花物語』楚王の夢
父	(父A) 大臣はえ立ち上がりたまはず。「かかる齢の末に、若く盛りの子に後れたてまつりてもご よふこと」と恥ぢ泣きたまふ (父B) 大臣の闇にくれまどひたまへる	(父a) 殿の御声のあはれに悲しきに (父b) 御胸ふたがりて、さだかにも 御覧ぜられず
月	(月A) 八月廿余日の有明なれば、空のけしきもあはれ少なからぬ	(月a) あさましう月の明くめでたきに (月b) 今宵の月ぞ、まことにかぐや姫の空に上りけんその夜の月 かくやと見えたる
煙	(煙A) のぼりぬる煙はそれと分かねどもなべて雲居のあはれなるかな	(煙a) 煙にて上がらせたまふにも、やがて靡きて、いづれの雲とも御覧じわくべくもあらぬ
母	(母A) 宮は沈み入りて、そのままに起き上がりたまはず、危げに見えたまふを、また思し騒ぎて御祈禱などせさせたまふ。	(母a) 上の御前は、御格子を下さで、やがて端におはしまして「かの岩蔭はいづ方ぞ」など、人に問はせたまひて、そなたざまにながめさせたまふに
歌	(歌A) のぼりぬる煙はそれと分かねどもなべて雲居のあはれなるかな (歌B) 雨となりしぐるる空の浮雲をいづれの方とわきてながめむ (歌C) 見し人の雨となりにし雲居さへいとど時雨にかきくらすころ	(歌a) ほどもなく雲となりぬる君なれば昔の夢の心地こそすれ
雲	(雲A) 空の浮雲をいづれの方とわきてながめむ	(雲a) いづれの雲とも御覧じわくべくもあらぬにも (雲b) 赤雲の立ち出づるは、わが君の御有様と見ゆるに (雲c) 赤き雲の見ゆれば、まづそれならんかしと

まずは二人の女君の「父」の描写を見てみる。葬送の場面で人々の嘆きが描かれるのは当然であるが、この二作品では娘を亡くした「父」の様子が大きく取り上げられる。二人の父親は物語の重要人物と言って良い。注目されるのは当然のことであろう。どちらも「闇にくれまどひたまへる」「さだかにも御覧ぜられず」と涙に目が曇り、惑う様子が描かれる。

「月」の描写は直接葬送に影響を及ぼしているものではなく、「廿余日」と満月でまったく同一の情景でもない。火葬の煙を見送って空を見上げる際に、どちらも月が空に残っている日付であったことによるものであろう。

次の「煙」の表現は、葬送の場面には欠かせない要素の一つであり、両作品とも、火葬の煙が雲にまぎれてしまったことを語る。視点は道長と光源氏で、一方は父、一方は母と夫というようにやや異なるが、嬉子の夫東宮は宮中から離れられないため、この形になったのであろう。この雲と煙を重ねる表現に類似するものは『源氏物語』では「夕顔」巻でも和歌に用いられている。しかし『古今集』『後撰集』『拾遺集』といった『栄花物語』以前の勅撰集中の哀傷歌にはあまり見当たらない。『栄花物語』の当時は、まだよくあるというほどの表現ではなかったのかもしれない。

ここまでの三つは両作品とも葬送の当日に見られる要素である。次の「雲」「母」「歌」は、『栄花物語』では同じ葬送の日に述べられているものだが、『源氏物語』では**（歌A）**を除いて葬送からしばらく経ち、四十九日が過ぎた後の場面に見える要素である。

「雲」は『源氏物語』においてはこの「雲となった」という語に典拠である漢詩文を踏まえた意味と、火葬の煙となったという意味の両方が含まれている。『栄花物語』では「楚王の夢」という語から、こちらも同様にこの二者を踏まえたものであるのが明らかであると言えよう。しかし、『源氏物語』でのこの「雲」という語は、この語が現れる高欄での哀傷の場面において、典拠を表す中心的な要素であると思われるにも関わらず、取り上げた「歌」以外の要素のうち、唯一地の文に現れず、歌の中で一回だけ用いられる語である。そういった点においても、これらの要素の中でやや特殊であると言える。一方『栄花物語』では**（雲a・b・c）**として挙げている通り、頻繁に言及されている。

「母」の描写に関しては、加藤氏の指摘に含まれてはいるが、その内容にはあまり類似点がない。どちらも娘の死を受けて意気消沈する様子ではあるのだが、倫子が岩陰の方角を眺めて涙しているのに対し、大宮の場合は寝込んでしまい、こちらも死んでしまいかねないほどのショックである。「母」の要素については、言及があるというレベルの一致といえよう。

最後に「歌」であるが、**（歌B・C・a）**は〈高唐賦〉か〈有所嗟〉、もしくはその両方を踏まえており、それを用いて男による女への哀傷を歌うという共通点がある。両者ともそれぞれの場面の山場となる和歌であるといえる。**（歌A）**がこれらの漢詩を踏まえているかについては今回踏み込まないが、続く**（歌B・C）**を思えば、この時点から意識されていることはあり得ることである。

さて、これら六つの点は、一見すると葬送の場面にはよくある題材であるように思われるが、加藤氏が指摘したように要素とその言及の順序が大まかには重なり合っていること、（煙a）と（歌B）での引歌と見られる語の一致や、同じ漢詩文を典拠にしていることが明らかであることを鑑みれば、やはり『栄花物語』は『源氏物語』を意識したと見て然るべきであろう。

二、史実にはない葬送の夜の「雨」

八月十五日の雨

前節では嬉子の葬送後の場面に見える『源氏物語』からの影響関係と、その典拠となっている漢詩を確認した。加藤氏が言うように、物語の表現と史実を巧く重ねて語る形になっているのであろう。

ところが、この場面より少し前、人々が嬉子の葬送に出掛けようとする場面に、ほんの些細なことではあるが、史実とは違う「雨が降った」というできごとが織り交ぜられている。嬉子の葬送のために人々が出掛けようとする時のことである。史実の日付は『左経記』『小右記』などから、万寿二年八月十五日の夜であると推測される。しかし実際は、この十五日の夜は晴れていたはずだということが『左経記』に記されている。

十五日甲子　晴、（中略）今夜尚侍殿於船岡西野奉火葬、山送人々、……
十六日乙丑　晴、（中略）関白殿、及晩帰参大内、明日依為故尚侍殿還日、……
（『左経記』万寿二年八月。）

他に天気の記述がある記録は残念ながら見当たらないが、『左経記』を信じる限り、十五日の雨に関する『栄花物語』の記述は誤りということになる。

加えて、「雨降りて、日ごろむつかしげなりつる」についてもその前後の数日間となる万寿二年八月の天候を、〈表2〉の通りにまとめた。

∞ 増補史料大成刊行会編『左経記』増補史料大成／臨川書店／一九六五

表2　『左経記』万寿二年八月の天候（×は記録なし）

日	記録
1	×
2	晴
3	晴
4	×
5	陰、時々降雨及夜終宵甚雨
6	晴
7	晴
8	晴
9	晴
10	陰、降雨
11	晴
12	×
13	晴
14	晴
15	晴
16	晴
17	×
18	晴
19	×
20	×
21	×
22	×
23	晴
24	陰、降雨
25	×
26	×
27	×
28	×
29	晴
30	晴

葬送の日である十五日までには、雨が二日、不明が三日ある以外、雨天は見られない。記録の無い日がすべて雨だったとしても、直前の半月のうち、雨が降ったのは間の空いた五日である。「日ごろ」とするにはやや無理があるのではないだろうか。十五日以降は記録が少なく確かなことは言えないが、記録が残っている六日中の五日が晴れで、雨の記録は二十四日のみである。ちょっとした天候をめぐる挿話であるとはいえ、ここに見える史実との食い違いを勘違いとして片付けるには、話の内容が印象的に過ぎるのではないだろうか。

文学的潤色の可能性

ところで、こうした『栄花物語』と『源氏物語』との類似箇所は、この「楚王の夢」に限って見られるわけではない。例えば、巻五「浦々の別」では、伊周が配流前に自邸を抜け出し、父・道隆の墓所や北野天神に参っていたことが描かれる。この場面は、光源氏が須磨へ退去する前、桐壺帝の御陵を訪れたことと酷似することが山中裕氏[9]によって指摘されている。こうした『源氏物語』からの影響について、山中氏は、栄花の著者は「源語によってまったくの架空の事実をかくということはしていない」とする。

> すなわち栄花物語の著者はこれらの実際の事件の大体の輪郭をまず正確な史料で書き、次に源語によって文学的に脚色し、物語としての効果をより一層高めんとしたのである。したがってその際に詳細な部分に少なからず事実以外のことをも書き入れてしまったのである。[10]

[9] 注1参照。
[10] 注1に同じ。

山中氏は『栄花物語』全体の『源氏物語』受容の特徴を概観し、「特にその書きぶりが優美で文学的な効果をあげている部分はそのまま信用することは危険であるというに過ぎない」という。先述の伊周の例も、『小右記』や『日本紀略』などの記録には、邸から一旦抜け出して帰邸したことは書かれるが、その間どこへ行って何をしていたかの記述は諸記録の間で一致しないことが新編全集[11]などにも指摘される。つまり、そもそも不明確な点を光源氏によって「文学的に脚色」しているのであって、「事実の捻じ曲げ」ではなく「事実以外のことをも書き入れて」いるというのである。もちろんこれは『源氏物語』からの受容が伺える部分についての話で、それ以外のところにも記録と一致しない記述は存在する。それらの不一致がなぜ生じているのかについては、また個別に原因を探らねばなるまい。例えば、第一章で取り上げた巻五「浦々の別」の年次設定のずれの問題は、『源氏物語』に寄せすぎることによる様々な不都合の解消のための措置でもあったし、巻の切り替わりによる効果を見据えた上での構成でもあった。必ずしも『源氏物語』に寄せることだけが理由ではないということは述べておきたい。

では、件の雨はどうだろうか。『左経記』を見る限り、実際の天候と『栄花物語』の記述が合致していないことは明らかである。この点を先行論ではどのように見ているのだろうか。この天候の相違は、先行研究でもすでに注目されている。日本古典文学大系や、松村博司氏による『栄花物語全注釈』、新編全集などの注釈書に指摘があり、前掲の『左経記』などの史料との相違に言及している。『栄花物語全注釈』は語釈で「文学的潤色あるか[12]」とし、さらに補説では、次のように述べる。

> 道長の心中とは異なって、葬儀に参列する人々に制限を加えたり、また天候も十日を除いては、連日晴天続きのようで、雨の降った形跡はない。それが本書では、道長は何でもしてやったように書いており、天候も（中略）人々が困ったとある。今まで各節では記録の裏付けはないにしても、大体書いてある事は事実に近かったろうといって来たが、ここにいたって文学的潤色のあることをいわざるを得なくなった。（中略）恐らく

---

[11] 山中裕ほか校注『栄花物語1』新編日本古典文学全集／小学館／一九九五　二四四頁頭注

[12] 注6　二三九頁

本書では道長賛美のために事実を書き変えたのであろう。[13]

「文学的潤色」、つまり道長賛美のための操作であろうと述べている。元々『栄花物語』の中では、道長が何かを行おうとする時、不思議と天候に恵まれるということが起こる。松村氏は、『大鏡』においても同様の例があるとして、次の箇所を紹介している。

天地にうけられさせたまへるは、この殿こそはおはしませ。何事も行はせたまふ折に、いみじき大風吹き、長雨降れども、まづ二三日かねて、空晴れ、土乾くめり。かかれば、あるいは聖徳太子の生れたまへると申し、あるいは弘法大師の仏法興隆のために生まれたまへるとも申すめり。

（『大鏡』道長　三五二頁）

藤原家と寺社との関係を紹介している中で、語り手の老人たちが道長を賛美する。道長が何かをする折は、大風や長雨で天候が荒れていても、二、三日前には晴れるというのである。これに先んじて昭宣公（基経）、貞信公（忠平）の幼少期の仏教的逸話もあるのだが、「聖徳太子」や「弘法大師」の生まれ変わりとまでの賛辞を贈る道長は明らかに別格の扱いである。松村氏は「楚王の夢」の雨を「文学的脚色」であると見なし、この『大鏡』にも見られる「道長賛美」に通じるという。

また、新編全集[14]は「夜より雨こまやかに…」の注で、「後文の「しほどく」という表現を導き出すための状況設定か。あるいは、後文の道長讃美のための設定か」とし、「しほどけからん」の注で「「雨に濡れる」と「涙に濡れる」の両意を掛ける」というように、雨と参列者たちの心情を重ね合わせていると見ている。

確かにこれらの道長賛美や雨と涙の連想といった説明は妥当であるだろう。しかし、わざわざ史実を変えてまで、この場面ですべきことなのだろうか。雨と涙を掛けたいのであれば、実際に雨が降っていた臨終の八月五日の夜でも良いはずである。五日の夜は『左経記』に「陰、時々降雨（中略）及夜終宵甚雨」と強い雨の記録があり、栄花でも「雨さへいとうた

注

[13] 注6　二四〇頁

[14] 山中裕ほか校注『栄花物語2』新編日本古典文学全集／小学館／一九九七　五二二頁頭

て降れば、よろずなりあひたり」とあるように、読経や祈祷の声と響き合ったことが語られる。また、道長賛美であれば、元々天気は晴れで好天候に恵まれたのだから、わざわざ雨を降らせずとも、それを強調するだけで十分なはずであろう。いったいなぜ、この「脚色」は加えられたのだろうか。

三、雲と雨の哀傷

突然の雨の正体

思うに、この雨には〈高唐賦〉の「暮雨」、および〈有所嗟〉の「煙雨」を響かせているのではないだろうか。

対照される『源氏物語』では、光源氏と三位中将が高欄で夕暮れを過ごしていた時に降っていた雨から、この二つの典拠に見られる雨を導いていた。第一節で引用したように、「葵」巻の場面では、夕方、光源氏が高欄で物憂げにしていた時に時雨が降り、それによって〈有所嗟〉の一節が光源氏の口に上る。それを聞いた中将が歌を詠む。というように、場面の中で実際に降った雨が唱和を導く契機になるのである。『栄花物語』が『源氏物語』を踏まえようとしているなら、そこまで模倣していても何らおかしくはない。むしろ『源氏物語』では、第一節で述べたように「雲」は地の文には現れない。雨が降っているので読者には当然情景の中に想像はされるのだが、はっきりと言及されている分、雲よりも雨の方がより存在感があり、『源氏物語』に寄せて表現する上では無視できない要素である。

これは何故かというと、『源氏物語』の直接の典拠となっている劉詩〈有所嗟〉に理由がある。

有所嗟　二首　　嗟く所有り　二首

庾令樓中初見時　庾令樓中　初めて見えし時、
武昌春柳鬬腰支　武昌の　春柳　腰支を鬬わせり。
相逢相笑盡如夢　相逢い　相笑いしも　盡く夢の如し、
爲雨爲雲今不知　雨と爲り　雲と爲る　今知らず。

＊　＊

鄂渚濛濛烟雨微　鄂渚　濛濛　煙雨微なり、

女郎魂逐暮雲歸　女郎　魂逐われ　暮雲歸る。
只應長在漢陽渡　只だ應に　長えに漢陽の渡に在り、
化作鴛鴦一隻飛　化して鴛鴦と作り　一隻で飛ぶ。

（『劉白唱和集』[15]）

〈有所嗟〉には「鄂渚濛濛烟雨微」という一句がある。濛々と煙るように雨が降り、女の魂は暮れ方の雲を追って帰るのである。雲の表現はあるが「朝雲」ではない。ここでは夕暮れの折に降った雨に付随する「暮雲」である。このように〈有所嗟〉には雨の表現しかないのである。「葵」巻と、その『源氏物語』が直接引用している〈有所嗟〉では、朝雲よりも暮雨が大きな意味を持っていると言える。更に、その〈有所嗟〉の典拠である〈高唐賦〉自体には、「死んだ女性への哀傷」という要素は含まれていない。この意識が生まれたのは、〈有所嗟〉以降のことである。したがって、葵の上の死を嘆く表現として用いられた『源氏物語』では、「雨となり雲とやなりにけん」というように、まずは〈有所嗟〉の引用が先行する。『源氏物語』の影響、さらには哀傷であることを意識すればするほど、「暮雨」は無視できない存在なのである。

この可能性を考えるため、まず『栄花物語』の作者にはその力量があるのかという点について述べておく。『栄花物語』の作者と目される赤染衛門は宮仕えの経験もある上、儒者である大江匡衡の妻であった。女房たちの中でも比較的漢詩に馴染んでいたのではないかと推測され、『源氏物語』を吸収する際にも、劉詩の存在がしっかり理解されていた可能性は高いだろう。加えて、先に述べたように『栄花物語』には『源氏物語』のオマージュと見られる場面が当該部分以外にも多数見られる。こういった点から、『源氏物語』を模倣し、情景として取り入れる妥当性は十分あると思われるのである。嬉子の葬送時に出現した「赤雲」に関しては、まさにそういった例であると思われる。

とはいえ、〈有所嗟〉が踏まえている〈高唐賦〉では、実際に夢から覚めた懐王が見たのは朝の景色であったから、見たのは暮雨ではなく朝雲である。先に示した東宮の傍らにいた従者の歌（**歌a**）はこの「朝雲」を踏まえた表現と言える。とすると、『栄花物語』ではそこまで雨に意味を持たせなくても良いのではないか。『源氏物語』では雨を契機にして、亡き葵の上の夫と兄が唱和する。それに対し、『栄花物語』では雲をきっかけにして詠歌する

[15] 柴格朗訳注『劉白唱和集（全）』勉誠出版／二〇〇四　一八八～一九一頁

という形になっているのではないか。こうした反論はできそうである。

しかし、先ほど述べた通り、〈高唐賦〉それだけでは「哀傷」のための表現とはならない。そして作者が漢詩文の知識を持っているとなれば、当然そのことは知っているはずである。この二点は「雨」が意図的に用いられた可能性を裏付けるだけでなく、〈高唐賦〉の「雲」のみに頼った哀傷の場面ではないことを示唆しているのである。

『源氏物語』と厳密に対比すれば、『源氏物語』と『栄花物語』とでは、哀傷のタイミングや時刻が違うことは第一節の比較の際に既に述べた。光源氏と中将の唱和は、七日ごとの法事も一頻り済んだ後の夕方のことであるが、『栄花物語』で故事を踏まえた「ほどもなく…」の歌が詠まれているのは葬送を終えたばかりの明け方のことである。それぞれの典拠を踏まえた哀傷の歌（**歌B・C・a**）の場面で見られる情景も「雨」と「雲」というように異なっており、全く同じにはなっていない。しかしここに、単なる模倣ではない『栄花物語』なりの工夫があると考えたいのである。

赤い雲の正体

ここでもう一度物語の流れを確認する。まず八月十五日の夕方、法興院を出発する際に件の雨が降る。日が暮れ、酉の刻に出発してからは大勢の参列者が行列を作っている様子が描かれ、嬉子の死は娍子、寛子の死に続く天変であると言われる。岩蔭に着き、遺体が荼毘に付される。ここで火葬の煙と雲についての描写があり、折しも元嬉子付きの女房が同時刻に荼毘に付されていたことを人々が知る。八月十五夜の月が美しく、法成寺にいる倫子が、赤い雲を眺めて嬉子を思い、東宮が「楚王の夢」を思い合わせ、ある人が東宮の心中を思って歌を詠む。このように色々なことが語られて、随分長い場面のように感じられるが、これらはすべて同じ夜のできごとである。

ここで、倫子と東宮が見たという「雲」についても考えておきたい。諸注釈書は「月が雲に映って赤く見えたのだ」としていたが、これはいかがであろうか。確かに月の光によって明るく見えることはあろう。しかしそれは「赤」と表現するような色であろうか。出たばかりの月は確かに赤く見えることもあるが、この日は十五夜である。人々がこの「雲」を見上げていたのは、火葬が始まり、その煙を目で追ったからであろう。とすれば、赤く見えるのは火葬の炎が映って赤く見えているのではないだろうか。

加えて、この時、「げに火水に入りて仕うまつれど、さすがにしも知らざりけることにて、

夜ふけ、鶏も鳴きぬ」（2：五二五頁）とあった通り、火葬の準備にはかなり手間取ったらしく、鶏の声が聞こえてから茶毘に付されているように読める。この「鶏鳴」の時刻について、吉海直人氏は次のように述べる。

その「暁」の時刻はまだ暗いので、視覚的にあたりが明るくなるとするのは再考を要する。暗いからこそ「鶏鳴」という視覚情報が積極的に用いられており、「有明の月」が印象的に描かれているからである。平安時代の後朝の別れは夜明けではなく、まだ暗い午前三時過ぎに行われていることを再確認した次第である。[16]

「鶏鳴」に象徴される「暁」や「後朝の別れ」の時刻は、午前三時過ぎであり、まだ明るくはならないものの、ここから朝に近付く頃であると思われる。これを踏まえて嬉子の葬送の時系列を考えると、【夕暮れ前に雨→日暮れ→酉の刻（午後六時前後）に出発→岩陰到着→火葬の準備に手間取る→夜が更け、鶏鳴（午前三時ごろ）→火葬→赤雲→夜明け】となる。これを図に表したものが次の〈図1〉である。

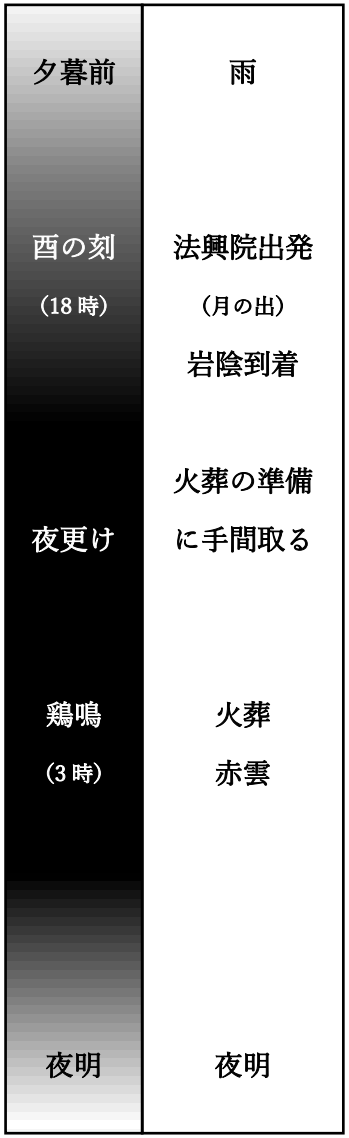


図1　嬉子の葬送の時系列

したがって、この「赤雲」はかなり早い時間ではあるものの、「朝に出ている雲」であると解釈できる。つまり、この葬送の場面には「朝雲」「暮雨」の両方を語ることができる時間的な広がりがあるのである。

『栄花物語』作者としては、「葵」の巻を踏まえて哀傷を描くのであれば、折を見て雨の

---

16 吉海直人「後朝を告げる「鶏の声」――『源氏物語』の「鶏鳴」――」「古代文学研究　第二次」二九／二〇二〇

描写を入れたいと思っただろう。雨の情景があってこそ「葵」と同じ情景になり、哀感が増す。そしてそれ以前に、「哀傷」の表現とするためには〈高唐賦〉による「朝雲」だけではなく、〈有所嗟〉による「暮雨」を踏まえなければならないことは、前述の通りである。

しかし、それでは何故『栄花物語』では『源氏物語』と同じように四十九日を待たなかったのだろうか。それには、両作品の視点の違い、そしてその後の展開の違いが理由として挙げられるのではないかと思われる。『源氏物語』では主たる視点が光源氏にあり、彼は妻葵の上を亡くした後、左大臣家を去るのみであった。左大臣家は四十九日以前も以後も悲しみに暮れているはずであるが、光源氏の物語としては六条御息所に触れないわけにもいかず、また新たな女君となった紫の上にも徐々に話題が移って行く。巻の終盤では紫の上との新枕が書かれ、続く物語の展開に期待を持たせるようにして「葵」の巻は終幕となる。

一方、『栄花物語』では物語の中心は男君である親王ではなく、亡くなった女の家、道長家の側にある。だからこそ、『源氏物語』で婚姻関係が解消された左大臣家が物語からフェードアウトし、主人公光源氏には新しい愛が生まれていったのと同じような展開にはならないのである。

実際に、「楚王の夢」の後半では、娘を亡くした父道長の悲嘆が詳しく描写される。寛子の四十九日は「楚王の夢」の巻末で、嬉子の四十九日は次巻の「ころもの玉」で扱われる。「ころもの玉」は二人の一周忌が巻末に置かれるが、道長家にとって、二人の娘、特に嬉子の死はそれほどまでに大きなできごとなのであり、一つの巻でそれらをひとまとめにはできなかったのであろう。そもそも二人の死は一か月しか離れていないにも関わらず、「みねの月」と「楚王の夢」で分けられている。では嬉子と同程度の注目が寛子にも割かれているのかと言うと、そうではないだろう。「みねの月」は小一条院の母娍子の死の記述も含んでおり、万寿二年の上半期に当たる約六か月を描く巻であるが、「楚王の夢」は嬉子の死去の前後の、ほぼ一か月に集中した巻である。加えて「楚王の夢」の方が分量的にも勝っているとあれば、力の入れ方の差は歴然たるものであろう。

そのような巻の運びにした以上、「葵」の演出と同様に四十九日以降の哀傷にも典拠を持たせようとしたところで、巻をまたいでしまって冗長になる。そういった事情により、『源氏物語』での演出とは全く同じにはできなかったのであろうと思われる。そこで、同じ夜の宵の口に暮雨を組み込んだのではないかと考えられるのである。

典拠を踏まえた読解

それでは、ここまでの考察を踏まえ、順を追ってこの場面を読み解いてみようと思う。

夕方、『源氏物語』と〈有所嗟〉を踏まえ、物語の舞台に哀傷の意が込められた雨が降る。しかし史実では雨が降っていなかったので、道長のおかげで晴れたという体で、物語の運びには影響しない形になった。ところが、葬送に出発する場面に、哀傷の主体となる男君である東宮はいない。そのため、ここではまだ「楚王の夢」や「為雨為雲」といった男女の仲には触れられない。そして火葬の煙を眺めるところで三度にわたって「雲」の語を挙げ、情景として読者に印象付ける。母倫子の描写に加えて、いよいよ男君である東宮に視点が移る。東宮の様子を光源氏さながらに描き、和歌で「昔の夢の心地」と種明かしをする。これで少なくとも巻名に冠した〈高唐賦〉については印象に残る。一回読んだだけでは『源氏物語』や〈有所嗟〉には気付かないかもしれない。だが第一節で挙げたような表現上の類似点や、男子を生んだ直後の死といった境遇の類似、また八月という時期的な類似から『源氏物語』を想起する読者は多いはずである。

そこで、改めて『源氏物語』の哀傷の場面と重ね合わせてみれば、件の故事が用いられた夕刻の雨に注目することになろう。『源氏物語』では「雨」が前面に出ていたが、実は葵の上の葬送の場面では、「のぼりぬる煙はそれと分かねども」と火葬の煙の描写に紛れて「朝雲」の情景も伺える。同様に、今度は『栄花物語』に戻ってみれば、「雲」が三度も文中に現れる前に、「暮雨」があったではないか、と気づかされるのである。それによって、東宮の愛情は「あの時の光源氏と同じ」と、二者を重ね見ることができるのである。なるほど、東宮の心情を詠んだ「昔の夢の心地」の歌は、周囲にいる某のものであったが、光源氏にこの故事を込めた歌を詠みかけたのも、隣にいる中将であった。

おわりに

本章では、「楚王の夢」の一場面に見える史実と矛盾した雨の描写に『源氏物語』からの影響があること、そしてその矛盾は、東宮から嬉子への愛情を文学的に表現する効果を加える意図を持って書かれた故ではないかということを述べた。

その『栄花物語』と『源氏物語』の関係に加えて、表現の典拠となった二つの漢詩〈高唐賦〉と〈有所嗟〉の関係を図示すると、**〈図2〉**のようになる。

作品名に付記した番号は成立順になっており、矢印は元になったものから影響を受けた側へと指し示している。それぞれの作品に現れる要素を「雲」「雨」「哀（哀傷）」に分けて示した。今回の主題作品である【4・栄花物語】は、父と夫による哀傷を表現するために、同じく父と夫による哀傷を描いている【3・源氏物語】を参考にしようとした。その【3】には【2・有所嗟】を用いた哀傷の場面があり、更に、その【2】も【1・高唐賦】を典拠としているという関係がある。【4】はこうした関係にある三つの作品中の表現を反映させ、葬送前の夕暮れの場面に「雨」を、火葬の後の暁に「雲」を描いた。雨に人々の涙を連想させ、天候までをも好転させる道長の超越性を示す役割があることを積極的に否定する理由はないが、典拠を踏まえればこれは愛人を亡くした詩【2】に寄せた哀傷表現である。一方の雲には、直接的に「楚王の夢」の語を用いることによって、【1】ひいては【2】【3】も内包しているのだと読者に意識させる役割を負っている。しかし、実際には雨が降っていたという事実がないため、雨の描写については文学的な表現を狙って行われた「文学的潤色」であろうということになる。

今回取り上げたのは天候についての史実との齟齬であったが、『栄花物語』の中には、このような「文学的潤色」が他にもまだあるのではないかと予想され、更なる検討、考察の必要性を実感する結果となった。

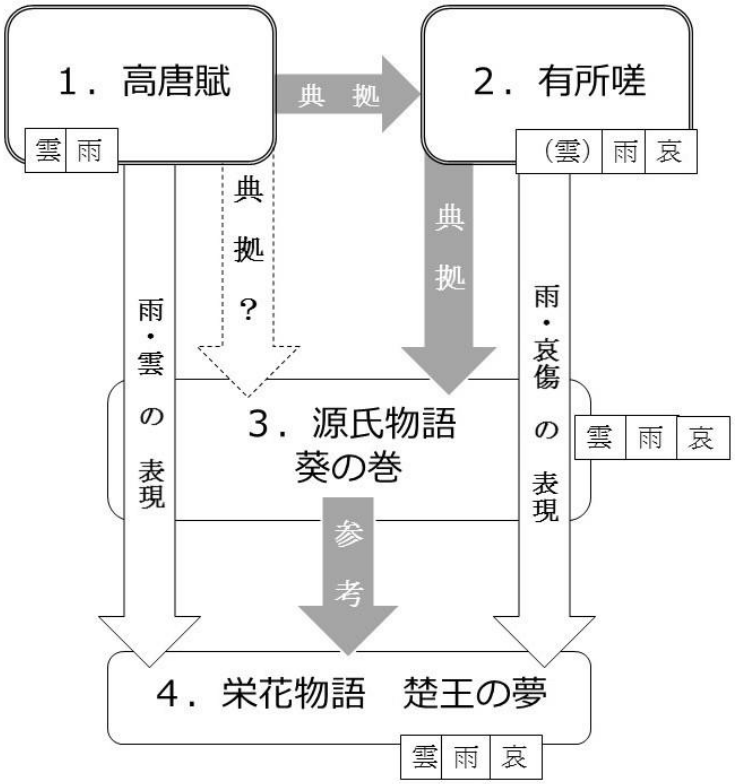


図２　典拠、表現の影響関係

『栄花物語』では、嬉子の死が描かれて以降、東宮の悲嘆が描かれる場面も皆無ではないのだが、やはり物語の中心は藤原氏側にある。ここが『源氏物語』とは大きく違うところであろう。光源氏は皇子とはいえ、臣下の身である。対して『栄花物語』の敦良親王は東宮であり、次期天皇の身である。触穢に対する意識も一般人のそれよりはかなり敏感であろうし、そもそも簡単に自由に出掛けて行けるような身の上ではない。実際に、「みねの月」では娍子と寛子の葬送に小一条院がついてきてしまい、「ひたたけて歩ませたまふこと、またなきことになんおはしましける」（2：四八六頁）と、異常なことと見なされていたことが分かる。既に東宮を退いて久しい身である小一条院ですらこの様子であるから、今まさに東宮の位についている敦良親王にはどだい無理なことだったのである。加えて『栄花物語』が描く歴史は藤原氏側の動静が中心的なものであるから、どうしても東宮についての記述は少なくなってしまう。

だからこそ藤原嬉子の、ひいては父道長の栄花に物語を収斂させようとすれば、何とかして夫である東宮の悲嘆と哀傷を、読者に強く印象付ける必要があったのである。歴史物語の中に現れた小さな史実との齟齬と見える「雨」は、『源氏物語』という優れた先行作品の力を借りて、嬉子への哀傷をより文学的に演出するための仕掛けだったのではあるまいか。

終章

一、各章の振り返り

本論文では、『栄花物語』の表現や潤色、物語構成といった文芸の方法を追究することにより、この作品の文学としての有り様を追ってきた。

第一章では、巻五「浦々の別」において年次が操作されていることについて論じた。これは『源氏物語』へのオマージュのためだけでなく、『栄花物語』の「史観」とも言い換え得るかもしれない伊周像や、巻と物語の切れ目を効果的にリンクさせるという構成の問題にも関わっているのではないかと考察した。

第二章では、正編の引歌表現について論じ、作者が印象付けたい内容のために引歌によって文章を飾り、美文調にしているのではないかと述べた。その内容とは、勝者と敗者の両方に対して肯定的な目を向け、最終的には両者とも同じ「死」による諸行無常を感ずるという、「善人の歴史」といわれていたこれまでの論を裏付けるものであった。

第三章では、巻八「はつはな」における伏線や連想を用いた構成の工夫がなされているのではないかと論じた。伊周の遺言の前後に為光四女の描写を挿入することで、伊周の懸念が現実のものとなることを予感させ、物語の中心から退場していく敗者の哀れを描いているのではないかと論じた。

第四章では、前章と同じく伊周の遺言に注目し、その本文が『源氏物語』のオマージュによる創作なのではないかと論じた。長大な伊周の台詞には、『源氏物語』の八宮の遺言との類似が見られ、父の遺言を娘が破るという伏線の構造は、宇治の親子を参考にして創作されたのではないかと推察した。

第五章と第六章では、巻二十六「楚王の夢」において天候が潤色されていることについて論じた。道長女嬉子の葬送の日に雨が降ったという史実との齟齬は、『源氏物語』を踏まえて同じ典拠を用いつつ、哀傷を表現するために漢詩文に則った演出であると考えられる。

二、今後の展望と課題

右に挙げたように、本論文では、特に「史実との齟齬」や「源氏準拠」にヒントを得てい

るものに注目し、それぞれの表現で意図されたものについて考察した。『源氏物語』と『栄花物語』の関係性は、『栄花物語』研究史の中でもかなり大きな存在である。それは『源氏物語』の研究史の圧倒的な厚みによるものであり、もちろん『栄花物語』の実態に即したものであろう。

しかし、序章にて挙げた『栄花物語：歴史からの奪還』[1]では、『竹取物語』『狭衣物語』といった作品との関係性を指摘する論[2]もある。今後の課題としては、そういった『源氏物語』以外の作品との関係性についての研究が挙げられる。特に『狭衣物語』については『栄花物語』を受容する立場である。こうした『栄花物語』の受容史を考える上でも、『栄花物語』が行った工夫や演出を明らかにすることは非常に重要であろうと思われる。

また、これまでの研究は、まとまった分量があり、作者（編集者）と思われる人物が絞れている正編に集中しがちであったが、続編においてもこの「どのように書かれているか」といった視点による研究が必要となるであろう。むしろ作者が複数いる可能性が示唆されている続編こそ、こうした表現の傾向からのアプローチによって明らかになるものがあるのではないだろうか。

とはいえ、正編におけるこうした文学的なアプローチによる研究も、未だ十分とは言い難い。巻五「浦々の別」が「中関白家の物語」として完結しているように、一つの巻でのあり方、逆に巻を横断した全編を通じての一人物の書かれ方、伏線の構造、他の作品へのオマージュなど、本論文で注目した観点以外にも、様々な手法とそこに込められた意図があると思われる。それらを積み重ねることが『栄花物語』という作品全体の「文学」としての姿を解明していくことに繋がるだろう。

---

[1] 高橋亨、辻和良編『栄花物語：歴史からの奪還』森話社／二〇一八

[2] 久保堅一「二人のかぐや姫：『栄花物語』第巻六「かかやく藤壺」の彰子と定子」　高橋亨、辻和良編『栄花物語：歴史からの奪還』森話社／二〇一八
神田龍身「『狭衣物語』と『栄花物語』についての一考察：賀茂斎院神事の記録」　高橋亨、辻和良編『栄花物語：歴史からの奪還』森話社／二〇一八

礎稿一覧

第一章　「史実を欺く『栄花物語』：巻五「浦々の別」における年次設定」
「語文研究」一二三／二〇一七　掲載

第二章　書き下ろし

第三章　「姫君たちの退場：『栄花物語』巻八「はつはな」伊周の遺言の周辺」
「文献探究」五八／二〇二〇　掲載

第四章　「『栄花物語』における伊周の遺言：宇治八宮との比較を中心として」
「西日本国語国文学」七／二〇二〇　掲載

第五章　「『源氏物語』葵の巻における雲と雨の哀傷」
「語文研究」一一七／二〇一四　掲載

第六章　「『栄花物語』「楚王の夢」における雲と雨の哀傷」
「西日本国語国文学」三／二〇一六　掲載

付録：正編の引歌一覧

本論文第二章に関連して、『栄花物語』の正編に見られる引歌表現の一覧表を作成した。作成に際し、松村博司『栄花物語の研究』（刀江書院／一九五六）、松村博司『栄花物語全注釈』（角川書店／一九六九～一九八二）、山中裕ほか校注『栄花物語』（新編日本古典文学全集／小学館／一九九五～一九九八）を参考にした。

1. 別資料からの引用の可能性がある箇所も数える。
   ＊例：巻一一〔一三〕長和三年の年変わり表現
2. 一つの言葉に複数の引歌表現が含まれる場合、二例と数える。
   ＊例：二〇〔六〕「闇の夜の錦」
   ↓「春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やはかくるる」（古今集・春）
   「見る人もなくてちりぬる奥山の紅葉は夜の錦なりけり」（古今集・秋）
3. 複数の歌集に重複して収録されているものは勅撰集を優先して数える。
4. 参考歌、類歌が多く特定し切れないものは、最も場面の内容と一致すると思われるものを選定する。
   ＊例：一一〔一三〕「ときはかきはの緑色深く見え…」
   ↓「山しなの山のいはねに松をうゑてときはかきはにいのりつるかな」拾遺集・賀
5. 現存の歌集に見えない歌の引用は「不明」として数える。
   ＊例：一二〔二四〕「河ぞひ柳風吹けば動くとすれど根は静かなり」
6. 典拠が不明であっても、五及び七音の和語かつ「…と・など」で示されているなど、引歌と認められるなら「不明」として数える。
   ＊例：一三〔二九〕・一四〔二五〕「いつまで草の…」

通番	巻	段	新全集頁	引用主	引歌部分	元歌詞書	作者	元歌	典拠	歌番号	部立段	分類
1	1	38	47	村上帝	「たれも遅く疾きといふばかりこそあれ、いと昨日今日とは思はざりつることぞかし」と、内に思しめしたる御気色につけても、	やまひしてよわくなりにける時よめる	業平	つひにゆくみちとはかねてききしかどきのふけふとはおもはざりしを	古今	861	哀傷	哀傷
2	3	34	162	作者	をりしも雪いみじう降りければ、「送り迎ふ」と言ひおきたるもげにとおぼえたるに、	斎院の屏風に、十二月つごもりの夜	平兼盛	かぞふればわが身につもる年月を送り迎ふとなにいそぐらん	拾遺	261	冬	行事
3	4	13	188	作者	世の中の薄鈍など果てて、花の袂になりぬるも、いとものの栄えあるさまなり。	ふかくさのみかどの御時に蔵人頭にてよるひるなれつかうまつりけるを、諒闇になりにければ、さらに世にもまじらずしてひえの山にのぼりてかしらおろしてけり、その又のとしみなひと御ぶくぬぎて、あるはかうぶりたまはりなどよろこびけるをききてよめる	遍昭	みな人は花の衣になりぬなりこけのたもとよかわきだにせよ	古今	847	哀傷	哀傷
4	4	45	204	（三条帝）	東宮はいつしかと、まだ見ぬ人のゆかしく恋しうと思ひきこえさせたまふ。	やむごとなき女のもとに、なくなりにけるをとぶらふやうにて、言ひやりける	昔男	いにしへはありもやしけむ今ぞ知るまだ見ぬ人を恋ふるものとは	伊勢物語	190	111	親子
5	4	54	210	作者	明日は知らず、今はかうなめりと、さべき殿ばら、胸走り恐ろしう思さるるに、関白殿の御心地いと重し。	きのとものりが身まかりにける時よめる	紀貫之	あすしらぬわが身とおもへどくれぬまのけふは人こそかなしかりけれ	古今	838	哀傷	哀傷
6	5	6	242	（伊周）	山の中の鳥獣、声をあはせて鳴きののしる。「もののあはれも」など、あはれに悲しくいみじきに、	不明	不明	不明	不明	不明	不明	感情
7	5	16	255	作者	中納言異方へおはすらむを、などか、同じ方にだにあらましかば、何ごともよからましと、ああにくなる世を心憂く思されて、「白浪はたてど衣に重ならず明石も須磨もおのが浦々」といふ古歌をかへさせたまへるなるべし、	題知らず	人麻呂	白浪はたてど衣にかさならずあかしもすまもおのがうらうら	拾遺	477	雑	感情
8	5	22	259	作者	はかなく秋にもなりぬれば、世の中いとどあはれに、荻吹く風の音も、遠きほどの御けはひのそよめきに思しよそへられけり。	秋のゆふぐれ	藤原義孝	秋はなほゆふまぐれこそただならねをぎのうはかぜはぎのしたつゆ	義孝集	4	■	季節

9	5	32	272	定子	花の都はめでたきに、かの旅の御有様ども、「春や昔の」とのみ思されつつ、	五条のきさいの宮のにしのたいにすみける人にほいにはあらでものいひわたりけるを、む月のとをかあまりになむほかへかくれにける、あり所はききけれどえ物もいはで、又のとしのはるむめの花さかりに月のおもしろかりける夜、こぞをこひてかのにしのたいにいきて月のかたぶくまであばらなるいたじきにふせりてよめる	業平	月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして	古今	747	恋	感情
10	5	38	277	作者	御物語なにとなくものはなやかに申させたまへば、まづ知るものに思さるべし。	題知らず	詠人知らず	世中のうきもつらきもつげなくにまづしる物はなみだなりけり	古今	941	雑	親子
11	5	38	278	（一条帝）	御殿油遠くとりなして、隔てなきさまにて泣きみ笑ひみ聞えさせたまふに、古になほたちかへる御心の出でくれば、	題知らず	紀貫之	いにしへに猶立帰る心かなこひしきことに物わすれせで	古今	734	恋	男女
12	5	41	280	（伊周）	帥殿は松君をはるかに思しおきつつ、生の松原とのみ思しよそへられけり。	左大将済時があひしりて侍りける女つくしにまかりくだりたりけるに、実方朝臣宇佐使にてくだり侍りけるにつけて、とぶらひにつかはしたりければ	藤原後生女	けふまではいきの松原いきたれどわが身のうさになげきてぞふる	拾遺	1208	雑	親子
13	5	53	294	作者	よろづ一つ涙といふやうに見えさせたまふも、あはれに見えさせたまふ。	もの思ひ侍りけるころ、やむごとなきたかき所よりとはせたまへりければ	詠人知らず	うれしきもうきも心はひとつにてわかれぬ物は涙なりけり	後撰	1188	雑	感情
14	6	15	314	（定子）	この宮たちの御扱ひせさせたまひつつも、かつはわれいつまでとのみ、まづ知るものに思さるるもいみじうぞ。	題知らず	詠人知らず	世中のうきもつらきもつげなくにまづしる物はなみだなりけり	古今	941	雑	感情
15	7	1	321	作者	荻の上風萩の下露もいとど御耳にとまりて過ぐさせたまふにも、いとど昔のみ思されてながめさせたまふ。	秋のゆふぐれ	藤原義孝	秋はなほゆふまぐれこそただならねをぎのうはかぜはぎのしたつゆ	義孝集	4	■	季節
16	8	5	366	作者	御匣殿もよろづ峰の朝霧にまたかく思ほし嘆かるべし。	題知らず	詠人知らず	雁のくる峰の朝霧はれずのみ思ひつきせぬ世中のうさ	古今	935	雑	男女
17	8	24	381	作者	寛弘五年になりぬれば、夜のほどに峰の霞も立ち変り、よろづ行く末はるかにのどけき空のけしきなるに、	冷泉院東宮におはしましける時、歌たてまつれとおほせられければ	源重之	吉野山峯の白雪いつきえてけさは霞の立ちかはるらん	拾遺	4	春	季節
18	8	88	460	作者	あはれなる世の中は、寝るが中の夢に劣らぬさまなり。	あひしれりける人のみまかりにける時によめる	壬生忠岑	ぬるがうちに見るをのみやは夢といはむはかなき世をもうつつとは見ず	古今	835	哀傷	感情
19	9	16	481	作者	はかなくて十月にもなりぬれば、中宮の御袖の時雨もながめがちにて過ぐさせたまふ。	ふるうたにくはへてたてまつれるながうた	壬生忠岑	…春は霞にたなびかれ　夏は空蝉なきくらし　秋は時雨に袖をかし　冬は霜にぞせめらるる……春は霞にたなびかれ　夏はうつせみ　なきくらし　秋は時雨に　袖をかし　冬はしもにぞ　せめらるる…	古今	1003	雑躰	季節

20	10	15	518	（人々）	世の中心あわたたしう、内よりはじめ、宮々の御仏名にも、例の仏名経など誦ずる声もをかしきに、「降る白雪とともに消えなん」などもあはれなり。	延喜御時の屏風に	紀貫之	年の内につもれるつみはかきくらしふる白雪とともにきえなん	拾遺	258	冬	行事
21	11	7	29	作者	松の風琴を調ぶるに聞え、よろづおもしろく吹き合せたり。	野の宮に斎宮の庚申し侍りけるに、松風入夜琴といふ題をよみ侍りける	斎宮女御（徽子）	ことのねに峯の松風かよふらしいづれのをよりしらべそめけん	拾遺	451	雑	自然
22	11	13	35	作者	夜のほどにたちかはりたる春の霞も紫に薄く濃くたなびき、	冷泉院東宮におはしましける時、歌たてまつれとおほせられければ	源重之	吉野山峯の白雪いつきえてけさは霞の立ちかはるらん	拾遺	4	春	季節
23	11	13	35	作者	百千鳥も囀りまさり、よろづみな心あるさまに見え、	題知らず	詠人知らず	ももちどりさへづる春は物ごとにあらたまれども我ぞふり行く	古今	28	春	季節
24	11	13	35	作者	枝もなかりつる花もいつしかと紐をとき、垣根の草も青みわたり、	あひしりて侍る女の、人にあだなたち侍りけるに、つかはしける	平希世	枝もなく人にをらるる女郎花ねをだにのこせうゑしわがため	後撰	844	恋	季節
25	11	13	35	作者	垣根の草も青みわたり、	恒佐右大臣の家の屏風に	紀貫之	野辺見ればわかなつみけりむべしこそかきねの草もはるめきにけれ	拾遺	19	春	季節
26	11	13	36	作者	朝の原も	題知らず	人麻呂	あすからはわかなつまむとかたをかの朝の原はけふぞやくめる	拾遺	18	春	季節
27	11	13	36	作者	荻の焼原かき払ひ、	はる立つ日よめる	兼盛王（平兼盛）	けふよりは荻のやけ原かきわけて若菜つみにと誰をさそはん	後撰	3	春	季節
28	11	13	36	作者	春日野の飛火の野守も、	題知らず	詠人知らず	かすがののとぶひののもりいでて見よ今いくかありてわかなつみてむ	古今	18	春	季節
29	11	13	36	作者	万代の春のはじめの若菜を摘み、	内侍のかみの右大将ふぢはらの朝臣の四十賀しける時に、四季のゑかけるうしろの屏風にかきたりけるうた	素性	かすがのにわかなつみつつよろづ世をいはふ心は神ぞしるらむ	古今	357	賀	季節
30	11	13	36	作者	氷解く風もゆるく吹きて	はるたちける日よめる	紀貫之	袖ひちてむすびし水のこほれるを春立つけふの風やとくらむ	古今	2	春	季節
31	11	13	36	作者	谷の鶯も行く末はるかなる声に聞えて耳とまり、	寛平の御時きさいの宮のうたあはせのうた	大江千里	うぐひすの谷よりいづるこゑなくは春くることをたれかしらまし	古今	14	春	季節
32	11	13	36	作者	船岡の子の日の松も、いつしかと君に引かれて万代を経んと思ひて、	入道式部卿のみこの、子の日し侍りける所に	大中臣能宣	ちとせまでかぎれる松もけふよりは君にひかれて万代やへむ	拾遺	24	春	季節
33	11	13	36	作者	ときはかきはの緑色深く見え、	天暦のみかど四十になりおはしましける時、山しなでらに金泥寿命経四十巻をかき供養したてまつりて、御巻数つるにくはせてすはまにたてたりけり、そのすはまのしき物にあまたのうたあしでにかける中に	兼盛王（平兼盛）	山しなの山のいはねに松をうゑてときはかきはにいのりつるかな	拾遺	273	賀	季節
34	12	24	71	作者	大殿は、世は変らせたまへど、御身はいとど栄えさせたまふやうにて、「河ぞひ柳風吹けば動くとすれど根は静かなり」といふ古歌のやうに、動きなくておはしますも、えもいはずめでたき御有様なりしに、	不明	不明	不明	不明	不明	不明	慶賀

35	12	24	71	作者	なほまたこのたびは今ひとしほの色も心ことに見えさせたまづぞ、いとどいみじうおはしますめる。	寛平御時きさいの宮の歌合によめる	源宗于	ときはなる松のみどりも春くれば今ひとしほの色まさりけり	古今	24	春	慶賀
36	12	39	90	作者	かの在五中将の、「心の闇にまどひにき夢現とは世人定めよ」など詠みたりしも、かやうのことぞかし。	（業平朝臣の伊勢のくににまかりたりける時、斎宮なりける人にいとみそかにあひて又のあしたに人やるすべなくて思ひをりけるあひだに、女のもとよりおこせたりける）返し	業平	かきくらす心のやみに迷ひにき夢うつつとは世人さだめよ	古今	646	恋	斎宮
37	13	1	95	（当子）	いかにせんと人知れず思し嘆かれて、御覧ぜし伊勢の千尋の底の空せ貝恋しくのみ思されて、	西四条の斎宮まだみこにものし給ひし時、心ざしありておもふ事侍りけるあひだに、斎宮にさだまりたまひにければ、そのあくるあしたにさか木の枝にさしてさしおかせ侍りける	藤原敦忠	伊勢の海のちひろのはまにひろふとも今は何てふかひかあるべき	後撰	927	恋	斎宮
38	13	1	96	当子	宮、「ふるの社の」など思されて、あはれなる夕暮に、御手づから尼にならせたまひぬ。	世中そむく人のおほかるころ、女御	斎宮女御（徽子）	みな人のそむきはてぬる世中にふるのやしろのみをいかにせむ	斎宮女御集	259	■	斎宮
39	13	10	104	（妍子）	姫宮、蚯蚓書きにせさせたまへる、「これいかであてのもとに奉らん」とのたまはするにつけても、郭公にやつけましなど、あはれに御覧ぜられけり。	題知らず	詠人知らず	なき人のやどにかよはば郭公かけてねにのみなくとつげなむ	古今	855	哀傷	哀傷
40	13	29	127	延子	女御今はただ、この嘆きは、わが身のなからんのみぞ絶ゆべきと、御心一つにとなしかうなし、「いつまで草の」とのみ思し乱る。	不明	不明	不明	不明	不明	不明	感情
41	13	31	128	作者	夜のほどにかはりぬる空のけしきも、いと晴々しく心のどかにて、うらうらゆかしげなり。	冷泉院東宮におはしましける時、歌たてまつれとおほせられければ	源重之	吉野山峯の白雪いつきえてけさは霞の立ちかはるらん	拾遺	4	春	季節
42	13	34	131	延子	御前の梅の心よく開けにけるも、これを今まで知らざりけるよ、「わが身世に経る」など、ながめさせたまひける、	題知らず	小野小町	花の色はうつりにけりないたづらにわが身世にふるながめせしまに	古今	113	春	感情
43	14	5	145	作者	すべてこの殿の御末々、つゆかかりたまはぬ人なくなりはてたまひぬ。「昨日の淵今日の瀬になる」といふこと、まことに見えたり。	題知らず	詠人知らず	世中はなにかつねなるあすかがはきのふのふちぞけふはせになる	古今	933	雑	感情
44	14	25	166	（延子）	堀河の女御度のは、ただ「いつまで草の」とのみ、あはれにものを思して明かし暮したまふ。	不明	不明	不明	不明	不明	不明	感情
45	15	9	182	作者	かくて世を背かせたまへれども、御いそぎは「浦吹く風」にや、御心地今は例ざまになり果てさせたまひぬれば、御堂のこと思しいそがせたまふ。	題知らず	均子内親王	我も思ふ人もわするなありそ海の浦吹く風のやむ時もなく	後撰	1298	雑	仏教

46	15	14	191	作者	かかるほどに法の灯火をかかげ、仏法の命を継がせたまふになりぬれば、うれしくあきらかなる御世に逢ひて、暗きより暗きに入れる衆生も、この御光に照されて喜びをなす。	性空上人のもとに、よみてつかはしける	雅致女式部	暗きより暗き道にぞ入りぬべき遥に照せ山のはの月	拾遺	1342	哀傷	仏教
47	16	2	206	作者	今はかくと聞しめして、御顔に単衣の御袖を押し当てて立たせたまへるより、御涙のつくづくと漏り出づるほども、「本の雫や」と、あはれにおろかならず。	よのはかなさのおもひしられはべりしかば	遍昭	すゑのつゆもとのしづくやよのなかのおくれさきだつためしなるらん	遍照集	15	■	哀傷
48	16	24	230	作者	中将の君、思ひ寝に寝たる夜の夢に、女君の見えたまひければ、中将殿、	題知らず	大河内躬恒	君をのみ思ひねにねし夢なればわが心から見つるなりけり	古今	608	恋	哀傷
49	16	29	233	作者	木の葉ももろくなり枝にもとどまらず、	不明	不明	不明	不明	不明	不明	季節
50	16	29	233	作者	虫もものの思ひ知りて鳴き、	題知らず	詠人知らず	風さむみ声よわり行く虫よりもいはで物思ふ我ぞまされる	拾遺	751	恋	季節
51	16	29	233	作者	荻吹く風の音もそぞろ寒く、	うへ、ひさしうわたらせ給はぬ秋のゆふぐれに、きむをいとをかしうひき給ふに、上、しろき御ぞのなえたるをたてまつりて、いそぎわたらせ給ひて、御かたはらにゐさせ給へど、人のおはするともみいれさせたまはぬけしきにてひき給ふを、きこしめせば	斎宮女御（徽子）	秋の日のあやしきほどのゆふぐれにをぎふくかぜのおとぞきこゆる	斎宮女御集	15	■	季節
52	16	29	233	作者	旅の雁のたよりなげなる声も耳にとどまり、	物へまかりけるみちにて、かりのなくをききて	藤原能信	草枕我のみならずかりがねもたびのそらにぞなき渡るなる	拾遺	345	別	季節
53	16	29	233	作者	奥山の鹿もいとどいやめに思ひやられ	これさだのみこの家の歌合のうた	詠人知らず	おく山に紅葉ふみわけなく鹿のこゑきく時ぞ秋は悲しき	古今	215	秋	季節
54	18	6	311	山井の尼	「いなや、昔をかしき人とうち臥して物語せしに、千夜をも一夜にと思ひしに、鶏の鳴きしはいかがつらかりし」といへば、げにとて笑ふ。	■	女	秋の夜の千夜を一夜秋の夜の千夜を一夜になせりともことば残りてとりや鳴きなむことば残りて鶏や鳴きなむ	伊勢物語	46	22	男女
55	18	10	316	作者	月のあくまで澄めるも、かの多武峰の少将の「うらやましくも」とのたまひけんも、げにと見えたり。	法師にならんと思ひたち侍りけるころ、月を見侍りて	藤原高光	かくばかりへがたく見ゆる世の中にうら山しくもすめる月かな	拾遺	435	雑	仏教
56	19	14	345	作者	身の中の仏性の、煩悩に覆ひ隠されつるも、今宵の光にや光り出でたまふらんと喜ばれ、暗きより暗きに入りたる衆生の煩悩も、うれしき会の灯明に会ひぬと喜びをなしたり。	性空上人のもとに、よみてつかはしける	雅致女式部	暗きより暗き道にぞ入りぬべき遥に照せ山のはの月	拾遺	1342	哀傷	仏教
57	19	18	352	作者	まこと、「宇治にて実方の中将の詠みたりけん歌こそ、そのをりによかりぬべかりけれ」とこそ人申しけれ。　〽宇治河の網代の氷魚もこのごろは阿弥陀仏によるとこそ聞け　とこそありけれ。	あき、みちつなの中将のきみを、あじろにさそひければ、だうしむがり給ふほどよりはせしやうこのみ給ふこそとありければ	藤原実方	うぢがはのあじろのひをもこの秋はあみだぼとけによるとこそきけ	実方中将集	34	■	仏教
58	20	2	362	作者	女房車多からず、十五ばかりぞある。袖口、衣の重なりたるほど、浦の浜木綿にやあらん、幾重と知りがたし。	屏風に、みくまののかたかきたる所	兼盛王（平兼盛）	さしながら人の心を見くまののうらのはまゆふいくへなるらん	拾遺	890	恋	装束

59	20	4	365	作者	伊勢が「散りかかるをや曇るといふらん」と詠みたりけるもおぼえ、	水のほとりに梅花さけりけるをよめる	伊勢	年をへて花のかがみとなる水はちりかかるをやくもるといふらむ	古今	44	春	自然
60	20	4	366	作者	「幅ひろき錦」と観教法橋の詠みたりけむなどにぞ思ひよそへられける。	ちくぶしまにまうで侍りける時、もみぢのかげの水にうつりて侍りければ	観教	水うみに秋の山べをうつしてははたばりひろき錦とぞ見る	拾遺	203	秋	自然
61	20	6	372	作者	上達部の御禄の有様なん、暗ければえ見えねど、闇の夜の錦にやとまでなん。薫はかくれなきわざなれば、えもいはずしみかへりたり。	はるのよ梅花をよめる	大河内躬恒	春の夜のやみはあやなし梅花色こそ見えねかやはかくるる	古今	41	春	装束
62	20	6	372	作者	上達部の御禄の有様なん、暗ければえ見えねど、闇の夜の錦にやとまでなん。薫はかくれなきわざなれば、えもいはずしみかへりたり。	北山に紅葉をらむとてまかれりける時によめる	紀貫之	見る人もなくてちりぬるおく山の紅葉はよるのにしきなりけり	古今	297	秋	装束
63	21	12	391	作者	いづれのたびの御歩きにかは一つ御車に奉らざりし、このたびこそと、あはれに悲しうて、またおし返し泣かせたまふも、いといみじ。後撰集にあるやうに、　〽ふるさとに君はいかにと待ち問はばいづれの山の雲とこたへん　とある歌、まづこのをりに思し出でさせたまふ。	人のいみはててもとの家にかへりける日	詠人知らず	ふるさとに君はいづらとまちとはばいづれのそらの霞といはまし	後撰	1415	哀傷	哀傷
64	24	1	439	作者	はかなくて万寿二年正月になりぬ。空のけしきもひきかへ心閑なるに、枇杷殿には、今年大饗せさせたまはんとて、いそがせたまふ。	冷泉院東宮におはしましける時、歌たてまつれとおほせられければ	源重之	吉野山峯の白雪いつきえてけさは霞の立ちかはるらん	拾遺	4	春	季節
65	24	12	453	実資	「一日の関白殿の大饗をぞ、殿の有様よりはじめ、えもいはずめてたしと思ひしに、かれは闇の夜なりけり。今日は明らかなる鏡にさし向ひたる心地してこそは。	はるのよ梅花をよめる	大河内躬恒	春の夜のやみはあやなし梅花色こそ見えねかやはかくるる	古今	41	春	装束
66	24	12	453	実資	「一日の関白殿の大饗をぞ、殿の有様よりはじめ、えもいはずめてたしと思ひしに、かれは闇の夜なりけり。今日は明らかなる鏡にさし向ひたる心地してこそは。	北山に紅葉をらむとてまかれりける時によめる	紀貫之	見る人もなくてちりぬるおく山の紅葉はよるのにしきなりけり	古今	297	秋	装束
67	26	13	517	作者	おもしろき桜の咲きととのほりたるが、にはかに風に残りなく散りぬるにぞ、いとよく似させたまへる。	題知らず	詠人知らず	空蝉の世にもにたるか花ざくらさくと見しまにかつちりにけり	古今	73	春	哀傷
68	26	17	525	作者	煙にて上がらせたまふにも、やがて靡きて、いづれの雲とも御覧じわくべくもあらぬにも、御胸ふたがりて、さだかにも御覧ぜられず。	■	（頭中将）	雨雨となりしぐるる空の浮雲をいづれの方とわきてながめむ空の浮雲をいづれの方とわきてながめむ	源氏物語	122	葵	哀傷
69	27	9	29	作者	山の方をながめやらせたまふにつけても、わざとならずいろいろにすこしうつろひたり。鹿の鳴く音に御目もさめて、今すこし心細さまさりたまふ。	これさだのみこの家の歌合のうた	壬生忠岑	山里は秋こそことにわびしけれしかのなくねにめをさましつつ	古今	214	秋	自然
70	27	22	46	（禔子）	「御庄御庄の絹などをすがやかに奉り果てぬことのあやしさに、年返りてぞ御使遣はすべかめる」など聞えたまふ。あはれに頼もしう、おはせぬ世にもあらばいかに心細からんと、まづ知るものに思されけり。	題知らず	詠人知らず	世中のうきもつらきもつげなくにまづしる物はなみだなりけり	古今	941	雑	感情
71	27	24	48	作者	かくて奥山の御住居も、本意あり、心のどかに思されて、年も暮れぬれば、一夜がほどに変りぬる峰の霞もあはれに御覧ぜられて、	冷泉院東宮におはしましける時、歌たてまつれとおほせられければ	源重之	吉野山峯の白雪いつきえてけさは霞の立ちかはるらん	拾遺	4	春	季節

72	27	24	48	公任	「山里いかで春を知らまし」など、うちながめさせたまふに、一日の日も暮れて、二日辰の時ばかり、弁の君参りたまへり。	天暦十年三月廿九日内裏歌合に	藤原朝忠	鶯の声なかりせば雪きえぬ山ざといかではるをしらまし	拾遺	10	春	季節
73	27	27	55	斉信	おのれはまた二なき人の、ただ明暮なきものとかしづきぐさにこれ一人を思ひて、うち見うち見よろづを思ひ慰めて明し暮ししほどに、やがて火をうちけちたるやうにてうせはべりにし後、はかなき栗一つを食ふにつけてもやすく入りはべらず、胸にのみなんはべる、いかがはせん。	思子等歌	山上憶良	うりはめば　こどもおもほゆ　くりはめば　ましてしぬはゆ　いづくより　きたりしものぞ　まなかひにもとなかかりて　やすいしなさぬ	万葉	806（802）	雑	哀傷
74	27	50	77	作者	中納言の君をば、さもやと気色だちきこゆる所どころおはすれど、ただ今はすべてともかくも思しかはらで、ただ昔の伏見の里をのみ、あれまく惜しげに思したれば、大納言殿いとどおろかならずかなしげに思ひきこえたまへり。	題知らず	詠人知らず	いざここにわが世はへなむ菅原や伏見の里のあれまくもをし	古今	981	雑	感情
75	28	4	85	作者	若宮の御年のまさらせたまふべき御いそぎも思しめすに、夜のほどよろづかはりたるもをかしう、あらたまの年よりも若宮の御有様こそ、いみじううつくしうおはしませ。	冷泉院東宮におはしましける時、歌たてまつれとおほせられければ	源重之	吉野山峯の白雪いつきえてけさは霞の立ちかはるらん	拾遺	4	春	季節
76	28	10	95	作者	成典律師僧都になりて、この御祈りの折ふしも、喜び仕うまつりたること、「山口しるし」など、喜び申したまふ。	不明	不明	不明	不明	不明	不明	仏教